第九篇

白耳義から佛蘭西へ

第一

白耳義

其一

BRUXELLESへ

(一)

十一月三日の夕六時に Rhine 左岸の Cöln を出た汽車は，何時しか國境を越えて白耳義の第一停車場にとまつた。大勢出て歩廊を一方に歩いて行くのは，稅關の檢査に行くのであらう。私共は車内に澄まして，物賣りのおかみが持つて來た梨と林檎の紙袋入を　つ買ふ。一袋一法。一法が足らないので，四馬拂ふ。其内稅關吏が入つて來たが，ざつと車内の手荷物に眼を走らして，直ぐ出て往つた。

水さんも歸つて來て，間もなく汽車は出た。

水さんは戰爭中に倫敦に赴任し，今度は社用を兼ねて獨逸を見に來と歸途であつた。岡山縣の出で，私には先輩の一人耶蘇教界には元氣を以て知られた金さんの亡夫人と緣戚の間で，從つて私共の Passport に貼つた寫眞も其處の手を煩はした東京森——寫眞館主も金夫人の甥に當る處から水さんも懇意であつた。日本に居れば柏谷の村に世間はなれて住む私共も，出れば到る處でさまざまのゆかりの人に出會ふ。水さんは私共が倫敦でまだ行くべき宿もきめて居ないと聞いて，それでは巴里に着き次第副支店長の清さんに手紙して Hotel の世話を頼んで置かうから，渡英の日がきまつたら電報で清さんに聞き合はすやうにと，Address を書いて事細かに世話をしてくれるのであつた。戰後の往來芋の子を洗ふやうに何處のホテルも何處の船も滿員で，日本を出る時は歸る船まで豫約して準備に準備，用意に用意を皆して行く中に，無算無謀ぶらりと出かけぶらりと歩いて廻はる私共は，隨分亂暴な歩るき方をするものだ。

1914 年の八月初旬，勢こむだ獨逸の精兵が八朔の潮の如く白耳義に押入つた其道を私共も汽車で走つて居るのだ。時時窓からのぞけば，夜目に黑い隊伍のマアチのやうな林丘や，雪に白い畑や，どんより白い水溜りや水の流れが，眼に映る。汽車は巴里直行で Bruxelles に行くには Liege で乘り換へねばならぬが，多分もう汽車はないので，Liege に泊らねば

なるまい。白耳義の鶯津丸根小一週間獨逸を喰ひとめた健氣な Liege に一夜を明かすはわるくない。戰時氣分では獨白の國境から Liege までは唯一息と感ぜられたが，汽車で走れば中も間がある。私はしばしば時計を見，汽車がとまる毎にもう Liege か Liege かと立ちかけ下りかける。

午後十時と云ふに，汽車はやつと Liege に止つた。忙しく水さんに別を告げて，私共は下りた。思ひがけなく Bruxelles 行きの汽車が待つて居たので，直ぐ乘り移る。

（二）

水さんの汽車が巴里へ去ると，私共の汽車も Bruxelles へ走り出した。

窓の硝子越しに私共は Liege を見廻はす。黑い小高い丘，黑い建物——あれが要塞の跡ではあるまいか。今がらがらと渡つた鐵橋の下にほの白い水の流れ——Meuse の川であらう。電燈がちらもらして居るばかり，夜目には何もよく見えぬ。

Liege も後になつた。外は暗く，轟との音が耳につく。内はがらんと明るい電燈に新しく張つた Cushion の紅が榮えて寒い。疲れた私共は先刻買つた梨や林檎，伯林から殘して來た黑葡萄の甘くないのをしきりに食べる。

食べ終ると、唯譯もなく眠い。相勵まして 肩を かけ合ふが、ややもすれば こくり こくり 倒れそうに なる。

Bruxelles に 着いたのは，夜の 一時 過ぎ。

それでも 居合はす荷夫に 荷物持たして，ほとり近い Palace Hotel に 行く。帳場も 起きて居て，仔細なく 客を 受けつけ，Lift で 四階に 上つた 私共は 廣ゝした 居間と，狹い寢室と，浴室と 三つ つづきの室に 導かれた。Bath つきの室が 四百も あつて，立派な ホテルで ある。

直ぐ 一浴。

ぐつたり 疲れた體を 軟らかい Bed に 投げた時は，二時を過ぎて 居た。

其二
BRUXELLES

(一)

十一月四日。曇。此處も 降つたと 見えて，見下ろす 廣場に 片寄せられて 雪が 殘つて居る。少し 天井は 低いが，三十疊も 敷けさうな 私共の居間から 眺めると，白耳義の 都の半は 建物に 掩はれた 丘になつて，其處には 金ぴかの Dome や 尖塔や 他の どつしりした 大きな 建物が ぽつり ぽつり 群をぬいて 居る。小さいながら 落ちついて 力の入つた 都で ある。

斯く 眺めて，朝の 珈琲を 飲む。砂糖が ある。

私共は 先づ 近くの 電信局に往つて 四千圓 倫敦へ 送金依頼の 電報を 文淵堂に うつ。電報料 75 法。此處の Franc は 殆んど 瑞西に 伯仲し，佛蘭西のより ずつと 高い。

馬車で 高臺の 日本公使館に 行く。瑞西の公使館の 別莊めいて居るに 引易へ，此處のは 白耳義らしく，講和になつて やつと 政府と共に 歸つて來た ばかりで，初ゝしい 何かが そこに 滿ちて居る。適齡を過ぎて 幾程もない 若い 書記生の M 君が 私共を 暖爐に 寄らせ，私共の 旅券が 羅馬で添へた 別紙すら 表裏共に 一ぱいに なつて 居るので，新に 紙を 貼付して 裏書を してくれ

た。日本の旅券は 馬鹿に幅廣で 持ちにくい。他の 小さな ブック仕立てのを 見ると 羨ましくて ならぬ。戰後の 事ではあり，外務省でも もつと 氣をつけて 便利なのに してくれれば よい と 思ふ。佛蘭西に行くについて 私共の 行くべき 領事館や 白耳義の役所など M君は 細かに 書いてくれた。

其甲斐もなく 私共は 早速 佛蘭西公使館に 乘りつけて 間違の第一を やり，佛蘭西の 領事館に行くと 別な Passport 事務所を 教へられ，其處へ行くと 午餐休憩の時間 に なつたので，私共も 一先づ ホテルに 歸つた。

午後は 自動車で 再び 佛蘭西の 旅券事務所行。先づ 白耳義の 出國許可を 將て來い と 當然至極の 順序を 教へられ，急に自動車を 飛ばして 白耳義の役所 に 戻つて 手輕く それを 濟まし，三たび 佛蘭西の 役所に戻つて，兎も角も 手續を 終へた。此處の壁に，"國籍" "職業' など 裏書願書の 樣式に 漢字で 書いて 貼りつけて あるのは，日本人 また 恐らく 支那人の 爲の 愛嬌である。

Passport の まごつきの お蔭で 廣くもあらぬ Bruxelles を 梭の如く 彼方 此方と 飛び交ふた ので，思ひかけない 見物をした。それを もつと 細かにすべく 歸途は ぶらぶら 下町の 大通りを 歩く。店は 賣出し，歩道は 露店，師走のやうな 賑合。人にも物にも しゆつ しゆつ と 煮えくりかへる やうな 熱狂的 元氣が，力を出し切つて 氣がぬけた 伯林の後に 著しく 私共を 驚かす。

四年餘 踏みつけた 獨逸の鐵脚が のいたばかりだ。踏みつけられたものが 一時に 復讐的に 勃發するのが 自然である。歩いて居ると，突如 怒鳴りつける やうな 男の聲を 聞いた。驚いて見ると，それは Chocolat 辻賣りの 婆さんが 觸れ聲で あつた。それは肝に こたへる やうな 勁い 聲で あつた。婆さんばかりで ない。若い 女や 子供の 物賣りの 聲も，勁い 勁い調子で 張り切つて居る。白耳義 と 云ふ 一寸の 虫には，一寸五分の 魂が ありげに 思はれる。傷傷しい程 恢復を急ぐ 其昂奮が，私共を 喜ばせ，また 哀しませた。

店で 地圖，鑛店で 梨葡萄など 買ふ。辻辻に 屋臺車を 据ゑて，貝の 煮立てを 賣つて居る。日本でも よく 見かける 小さな法螺貝のやうな 貝が 多い。磯臭い 香がして，うまさうに 湯氣が立つて居る。蠑螺の 壺燒と云ふ 處だ。一つ 如何と すすめられたが，食べたいが，つい やめた。

それから 二三軒 聞いた後，一の靴屋で 妻は ゆつたりした 絹上げ靴 を 買つた。米國出來で ある。値 85 法。Cöln で 換へる間が ないので 其まま 持ち越して居た 私共の Mark を Hotel で 換へた 法であつた。靴に 限らず 白耳義には 今 亞米利加物が 一ぱいに 入り込んで 居る。

夕食に 食堂入口に 飾られた 綠葡萄が 眼につく。粒の大きさは 瑞西の 大綠葡萄に 少し讓るが，普通のよりは 餘程大きく 楕圓形の珠珠 顆顆 白綠 累累 一房 五百目も ありさう。あまり 見

事なので 取り寄せて 食べる。得も云はれぬ 芳香。甘味も 十分。日本では 勿論，歐羅巴に 來ても 未だ 曾て 食べた 覺えが ない 好い葡萄だ。名高い Muskcat——麝香葡萄で あつた。果物が生命の Adam と Eve, Eden に 歸つた 心地で，粒を ちぎつては 食ひ，つまんでは 食ふ程に，いざ 勘定と なれば 一夕の 果物料が 正に 25 法で あつたには，少し 驚いた。約 拾壹圓で ある。少し 驚いたが，然し 高過ぎるとは 思へぬ程 それは 好い 葡萄で あつた。此 名物葡萄も 戰爭中は 二束三文で 賣られた と 新聞が 述懷して居る のを 先日 讀んだ。

此葡萄ばかりでも 白耳義は 好い 邦だ。

(二)

十一月五日。今日も 曇りだ。午餐後 馬車で Palais de Justice を 見に行く。私共の Hotel の 居間から つい向ふに見る 山の上の 大きな 建物の中 南のはづれに 一際すぐれて どつしりと 構へた Bruxelles 名物の 一つで ある。

正門で 馬車を 下りて，入場料 各 25 Centime を 拂ひ，先づ あたりを 拂ふ 建物の どつしり振りに やや しばし 見惚れた。四千四百萬法を 費やして 卅七年前に 完成した 此"正義の宮殿"は，廣表四萬五千坪を 占め，羅馬の St. Pietro よりも 大きく，正に 十九世紀 で 第一の 大建築と 稱せられる。丘の上に 蹲つて，美

しい 落ちつきを 見せた 豪壯 雄大な 建物の頭は 程よく 中央に 聳えて，金光輝やく 冠の頂は 地上 310 呎の 高さに ある。圓塔の 四隅に 蹲する 四の巨像は，正，法，威，及び 仁 を 象どる もの さうな。何は 兎もあれ，亞弗利加 Congo の 殖民地を 除いて，歐羅巴の本國は 我臺灣にも 若かぬ 小國白耳義として 斯樣なものを 建つる魄力は，頗 人意を 强ふする。而して それが "正" に献げられた 建物で ある事は，一方に 小さな 自分を，他方に 强大な獨逸を 秤の皿に のせて，較ぶる事を 恐れなかつた 白耳義らしくて，私共に 嬉しい 感を 與へた。

玄關から 入る。巨大な柱，薄暗い Court，埃及の 古神殿でも 歩く心地が する。見物が 大勢 歩いて居る。人立ちの 方に 往つて 見る。一つの廣間には，人聲が 何か 述べつつ ある。說教か。否。それは 辯護士の 辯論で あつた。此司法の御殿には，大審院を 初とし 大法廷が 二十七ケ處，判檢事 辯護士 諸官吏の 室が 245，打開いた Court が 八つも あるさうな。私共は 賑やかな部分，淋しい部分と，足に 任せて 歩く。塔頂に 上ると Bruxelles を 中心に 周圍一目で あるさうなが，時間が 過ぎて居ると 守衛は 慇懃に 私共の 上るを 許さなかつた。

Café の 道しるべが ある。私共は 長い階段を下り，曲り 曲りして 其處の Café に 往つた。可なりの人數が 茶菓を 食べて居る。私共は 一段高い 窓側の 卓子に 往つた。此處も 殿堂の 内裏で，玄關からは 大分 下りて居るが，窓からは Bruxelles の 半分

かけて 見渡され，茶の Cup を 片手に 眺めやる 窓の眺望は，Bruxelles の 大觀を 得果さぬ 私共の 憾も いくらか 霽らしてくれる ので あつた。

私共は 滿足して Palais de Justice を 出で，門前で 立賣りの 畫はがき など 買つて 馬車に 乘つた。而して 今度は 他の白耳義名物 Mannekin 噴水を 見に 往く。

今は 約八百年の昔，此 Bruxelles の 大名 Godfrey II と云ふのが，叛臣某を 征伐中 死去したので，他の 臣下は 當歳の嗣子を守り立てて 叛臣征伐を つづけた。いよいよ 戰に臨んで，味方の者共は 兵氣を 鼓舞せん爲に 未亡人の 奥方に 小公子を 出陣していただきたいと 願ふた。尤な 願ひで，危險を覩みず 奥方は 小公子を將て Bruxelles の 市外 六哩の平野に 出陣し，小公子の 搖籃を 柳の枝に かけて，奥方と 老武者 數輩が之を 護つて居た。飛道具は まだ 弓矢の昔である。戰酣なる時，味方の兵士が 不圖見かへると，柳の枝に ぶら下げた 搖籃から ぴゆつと 銀箭が 迸つて居る。兵士等は "Het Mannekin Pist" "うちの 小さい人が小便してるッ！" と 叫んだ。而して 一齊に どつと 笑ふた。笑つて 元氣が 百倍した。而して 到頭 大勝利を 占めた。其戰勝の 紀念に 最初は 放尿坊ちやん の 石像を 建てたが，約三百年前に それが 今の 青銅像に 更へられた。坊ちやん 成人の後は 非常に 勇敢な 大名になり，"元氣者" Godfrey III の 諢名が あつたさうぞ。

市廳の背，もう 黄昏の巷路に 入つて，馬車は 噴水の前に止まつた。下りて 鐵欄近く 寄つて 見る。それは 當歳の子ではなく，髪の ちぢれた 頬の ぽちや ぽちやした 三歳位の 裸男の子が左の手を 腰に支ひ，右の手で チンポコ を つまんで 小便する 像だ。體が 青銅だから，小便は 勿論 水である。如何にも 可愛い。よく 出來て居る。腰つきが たまらなく 好い。此像は 昔 一度 英吉利の 軍勢に 奪はれ，二度目には 佛蘭西人に 持つて 行かれ，約百年前には 放免囚人の某に 隱された さうな。埃及は Cairo の博物館に 並んで 腰かけて居る 古王 Amenhotep III 及び 其妃の大像や，Firenze の David と 共に，これは 私共でも 粕谷に持つて 歸りたい代物で ある。白耳義と獨逸を 秤にかけて，獨逸を重しと 謂へぬ 筆法から，此小さな 三尺の 青銅ぼつちやんは，あの 豪壯な Palais de Justice に ひけは とらない。共に Bruxelles の 名物で ある。

私共は 隣近の店に 寄つて，畫はがきや 小さな 模像など 買つた。馬車に 乘らうと する時，若い 日本人が 三人店に 入つて 來た。髯を かけつつ 遽てて 手を さし出した 一人は，Cöln で 不明に なつた 中君で あつた。

歸途 馬車を 止めて，大通りの 大きな 果物店に 寄つて，黄紅綠紫 眼もあやな 美果佳實の 中から Muskcat 葡萄と大粒の 黑葡萄各一房，柘榴一，及び 樽柿二顆を 買つた。Hotel 値段より 勿論店は 廉く，すべてで 16 法 50 C に 過ぎ なかつた。樽柿は 何處

からと 問へば，London からと 云ひ，日本物だらうと 云ふ。それに 違ひない。二個で 値は 1F50 であつた。一個三十錢である。世界を 一周して 好きなものだけに 何處に 注つても 果物屋が一番に 目についたが，此 Bruxelles の 果物屋ほど 大きく 華やかな 店を 見なかつた。

Hotel に 歸つて，荷造りをする。Cöln で 預けた Portmanteau が 未だに 着かないので，Hall porter に 鍵と 手數料を 渡して，巴里へ 送つてもらう。

夕食後，居間の電燈 明るい處，先刻買つた 果物の 一部を 味はう。柘榴の味の 好さ。それは 私共に それが 花盛りで あつた Palestina の 初夏を 想ひ 起させた。ナザレ附近の 柘榴の谷で 燃ゆる やうな 花の盛りを 見たが，伊太利 佛蘭西 瑞西 獨逸と 廻はつて，白耳義に來て 今 柘榴を 食べる。二つの 檸檬は 案外に 味が 好い，此處の 美果の中に 出ても 特色を 持ち得る事が 私共には 嬉しかつた。今年は 自園の柿に 負くと 思ふたら，白耳義に 來て 檸檬を 食ふとは，嬉しい事である。

總じて 白耳義の 短かい逗留は 私共に 滿足を 與へた。國は 大なるが故に，また 古きが故に 貴からず，活潑潑地の 生命に 滿てるを 貴しとする。佛蘭西の 田舍位に 看做され易い 白耳義は，どうして どうして 儼然とした 別箇の 存在だ。臺灣より 小さい位の本國で 立派に やつて行く 此 Mannekin は，げに 健氣な

ものである。瑞西や 白耳義，往つては見ぬが 和蘭や 丁抹，血のめぐりの 早い 弟達は，大きな 兄さん達より 始末が 好いだけに ヨリ幸福に 思はれる。それは 一面 世界の 行く先きを 暗示して 居るので あるまいか。

第二
HUN の荒らし

(一)

十一月六日。朝八時の汽車で Bruxelles を立つ。夜來の雨が未だ瀟瀟と降つて居る。獨逸の汽車の寒かつたに引換へ，Heat が十分に通つて居る車室は暖氣春の如く，郊外の平蕪，草枯れ殘る牧場に赭い牛は臥し白い羊は立つて居るも，一幅春雨の油畫としか受取れぬ。私共の向ふには，Tiberia 湖畔のホテルで，愛想のない獨逸料理をぶつぶつ云ふて居たあの佛蘭西人によく肖た額の禿げ上つた柔和な商人らしい佛蘭西人がかけて居るが，思はしく話が出來ないのがつくづく遺憾である。

一時間ならずして Waterloo の古戰場つづきの平蕪を走る。ゆるやかにうつ地の波に浮んだやうな遠村近落，野らも道路も秋雨にずぶ濡れて，それが 1815年六月十八日の前夜の雨を想はせる。“あの夜に雨が降らなかつたら，歐羅巴の將來は異つて居た”と Victor Hugo に書かせた其雨だ。然し其時の戰には，聯合軍側が英軍 24000，獨逸軍 30.000 和蘭白耳義軍 13.000 で總數六萬七千，砲 150 門，佛蘭西側が兵七萬一千九百，砲 246

門で，勝負は一日についてゐた。それを今度の大戰に，敵味方の兵數一千何百萬，砲大小何十萬門，戰線何百哩，百年前夢にも見なかつた飛行機やタンクや毒瓦斯など使つて，押しつ返へしつ四年以上も揉み合ふたのに比すれば，百年かかつて人間の惡智慧惡戲も大規模に增長したものだ。敵手が異つても，組が變つても，每も聯合軍側の主腦が英吉利で，小さな白耳義が每も相伴するのも面白い。ナポレオンの幽靈が Kaiser に化けて，百年目に世界的とも云ふてよい Waterloo を演じたのも，奇妙だ。

(二)

古戰場は新戰場につづく。

私共の眼は注意して外に向ふ。ざらざら禿げの小山，眞黑けに物凄いのを戰跡かと見れば，麓に煙突の烟渦まき，鐵軌鈍く光り，蟻の如く人立ち働いて，それは鑛山か製鐵所かであつた。大きな煙突の林立して其處から一吹の煙も上つて居ないのが多かつた獨逸の田舍の町町を想ふ。

汽車は南西に走る。

そろそろ塹壕が見え出した。最早其處に草が茂つて，草の間から露はるる土どめの板壁も風雨に黑むで居る。

樹木が折れて居る。

砲彈の 掘つた 大穴が ある。

Mons に 來た。昨年の 今月十一日 休戰當時 聯合軍の進出線は 此處に 及むで 居た。大破のままは 眼も あてられぬ。

汽車は 尙 南西に 走る。

一の 停車場で 稅關吏が 手荷物と 旅券の 檢査に來, 次の 停車場で また 他の 稅關吏が 手荷物 旅券の 檢査に來たので, 私共は 白耳義 から 佛蘭西に 入つた事を 知つた。それ程 白耳義 と 佛蘭西の 地帶は つづき, 人も 言葉も 同じく, 戰禍を 受くるも 同じで ある。

食事の 時間となつて, 食堂に 往く。汽車のでも 料理は うまく, 小粒ながらも 佳い 香味の 葡萄が 出たが, 私共は 匆匆 に 終へて 歸る。

汽車は 今 正に 戰ひの 跡を 走つて 居る。

私共は 通路の 窓に 立つて, 眼を 瞪る。何れの窓にも 驚いて 言葉はない 乘客が 唯 呆れ貌して 立つて居る。

休戰以來 滿一年。然し 痛手を 負ふて 大地は いまだに 呻き, 人の手に 成つた 市市 邑邑は 聲も得上げず 滅入つて 居る。

砲彈 爆彈 地雷などの さまざまに 掘りくり かへし, 人の手の 掘つた 塹壕や, 砲車 輜重車 などで 大きく 小さく 深く 淺く 廣く 狹く めちや めちやに 傷つけられた 大地の傷は, 草すらも 隱し かねて居る。鐵條網が 意地惡く 生物を 捉ふべく まだ 殘つて 居る。薙いだ やうに 折れ揃ふた 林がある。林檎や 果樹らしい

大きな木が 地上 四五尺の所で 丁寧に 挽切られて居る。挽切つたは 土地の人かも 知れぬが, 獨逸人が わざ わざ 立枯れになるべく 果樹などに 傷つけた事は 誰も 知つて居る。荒された畑が 畑になり, 林が 林になり, 新らしい果樹が 實のるに 到るは, 中と 三五年の 事では あるまい。

野の 傷手は それでも 自然が いくらか 癒しもし 隱しも するが, 人の手に 成つた 市町の 慘狀は 全く 言語道斷で ある。

火事と 地震が 一時に 見舞つた 跡だ。赭い 零落だ。全市 ぐわら ぐわらに 崩れた中に, 片壁ばかり 殘つたり, 四つ壁だけが 殘つたりして 居るのも ある。その 赭い色が まだ 時時 降つて居る 泣くやうな 秋雨に 濕つて居る さまは, 啾啾の聲を 眼に 見るやう。私共の胸は 痛く なつた。

其 甚しい處は 所詮 手は つけられぬ。また 多分 見せしめに 其まま 置いてある 所もある。

停車場などは, 此樣な 赭い 零落の一端 屋根も 何もない 步廊に, 新しい 驛名札 を 立ててある。くづれ殘りの 煉瓦に, トタンを 掩ふて, 假舍に 宛てて 居るのも ある。一ぱい 古釘を積んだ 箱荷車が 私共の 眼を 牽いた。

慘狀の 甚しい處は, 汽車が 特に 徐行して 見せる。私共は 別に 戰跡見物の 下心は なかつた。生命の芽を 喚び起す旅で, 戰の跡を訪ふ 私共の 旅では ない。然し 白耳義 から 佛蘭西へ 眞晝中 通ふて行く 汽車は, 戰跡を 見するものでなくて 何で あら

う？ ブルクセルを 出て 二時間たたず，“あれ あすこに” “おお 此處に” と 戰ひの 跡を 見出した 私共は，Mons に 來て ひた と 駭き，“まあ” “まあ” と 云ひ つづけ て 佛蘭西 に 入つて，Hindenburg 線の 一結節で あつた St. Quentin に 來ると，最早私共は 押默つて しまつた。

全く ひどい。あまりに ひどい。

昔 匈奴の Attilla は 長鎗 大馬 五十萬の軍勢を 提げて 東歐 中歐を 蹂躙し，到る處 焚劫 奪掠 亂暴の限りを 盡して，市に 家 なく，野に草 なからしめた。海嘯の 引くやうに Attilla の 軍勢 が 去ると，歸つて來た 舊領主が，あまりの 荒れやうに 聲をあげ て 哭いた，と 傳へられる。

獨逸が それだ。英吉利人が 獨逸人を Hun, Hun と呼ぶのは 當つて居る。

獨逸の 罪業は 深い。

おお 佛蘭西！ 白耳義！ 全く ひどい目に おまへ達は 會ふ た！ 休戰の時，佛蘭西人が 泣いた 筈。而して 勝つて も 獨逸 を 恐れる 筈。

父母 の なき世 なりし よ 人の子の
たたかひ の あと みるに しのびぬ
あ い

獨逸の 子女に 此状を 見せて やりたい！

それは 却て 彼等の 力自慢を まさせるかも 知れ ません，と 妻は 云ふ。

高慢な者には 全く 其患が ある。

獨逸の 罪業は 深い。私は 此野と 市とに 現はれて居る 罪の 外に，人に現はれた 深大な 罪の 數數 を 知る。

此野を 荒らし，此市を 廢墟に したは，自分達の 大砲ばかり では ない，と 獨逸は 辨疏する かも 知れぬ。數數の罪も 抵抗が 犯させたと 云ふかも 知れぬ。

可矣。皆 ここへ 出ろ。“平和の君” は 先づ “審判の君” だ。

維廉，頭が 高い！

“柔和なる者は 地を嗣ぐ。” 其方は 神を氣取り 暴力で 天下を 取らう と した。失敗は 自然で あるぞ。

一位の 神を 造る爲に，人間が 皆奴隷になる 時代は 過ぎた。一切の爲に 一切が 生き，一切のものに 一切が 仕ふる 時が 來た のだ。生命が 支配する。殺す者は 亡びる。

一切の “維廉，” 頭を 下げよ！ 一切の “獨逸，” 眼をさませ！

古いものの 時は 過ぎた。

今は 新天地の 開闢である。新紀元の 第一年 である。

（三）

斯く 心に 叫びつつ ある間に，私共を のせた 汽車は ます

ます 南西に 走つて 行く。

少し づつ 破壞の 手の痕が 減つて行く。 煉瓦を 補ひ，塗り直し，トタンを 掩ひ，などして 兎も角も 町の 體裁を なして 居る 町が ある。野らにも，人手が 入つて 見える。

追追 傍目には 戰の後とも 見えぬ 和平な 都近い 田舍の 雨の 夕暮に なる。

午後四時，汽車は 巴里に Gare de Nord に 着いた。

私共は 同室の 老紳士に 會釋して 下り，此處は 男の荷夫が 雇ふて くれた 自動車に 乘る。 出た時も 雨だつたが，歸る時も 雨だ。

雨の夕暮，電燈が ついて さまざまに 賑やかな 巴里の 市内の 雜沓を 縫ふて，自動車は Hotel St. James & D'Albany に 着いた。

帳場や 玄關が 歡び 迎へる。 伯林から 私の出した 手紙が 今朝 着いた さうで，私共は 少し 休憩した後，私共の 以前の 室に 入る事が 出來た。

九月の 廿八日に出て，十一月の 六日に 歸つて來た から，私共の 旅中の旅は ほぼ 四十日 を 要した。 居た頃から 一葉落ち 二葉落ち して居た 窓の外の 橡は，悉皆落葉して 赤裸に なつて居る。

我宿の 橡は 裸に なりにけり

Alps Rhine と 經て 來ぬる 間に

橡は 裸になつても よい。 私共は 瑞西，獨逸，白耳義 と 廻つて 無事に 巴里まで 歸つた。巴里は もとより 柏谷では ない。然し 旅中の 旅には，出た所が 故郷で ある。 其故郷に 歸つた。歸るは 嬉しい ものでである。

第三
佛蘭西（二たび）

其一
EIFFEL 塔上から

（一）

四十日ぶりに巴里に歸つて もとの古巣に もぐり込むだ私共は，巴里に對する 畢竟 佛蘭西に對する親しみの倍して 覺ゆるも 自然であつた。樣は 裸になつて 居た。內庭の Geranium や 色色の花は 萎れて 居た。然し Hotel の 人人は初の客の 受け得ぬものを 私共に 與へた。馴染は 寔に 好いものである。顏馴染の客は 大分 去つて居た。然し H 代議士は まだ居た。私共の 隣の食卓に就く 亞米利加人の 家族も居た。これは英吉利 らしい 益んで來たいやうな 五歲位の 可愛い 男の子も 居た。魚を 釣るのだと 云ふて 二階から 紐を 垂れて居た その紐を 私が 下から 引張つて，“大きな魚，大きな魚”と きやつきやと 彼を 悅ばせた 其男の子である。Hotel に 歸ると 早速 私は其子の手を 握つた。例の 澄ましに 澄ました おかつぱの 少女と

其可愛い 男の子は，私共が 歸つた其夜 扉を 叩いて來て，亞米利加 赤十字 寄附の 勸化に，私共の 乏しくなつた 旅囊から 一も二もなく 十法を 喜捨させた。而して 明くる日の 食卓で，少女の母は 寄附の 禮を 云ふた。

（二）

歐羅巴は，就中 巴里は，今 亞米利加 洪水が 漲つて 居る。船毎に 夥しい 客來の 大部分は，亞米利加からである。何萬 何千の 亞米利加ッ子が 佛蘭西には 葬られて居る。其墓參や 戰場を 吊ひに 來るのばかりでも 夥しい は 知れて居る。米國の 獨立戰爭に，佛蘭西から Lafayette が 海を 越えて 援兵に 往つた を思へば，佛蘭西の 存亡の岐るる 今度の 戰爭に，亞米利加 が 一肩ぬいたも 自然の 押韻で あらねは ならぬ。同じ July に 國祭日を持つ 兩共和の 間に，自然の 溫かいものが 通ふて 居るは，是れ亦 當然の 事で あらう。何を 云ふても “美” は Madame France を 推す。Rhine の 向ふの Raüber は，俺の有に なれと Madame を いぢめる。海峽向ふの Pirate は，昔から Bull 式執心で，しつこく いぢくつては Jean d' Arc を 飛び出させ たり，猫の手を借る 猿もどきに 加奈陀でも 印度でも 乃至 埃及でも Madame の後に 廻はつては 引つたくつたりして，散散 嗤嘩の 揚句は 到頭 女房にしてのけた。北の熊さんも 曾てはおつに 解づく

ろひして 亭主を 氣どつた ものだ。Madame には 男のみか 女も 惚れる。長靴の女 なんかは，Lire を Franc と 云ひ，其處の めかした 女人達は Parisienne 以上に Parisienne を 氣どつて 居る。大きいものが 眞似れば，小さい國でも 眞似る。もう 活力が ない，老けた，衰へた，と 今にも 死にさうに 云はれつつ Sarah Bernhardt のやうに Madame France は まだ まだ 見られる。皆 何かと 關係 を つけたがる。亞米利加のやうに 物資の豐富な 國が 結び易いは 爭はれないものだ。フランが やすいので 外との取引は 損をする，寧ろ やすい同士の マアクの 獨逸と 經濟同盟を 結んだが よい と 謂ひつつ，佛蘭西の Prize lottery を 英吉利の 士官が 買へば，紐育裝飾品店の Miss 某 何と店の Mr 某は 巴里一流の Hotel に 泊つて，しかじか と 巴里版の New York Herald に 吹聽させつつ，亞米利加の 女達を 美しく する爲に 何千萬弗の 夥しい 仕入れに 來る。さまざまの 者が 來ては，さまざまの 金を 落して 行く。何と云ふても，戰慄霽れて 佛蘭西は 氣を よくして 居る。受けた 痛手は 思ふにまして 癒えつつある。四十日前 珈琲紅茶に サツカリンばかり 出した 私共の Hotel に 歸つた朝，"砂糖は 浮山 あります" と 給仕長が 得と と 山盛りにした 砂糖壺を 惜氣もなく さし出したのを 見ても，快復の程は トせられる ので あつた。

(三)

私共は 巴里に 歸つた 翌日，十一月七日，雨中 自動車で 大使館に 往つた。昨日 ホテルに 歸ると，十月卅一日 天長節の 招待狀が 大使館から 來て居た。それへ 出たら 色色 面白い事もあつたで あらう。留守で 其機會を 逸した。講和の 後始末が まだ まだ 長びき，今まで 別里帶で やつて 居た 各部門の關係事務所も 經費上 大使館に 一まとめに なる都合から，大使館は 引越すさうで，椅子 卓子には 番號札が 貼られ，書類 書籍は 荷造りされ，大使館は 節季のやうな 取込みで あつた。其中で 宗君は 私共の爲に Passport に 裏書きし，警視廳と 英吉利の Control Office に 紹介狀を 書いて くれた。それは 私共は 成る可く 急に 英吉利へ 渡る事に きめた からで あつた。

大使館から 自動車で 私共は Bon Marché に 往つた。而して 妻は 此處で 絹のやうに 軟らかい 鼠茶羅紗の 旅衣を 誂へた。價は 450 法。出來次第 倫敦大使館宛に 送つて もらう。保の婦人は 十八年前 倫敦で 同じ 下宿の 日本人某を 識つて居たと 云ふて，特に 厚意を 表して くれた。妻は また 其外套と，昔から 持ちふるして 今度もかけて居る 毛皮の Scarf に 釣合ふた 帽を 110 法で 買つた。これは 彼女の 附屬物の 中で，一番巴里らしい 氣の利いた ものでは あつた。私共の爲に 通辨を したり，帽を見立てて

加勢したり した 六十近い 店員は，私が 巴里の 景氣の 間に 對し，Bon Marché には 無いが，巴里も 毎日の やうに Strike が あつて 困る，皆働くのが いやになつて 困る，と こぼして 居た。あんな 大戰に 力を 出し切つた あと，疲れが 出るのは 自然であらう。よく 梶を 取つて 行く事だ。時が たてば 平生に 復へる。心配した ものでも ない。

Bon Marché から Hotel に 歸つて 午餐し，尙 自動車を 飛ばして 警視廳に 行く。二度目で 勝手が 分かつて居る ので，左まで まごつかずに 手續が 濟むだ。

直ぐ 其自動車で 英吉利の Control office に 行く。受付けで Passport を 渡して 番號札を 受取る。Office の 待合は ーぱいであつた。日本人の お蔭，また 恐らく 夫人携帶の お蔭で，渡された 番號札の 番號より 早く 呼び入れられたのは よいが，小使の 男 ぴゆうと 口笛で 呼び入れたのは，犬好きだけに 犬に されたやうで，尾をふつて入る氣にも なれなかつた。私共は 默つて入り，番號札と共に 大使館の 紹介狀を 出した。頭の禿げた 背黃の 係は，紹介狀を 見ると 突と 奥に 入つたが，やがて Type で書いた 書面を 持つて 出て，

"あなたは ロクワ と 云はれる の ですか？"

私は 少し 驚いた。十三年前に 捨てた 私の 雅號に こんな所で 出合ふ氣は なかつた。

"え，それは 私の Pen name でした。"

"Pen Name，成程。"

意を 得たやうに 頷いて 係官は 物やはらかに 然し 明白に私共の 旅行目的，滯在期限を 問ひ，裏書すべく 奥に 往つた。

私は 彼の 手にあつた Type で 書いた あの 書面について 揣摩した。ちやんと お觸れが 廻はつて 居る。無理は ない。新嘉坡で 注意され，埃及で 注意され，それに エルサレム から Lloyd George さんに 嬉しくない 手紙など やつた から 注意人物になつて居るのだ。Cöln からの 汽車で 水さんの話に，Lloyd George 君は 個人的に 澤山の 諜報者を 持つて 居て，內閣の誰よりも 內外の 事情に 明るく，先月の 鐵道の ストライキの 時なども 早くから 形勢を 見て ちやんと 打算が 出來て居た，と云ふ事だ。活きた人事の 當面を 料理する人に，其心がけは 無くて 叶はぬ。何れにも せよ 戰後事多い中に，ぶらりと 出かけて來た 私までが そんな 手數を かけたは 氣の毒だつた。後悔は 出來ぬが，氣の毒 には 思ふ。

係官は Passport を 持つて 來た。渡英の港は Havre と きめられた。英佛海狹は 荒いと 云ふに，Havre から Southampton は一番 長い 航路だ。妻は 船に 弱い，Calais で なくば せめて Boulogne から 渡りたいと 私は 言ふたが，係官は いつかな 聽いて くれぬ。

"Oh, you are inexorable！——あなたは ー 兹ですね。"

と 詮方なしに 私は 言ふた。係は にこり 微笑して 居た。

私は Havre で 失慢した。入國 罷成もぬ と 刎ねられても 詮方はない 私共だ。

いよ いよ 渡英の 手續が 濟むだので，私共は 自動車を Opera 近くの Cook の Office に 飛ばせて，倫敦迄の 一等の 通し切符を 買つた。二人で 146 法。此頃は 法が やすいので，倫敦巴里間の 往復 切符は 巴里で買ふ方が 割がいい と 謂ふて 巴里で よく 賣れる と 新聞に報じて居る。私共は 往復は 買はなかつたが，持ち越した 瑞西の紙幣も，此處で 英貨に 換へた。戰場見物の 客などで，此處は 破るるやうな 繁昌だ。それから 電信局に 往つて，Cöln で 水さんの 注意の通り 倫敦の 清さんに "十一日 着く。Hotel は ?" の 電報を かける。

此頃は 倫敦 巴里間に 定期の 飛行機往復が あつて，米國婦人の一人は 倫敦から 一睡の中に 巴里へ 來たと さへ 傳へられる。英佛海峽の浪に 搖らるるより，一思ひに 空を飛んで 倫敦に 往きたい心が 動いて 止み難いので あつたが，過去に 何一つ 成した事もなく 前途に 多大の仕事を 持つ 私共は，生命を 惜む 義務があるので，空飛ぶ鳥の 快い道を 斷念し，おとなしく 地の上 水の上の 道を とるに きめた。

（四）

十一月八日。こつ こつと 朝 扉が鳴る。あけると 郵便配達が

書留を 持つて 來たのだ。それは Bruxelles から Portmateau の鍵を 送つて來たのであつた。

午後 自動車で 雨中を Printemp Magazine に 行く。非常な 雜沓。妻は 茶色の Blouse 外品を 買つた。

歸りに Cook に 寄つて，汽車の座席を 豫約する。Havre 迄。向ふは 分からない。

いつもの店で Chocolate を 飲み，Chocolate を 食ひ，Chocolate を 買ふ。全く 巴里の，而して 此處の Chocolate は 何處のよりも 甘い。

＊　＊　＊

せうがくかう を でた ばかりの，まん 十六 にも たらぬ みで，おちやのみづ の ぢよし かうとう しはん がくかう に せきを ゆるされた わたくしは まだ そのころ までは けふくわしよ さんかうしよ なども きまらず，なにもかも くじゆ ひつき で ペンの ちようほう さへも しらず，ゑんぴつ と もうひつ の 二ぢゆう の せめくに うんざりした わたくしは，なんにも あたまには いらなく なつた。ただ 一つ 三十ねんごの こんにち まで みみに のこつてゐるのは フランス パリ の やきぐり の はなし。"がくせいが おほぜい れつ を つくつて ゆく とき，よく パリ では やきぐりを つじで うつて ゐるので，ぜんれつ の たれか が ぽん と かねを ほる と，とうれつ の ものが やきたての くりを うけとる，おほいそぎで てから てに わたし あひ，みち みち

たべながら いつたり したが，そのくりの うまさと いつたら”とめを ほそくして，フランス じんの アルサアス ロオレンの かうがい ひふんの はなしと ともに，パリ がへりの ちりくわの 野けふじゆの はなしは さいかうちやうに たつした。こどもげぬけぬ そのときの わたくしは それゆゑに フランスに ゆきたく おもふた。わたくしは はなしのたねに このはなしを をつとに はなした。それから かれこれ 三十ねん たつた。そして ゆめで なく しんじつ わたくしは いま をつと とともに パリの まちを すみなれた ひとの やうに ゐるいて ゐる。ある ひろてんに ただならぬ かうきを きいた。わたくしは‘あなた，やきぐりを うつてる やうです，かつて いきませうか”“ヨシ かつて いかう”と わたくしたちは すこし あともどりして 1 F だした。ストオブの やうな おほきな かまの うへに，あつい きれを おふて，やきたての くりが たくさん できて ゐる。さんかくの かみぶくろに いれて くれた あつたかい やきぐりを，わたくしは あかんぼう でも だいたやうに うれしい かほして ホテルに かへる。ふたりは しようねん しようぢよの こころもちに なつて さつそく たべた。かわが ぼこりと とれて，その あぢと いつたら，トウキヤウで，シナの あまぐりは たくさんうつて ゐて わたくしたちも よく たべるが，それどころでは ない，しぜんの あまみで，もすこし おほつぶで なんとも いへぬ。これでは なるほど 野けふじゆの りふがく きおくに いろこくの こつた

はづと わたくしたちは うわさしながら けふじた。

あい

＊　＊　＊

私共の 佛語は 依然 單語の 域を出ない。買物をするに，伊太利では Quanto?——いくら? と曰ふた。獨逸では Wieviel? と云ふた。佛蘭西では Combien? だが，私は 舶來の 藝者でも 言ひさうな 此コンビアン? を 忘れて よく Bianco? と云ふた。Bianco は 伊太利語の“白”だ。私が Bianco? を 使ふと 佛蘭西人が 此日本人は 佛蘭西人の 知らぬ 佛蘭西語を使ふ と云ふやうに 怪訝な顏をする。妻 が氣にして‘違ひます”と云ふ が，私は ともすれば お氣に入りの Bianco? を使つて 困つた。

私共の Hotel に 殘した 荷物の内，帽子匣が 見つからぬので，Hotel に 歸ると 私は Garçon を 案内に 地下室に 下りて見る。料理場，飲料客 などに 並んだ 一區の 荷物室。澤山の 鞄や 匣や 箱の 中から 私は やつと 自分達の 帽子匣を 見出した。夥しい 鞄の數である。匣の有無を 氣遣ふて 下りて來た Hall Porter に 聞けば，此中には 預かつて 最早 九年に なるのが あるさうな。

（五）

十一月九日。日曜で，近來に無い 美日 床屋を 呼び，Bath

room で 髪を 苅つて もらう。香港で 一度，Damascus で 一度，Firenze で 一度，これで 四度目で ある。いつも 五分苅で あつたが，巴里の 床屋さんは 全く 巴里風に 苅つて，七分三 に 分け，顔は 奇麗に 剃り，心ばかりの 蠟燭に 火を つけて 後頭部から おくれ毛などを ぢりつ ぢりつ と やいて くれた。私は妻を 呼んで 其毛を やく 手際を 見せた。床屋さんは，摘髪料 六法を 收め，美髪水だと 云ふて 私の頭に つけた殘りを 八法で 妻に 賣りつけて 罷つた。鏡を 見ると，髪を分けて びつくりした樣な 顔が 私に 向ふ。これが 自分かと 疑ふ。始終 五分苅りに して居る 私，髪を分けた は 正に 三十年ぶりで ある。

倫敦の 清さんから Kensington Palace Mansion Hotel に 一室を とつた，と 云ふ 返電が 朝 來た。海峽を 隔てても，英佛の間は 近い。倫敦の宿も 出來た と 謂ふので，私共は もう 片脚英吉利に 渡つた 心地に なつた。日曜は 巴里の 電信局 皆休みで，唯 Bourse の局が あいて居る。夜に 入つて 私共は 其處の 地下室郵電局に 往つて，清さんに 謝電を うつた。

午後 自動車で Champs Elysées に 往く。日曜で 夥しい人出。街路樹の 鈴かけは，已に 盡く 一たびは 落葉して，此頃の 暖氣に 欺されてか そのあるものは 再び 若葉が 出かかつて 居る。Salon の 展覽會 が あると 聞いて 來たが，それは 古い 美術展覽會で，入る事を 見合はせ，心地よい 歩道を しばらく 歩く。山羊に 車を 引かせた 子供連れの 家族などが 居る。あらためて 凱旋

門 を 眺める。つい 先日 飛行機で あの間を ぬけた者が あつて，それが活動寫眞に なつて 居るさうな。二たび する者が あると よくない と 云ふので，政府で 取締つて 居ると 云ふ 事で ある。此樣な 手際に かけては，佛蘭西人は 確に 兄弟の 中で 一頭地を抽いて 居る。

凱旋門は ナポレオンの 命令で 1806 年 起工され，ナポレオンが 死んで 大分經つて から 出來たものだ。高 160 呎，幅 164 呎，奥行 72 呎，世界一の 凱旋門と 稱へられる。其位置が また よい。小高い處に あつて，八方睨みの 要衝，それから 太陽の 光芒の如く 射出された 大路は 一目にして 眺むべく，また ナポレオンの 見た如く 據つて 八方を 掃射する事 が 出來る。五十年前の 獨佛 戰爭後，巴里に 内亂 が あつた時，政府軍 ： 此處に 據つた敵を追ひ拂ふに 大骨を 折つたと 云ふ事で ある。折角の 凱旋門も，ナポレオンの 間には 合はず。1870 年 には 勝ち誇つた 獨逸軍が 此處を 通らんと したので，それを 通させじ と 巴里人が 身を以て 垣をつくつて，到頭 通さなかつた と 傳へられる。それから 五十年來 張つてあつた 通行禁斷の綱を，昨年 休戰後 間もなく 英吉利王 George V 世の 巴里來訪の時 初めて 開き，今年 講和條約調印濟んで 七月十四日の 大凱旋に 大大的に 開いたので ある。それが 飛行機の 腕試めし に 用ゐられる のは，凱旋 の 意味が 新らしく なった とも 云はれる。

私共は Champs Elysèes を 後に，晴れ 晴れした 亞歴山三世

橋を渡つて，セエヌの Quay d'Orsay の河岸をぽつぽつ彼方に聳えて居る Eiffel 塔に來た。脚は一町歩に跨り，頭は約一千尺の蒼空に聳えた此鐵骸骨の巨人は，何と云ふても優にやさしい Madame 佛蘭西の氣魄を示す好箇の料である。戰時には無線電信や展望哨に屈竟の用をなした。Kaiser は此塔の頂邊に獨逸の大旆を翻へす心算であつたさうだが，まだアメロンゲンで其樣な夢を見て居るかも知れぬ。

入場料二人二法を拂ふて塔に上る。百人乘の昇降機が日本流に謂ふ二階に通ふが，私共は物好きに階段をめぐりめぐりて二階に上る。二階でも 186 呎地を抽いで居る。Restaurant や Café や芝居やが並んで，街上を歩く心地がする。此處から五十人乘の Lift で三階に上る。斜になつた鐵脚の網目の中を，Lift は緩やかに斜に上る。

三階に來た。此れ以上は今は昇るを許されぬ。然し三階でも 377 呎の高さである。此處にも Café や茶店が四百呎近く空中を忘れしむる。

私共は地圖を片手にぐるりと眺めて廻はる。秋の空水色に霽れ，秋の日傾いて金光隈なく巴里と其四圍を照らして居る。周圍十五哩，人口三百萬を住ます巴里は私共の眼の下に殘りなく自己を露はす。東から西へ流るともなく流れて光る Seine の流れ，Seine を界に六分は北四分は南にたたずまふ町のさまざま，Notre Dame は中島に，Champs Elysées の

大通りはうようめく蟻と人を見せ，廣場や公園や，あらゆる人のいとなみは夕日に榮えて私共の眼の下に展けられた。直ぐ下の Champ de Mars の公園の區劃の模樣面白い芝生や並木，人巧も中々自然に負けぬ。輪轉觀望車の尨大な輪が，親類貌して彼方に頭を擡げて居る。而して私共が立つ塔の大きな黝い影が向ふざまに横たはつて居る。それは二十九年前に富士山頂で私の見た影富士を想ひ出させた。

西南の方は，うねうねと巴里郊外の人煙絶えてはつづくあなた，巴里をはなるる十二哩，天末に夕榮えた雲の丘に低るる處，それかとばかり指ささるるが Versailles である。新古とりまぜ色色と歴史の上の想出多い Versailles を今度は遠望に止めて置かう。

然し何と云ふ今日は好い霽れだらう！連日の雨の中から今日を晴れと霽れた此日は，明日立つ私共に心ありげな巴里——佛蘭西が別れの挨拶ではあるまいか。それは瑞西の Bern のすぐ前た私霽の一日が，殘りなく Alps の觀兵式を私共の前にして見せたと同じく，佛蘭西が思ふさま美しく自己を見せるのだ。

私共は滿足し，而して巴里を祝し，佛蘭西を祝した。おお France よ，Madame よ。人は卿を老いたと云ふ。卿の盛りが久しいからさう思はるるも無理ではないかも知れぬが，それはあまりに自然を見くびつたものであらう。輝やかしい過去

を持つものが，尙輝やかしい 未來を もたぬ とは 誰がきめて しまつた 言で あらう？ 死生 命あり，消長 如何ども し難いものが あらう共，Madame よ，卿は 奮つて 新に ならねば ならぬ。卿が 今迄 人類に盡した 功績，人類の爲に 苦しんだ苦を，若し 忘却すれば 人類の 禍で ある。卿の 最近に 苦しめられた 苦しみを 共に 苦しまねば，それは あまりに 無情で ある。卿は 苦しんだ。だから 卿の生命は 新になるに 違ひない。

Vive la France!

其二

ふらんす の おんな

パリ といへば ちはう から トウキヤウ を さうざうする やうに，パリのおんなと いへば みな おしやれ が しごとで，あそんで くらしてでも ゐるやうに，とかく おもひたがる。せんさう の あとだ からでも あるが，わたくしたちが イタリイ から パリの ステエシヨンに つくと，まづ てにもつはこびの くるま を おしてくる のは わかいおんな，かいきつ がかりも おんな で，みな くろふくの そろひ。おほぜいの をとこを せんさうに うしなつた フランス の おんな は かく ちゆうじつ に はたらいて ゐる。

ホテル に ついて も ウエエタア は みな おんな。ここも くろぢのふくに しろい レエス の ゑりを そろひの むすめたち，すこぶる ぢみで，おんならしい たいど は おちついて，うれしいかんじ を あたへる。イタリイ おんな の けいくわい，スヰス おんな の ひきしまつた，ドイツ おんなの きびきびした はたらきぶり，ベルジユム おんなの くわいくわつ と，それぞれの ちやうしよ たんしよ が あるなかに，いちばん おんならしい やさしみが あつて，なほかつ こまやかな はたらきぶりを みせてゐるの

は，なんといつても フランス おんな，と わたくしたちは おもつた。わたくしたちの 二かいの へやの とちのき の まど から，なかにわ を へだてて，むかふしたが おほきな しよくだう になつて ゐて，よく おんな きふじたち の にちじやう が みられる。ホテルの おきやくの あさの しよくじ は，ばら ばら で，あさの七じころ から 十一じころ までも だんぞく ある。これが にほんの おんな なら，そつぼう むいて さらを だしたり，うはのそらで てばかりで きふじ したり，あくび を かみころしたり，さもなくば ぶつちようづら，もしくは おきやんすぎて あきから おほごゑ あげて たちふるまふ。ぜんど ざつと ひとつき の とうりうにきをつけて みてゐると，しよくじ の あひま には よく あみものしたり，ほんを よんだり，かいたり，ときには にさんにん よつて はなしてゐる ことも あるが，わかい おんなの あつまりにありがちな，はうじゆうな きやつきやと わらつたり する こゑはいちども きかぬ。ぎやうぎの よいもので あつた。

あるとき わたくし の をつと が，おなかぐあひ を わるくした。のみみづ の かはり に おゆ を いひつけ たら，十ばかり のテエブルを うけもつ わたくしたち の きふじ おんな は，しよくじの こみあふ いそがしい なかにも，たびごとに あついゆ と ゆのみ を いちども わすれ なかつた。こちらから もうよい と ことはるまでも。

みちゆく おんな の きもの の いろ，ぼうし の うつり めだ

たずに，どこと なく ちようわ が よい。うりだし の ひ に ルウブル マガザン に いつて みると，いろいろ あるうちに ぼうしのしんを うつて ゐるのが めにつく。みな いろいろの かたちの うちから，じぶんのすきな のを えらん で かつて ゐる。きれぢ やかざり は じぶんで くふうして つける のである。

しゆみ は ひと おのおの かほ かたち が ちがふやう に，おのれから うまるるもの で なくては ならぬ。たにん に よつて こさへた みのまはり が，なんで じぶん に きいてきで ありえやう？ みだしなみは その けんそんな こころ から うまるる しゆみの はなで なくては ならぬ。じぶんで みて，じぶんで きめて かふ ので，かひてと うりての あひだ が かんたん に すむ。みづから の あたま で これを かはう と ばつちり きめて かかるとき，フランスほど なにかと かひやすい ところが あらう か？ みつごし しろき あたりで みるやう な うりて を ひとりぢめ に など して ゐない。てんゐんの をとこ でも おんな でも もつとしんせつ な うりかた を する。ちいさい かひて にも ちゆうじつ である。それは じぶんの しごとを，じぶんの ゐち を ぞんざい に おもつて ゐない から。

せんたく は なんと いつて も おんな の こころを みする はたらき で ある。どゐんにわたる たいせん の あとと いふにとかく ぞんざい に なりやすい ばあひ，ふてぎは でも だれ でも ゆるきうと まつてゐやうな ばあひだのに，わたくしの たのんだ

せんたくものの ちいさいものまで，なんといふ まつしろになりやう！なんといふ のりのかげんのよさ！なんといふ アイロンの てぎは で あらう！ゲブルカラの をりめ の ふうわり と まるやか に，これでは あたらしい つくりたて よりも かへつて よい。これまでの しよこくにも，このてぎは は みなかつたが，それから イギリス アメリカと まわり，さいごに ニホン トウキヤウの じやうず と いふ せんたくや に たのんで みても，ああ この ふく，この ぷらうすを，パリ に たのみ たい なあ，と なんど わたくしは いつた こと やら。

わたくしたちは ひところ，バラのはなに こつた ことが ある。いろいろ の うつくしい はなの うちに ふるく ゆにふされて，“La France” と いふのが ある。ニホンな では “天地開” と いつて，そと が ももいろ で，うち が しろの やへ の やさしい いろ かたち，すずしい かをり は なんとも いひやう がなく，たに くらべる ものが ないほど の はなで ある。“ラ フランス” とは，よくつけた ものだ なあ，と わたくしたち は はなしあつて ゐた。

こんど パリ に きてみると，なるほど そのなの やう に “ラ フランス” は パリの おんな で あつた。フランス おんな は いま じふぶん に さいた “ラ フランス” の はな で ある。こんど の いくさで，アメリカ をとこが おほぜい フランス に えんぺい に きた。そうして フランスおんなに すつかり みせられて しま

つて，つまにして かへるものも ゐほく，なかには フランス に ゐぢゆう する をとこ すら ある と きく。また ニホンの をとこ でも とくしよしである ひとが フランスおんなを つまにして さくわん を しごとにして たのしく くらして ゐる ひとや，おやきやうだい と えんを きつても と フランス おんな を あいしてゐるひとも ゐる。これは フランス に をとこ が すくなく なつたから ばかりでは けつして ない。また よの ひと が おもふやうに フランス おんな の たんなる いろか で ばかり，かくをとこの こころを とらへる のでは けつして ない。

いはゆる おんなの なかの おんな だからで，うち と そととが うつくしう はなに さいて ゐる，いはゆる “ラ フランス” の はな と おもはす ものが ある から である。それは フランス おんな にも しんぼ の よち は，かならず ある。が，とかくかたはに なりやすい おんな の うちで よく さいた はな は フランス おんな と いはねば ならぬ。

ざうくわ などが せかい いち で あるのも たうぜん で あらう。

Vive “La France”!

あ い

其三
巴里を後に

(一)

十一月十日。あの美日の昨日の今日はまた雨だ。全く昨日は特別であつたと見える。昨日は心を明す日，今日は名殘りの雨かも知れぬ。全く大陸には私共の心が殘る。第一に行きたい露西亞に行かれぬ遺憾。それから瑞典那威や丁抹和蘭，獨逸よりも餓ゑてばらばらになつた氣の毒な墺地利，Balkan諸邦や土耳其，西班牙葡萄牙も往つて見てやりたい。然しそれ等を今度は見ずに行かねばならぬ。

落葉して裸になつた椽の窓，小雨そぼ降るほの闇いテエブルで私はしんみりした心で數通の手紙やはがきを書いた。季の姉に書いたPlace de Concordの畫はがきは，三番目の姉の娘で其良人と横濱に別れに來て二時間と云ふもの立てつづけに私から叱られた姪にガリラヤ湖畔から私の書いた畫はがきと共に，日本を出でてこれまでに"血"に書いた唯二本のたよりである。Napoliの下君やまた外に二三本のはがきを書いた。

拂ふべきを拂ひ，與ふべきを與へた。來べきものは白耳義

からのPortmanteauも着いた。出發前一時間赤ら顔のHall Porterが息せき切つて一の紙包を持つて來た。それは折よく屆いた伯林からの私の誕生日に撮つた私共の寫眞であつた。唯一つ瑞西のGenèveで出してもらうた買物の小包が，四十日經つても終に着かない。新聞にも毎々苦情が出て居る通り，戰後止み難い事であらう。現に日本から私共宛に出した郵便物電報の不着なのもあれば，羊羹や梅干や其他食品の小包などはてんで一つも着かないのである。

夕食を終へると，私共は前後一月近く私共を旅ながら家居の如く安住さしてくれた椽の木の蔭の靜かな私共の室や帳場や食堂玄關の人人に別を告げて，自動車でGare de St. Lazareに往つた。今夜の出立も雨である。

(二)

汽車は可なりこむだ。豫め座席をとつてあるので，難なく腰は下ろされた。ボギイ式列車なので，佛蘭西に於ての最後の夜食も快くとつた。唯一つのMishapは，私が手提鞄を取り下ろすとて，Milanoで買つた魔法罐を破つたことである。

三時間雨闇の夜を北へ走つて，汽車は十一時Havreの港に着いた。荷夫が居ないので一心配したが，最後になつてそれも出て來た。直ぐ船かと思ふと，埠頭まで電車で往くので

あつた。雨は止むだが，地は ずぶ濡れの 水溜り，空は 眞闇で 物凄い。

電車は 滿員。私は 此方 妻は 少し はなれて 向ふに かける。妻の隣に 黑裝した 五十餘の 婦人が 手巾で 鼻を 抑へて 居るが，見る見る 眞赤に 手巾がなる。血が 私の頭を 痛くする。"鼻血かね?" と 妻に 聲を かけると，電車に 乘る時 鋪石の 凹凸に 滑つて 俯伏しに 倒れた時，鼻を 傷つけた らしい と 妻が曰ふ。皆の眼は 掩ふた 鼻に あつまる。妻は 伯林で 買つた 黑革の 手提から 脱脂綿を 出して 鼻血 の 滲みた 手巾に 代へさせ，他の 片手に 手袋を はめて やつたりする。右隣りの 婦人達も 連れて 何角と 世話を やく。車内の眼が 妻に 集まつた。

電車が とまると，私共も 荷物も 稅關に 入らされる。例の如く のろ のろ して 私共は 一番 後になつた。役目と云ふ條 眠いであらうに，それでも 女性に 敬意を表して 私共の 旅券の 檢査は 慇懃に 濟んだ。荷物も 大概で 通された。瑞西行きの あの時の Beliegarde の 失敗を 再びして 千法の 喜捨を しやうにも，私の嚢中には 佛蘭西貨は もう 一文もなく，荷夫にすら Shilling で 拂つた 始末で ある。

(三)

稅關を 出て，狼藉とした 荷物の間を，踏板傳ひに 其處に 群

黑に 横づけに なつて居る 連絡船に 乘る。Vera と云ふ名は 後で 知つた。内は 電燈が 晃晃，荷夫は Office 前の 手荷物置場に 手荷物を 運び込んで 去つた。

一等でも，獨房は すべて ふさがつて 居た。Cabin の外は男女を 別つてある。私は 妻を送つて 婦人室に 往つた。與へられた 彼女の Berth は 暗綠の 帷を 垂れた 上層で，船に 弱い彼女は 介抱する 私がなくては 困るで あらう と 思ふが 詮方はない。來合はせた 六十近い 監督の 婆さんに 吳ゝも 頼んで 置く。バレスチナは Ludd の 天幕以來 はじめて 寢所を 異にする。

汽笛が 鳴る。船は がたがた と 進行を 始めたらしく，早速搖れ出した。

私は 與へられた 番號の 自室に 下りて 往つた。早速 番號を 取り違へて，若い 男が二人 シャツ肌に なつて 居る處に 入り込み，Beg pardon して 直ぐ 其近くの 室に 入つた。四人詰の室。向ふの 下の Berth に 若い男が 寢て居る。

一寸目禮して，額に 流るる 汗を 拭き，時計を 見れば 夜の一時を 過ぎて 居る。

烈しく 搖れ出した。最早 Havre を 全く はなれた のだ。搖り上げ，搖り下げる。印度洋にも，地中海にも ついぞ 例ない ひどい 搖れやうで ある。向ふ隣の 若い男は 早速 吐いて居る。

聲を かけたが，往つて 介抱すべく 私も 變なのだ。Coat をはねて 靴を 脱ぐと，着衣のまま ごろり 横に なつた。

盛に 捨れる。

向ふでは 盛に 吐く。

此方も こみあげさう に なる。

嘸 妻が 苦しむだらう と 思ふ。唯所念を 凝らす ばかりである。

日子 日女 の 膳 試 すとて 海峡の
水は 逆立ち 船 舞はす かも

何の これしきに 酔ふものか。

踏張って 居る内，疲勞が 勝って，ぐつすり 寢込んで了ふ。

第十篇

英吉利

第十篇

英吉利

第一

GREAT SILENCE

(一)

十一月十一日。眠が さめると，船房に 私は寢て居る。向ふの Berth には 妻ではなくて 若い男が 眠つて居る。佛英連絡船に 寢て居るのだ，と 云ふ事を 思ひ 出す。時計を 見ると 最早 七時を 過ぎて 居る。

私は 窃と起きて 身仕度し，婦人室に 往つて 見る。果して妻は 酔つて 苦しむだ さうだが，それでも 眠れたのは 好かつた。

甲板に 出る。空は からり 明けはなれて，寒い風が 飄飄と北から 吹きつける。それでも 海は いくらか 靜かに なつた。五千噸の 細長い Vera は 海峽の波を 蹴つて 英吉利近く 寄りつつある。寒いので，甲板には 出て來る客も 少ない。右舷に 往つて見る。正に 日の出である。久しぶりに 海の 日の出を 見る。日は

出で，空は 晴れ，而して 北の烈風は 波の しぶきで 右舷甲板を びしよ びしよ に 濕らし，寒いとも 冷たいとも 氷の矢を 吹きかくる やうで，面を 向けられぬ。それが 私の元氣を 喚び起す。

日の本の 日子 と 日女 との 渡ります
日をば うれしみ 海を 出づる 日

Armadaを沉め ナポレオン カイゼル を 泣かしめし
一衣 帶水 今 渡り 行く

北の風 氷の 征矢を 放ちつつ
日子 日女 迎ふ 嶋夷共

私は 食堂に 入つて 一碗の茶を 吃し，Toast の 一片を 食べる。それから 左舷の Recess の Bench に かける。海の 色が 薄綠に なつて 來た。汽船が 煙を 吐き 吐き 駛つて居る。白い 帆舟が 搖られて居る。鷗が 飛ぶ。何時となく 英吉利の 陸影が 眼に入る。高低 不規則な 陸の 側面を 眺めて 居ると，津輕海峽を 渡りつつ 北海道を 眺むるやうな 心地がする。

妻が 起きて 來たので，私共は 食堂に入つて，輕い 朝食をとる。諸君は 朝から 魚の Fry など 食ふて お出でる。

食堂を 出た頃は，"Vera" は 已に 詩人 Tennyson の 住む

で居た Wight の 嶋を 尻眼に かけて，鷗を 左右に 散らしつつ 陸へ 陸へ と 進むで 居る。海中から 築き起した やうな 海堡がある。

私共は 流石に 波立つ心で 近づく陸を 眺める。これが 英吉利か。世界の 家族會議で 首座に 座はる 長兄の 國は これか。私が十一歳から 其國語を 學びはじめて 四十年になる 其 英吉利がこれか。其所領に 日の入らぬ これが 英吉利か。

寄つて來た陸が また お出でお出で を するやうに 後退り はじめた。Southampton の 入江に 入つたので ある。

所舷の陸は 此方に 流れて，Southampton の港が ややに 寄つて來る。煙突や 起重機や 煉瓦の建物や トタンの 倉庫や，立働く人，埠頭に 待つ人の 影が 見ゆる。汽船や 赤い Buoy の間を 縫ふて，Vera が 岸壁に 横づけに なつたのは，朝の 九時半 であつた。

(二)

船客は ぞろ ぞろ 船を 下りる。昨夜 Havre で 妻が いたはつた 昼に 怪我した あの 婆さんの 姿も，其中に 見受けられた。黑服を 着て居るのは，戰死した子の 墓參にでも 往つたのではなからうか。私共も 手荷物を荷夫に 托して，やがて 英吉利の 國土に 下り立つた。

私は 日を 忘れなかつた。今日は 1919 年の 十一月十一日である。十一月十一日——恰も 世界大戰の 休戰一周年の 其日 に，私共が 英吉利 に 上陸するのは 正に 其時を得て居る。

旅客の注意 ことごとしく 張り出されて居る 稅關内で，私共は 今 Vera を 下りた 乘客の 人人と 一同 Passport を 調べられ，身分，目的，滯在期限等 を 問はれた後，更に 構内の 一の小舍に 待つ可く 要められた。其處には 電氣暖爐が 赤く 燃えて居て，私共の外に 三四人 同じく 待つ人人が ある。瑞西や，西班牙 の 人人で あつた。

他の 乘客は ぞろぞろ 汽車に 乘る樣子。私共も 心は 心でないが，調べが 濟まぬので，電氣暖爐の 傍近く 椅子引寄せて，係の人の 今や 來ると 待つて 居る。

其内 追追 十一時 近く なつた。

此十一月十一日 午前 十一時，卽ち 休戰 滿一周年の 此午前十一時に，英國では 五分間 一切の 鳴を 靜めて。大戰に 斃れた 人人を 追弔紀念の お布令が George V. から 出て居る事を 私共は 新聞で 知つて居る。誠に ゆかしい 思ひつきで，これが 英國に限らず 全世界 時を 同うし 心を 揃へて 祈念を 凝らす と したら，如何に 嬉しい 事で あらう！ 何はともあれ，斯 "Great Silence" の 日に 英吉利に 來合はせて 四千萬の 人人と 死者——其内には 女子供も 家畜も 居る——の前に 感謝 と 懺悔——何とたれば 彼等を 死なしたは 畢竟我儕の 罪 であるから——の頭を 低るる

事は，嬉しい 事で ある。

私は 時計を 見た。十一時に 五分前で ある。

八年前の 秋の一夜，武藏野の 草廬に 家族 座を正して 明治天皇 輦車發引 の 相圖を 待つた 時の 緊張が 私共の 椅子の 居ずまひを 正させた。

ド，ドド——ン！

壁を 震はして 砲聲 が 轟いた。

電氣暖爐が ぱつたり 消えた。

あらゆる 音が 止んで，森(しいん) と なつた。

私共は 瞑目した。

私は 此 "Great Silence" の 五分間に 世界の心的一周をして，日念じ 日祝した。私は 日本人だから 私の 祝福は 私共の 此旅の 如く 正に 日本から 始まつた。日本から 朝鮮，西比利亞，支那，支那印度，馬來の邦邦，印度，中央亞細亞から 西亞細亞の國國，土耳其，埃及，亞弗利加の國國，露西亞，Scandinavia 諸國，白耳義，和蘭，獨逸，墺地利，バルカン諸邦，伊太利，佛蘭西，西班牙，葡萄牙と 思ひ浮べて 祝ひつつ 英吉利へ 來た時，電氣暖爐が ぱつと ついた。陸海の 汽笛が 一時に 鳴りはじめた。"Great Silence" の 五分は 過ぎたので ある。

然し 私の 祝福は 全世界の 何れをも 漏らしては ならない。私は 瞑目をつづけて，英吉利から 愛蘭，北米，南米，布哇から南洋濠洲と 心を 遊ばせて，一一祝福を 贈つた。

隣室に 足音がして，私共以外の 人人が 呼び入れ られた。"Silence" を 終へて，係の人が 來たので あらう。

それ等の 人人が 出て 去ると 私共の番に なつた。私共は 椅子に かけて，白木の Table 越しに 係の人人と 相對した。正面の Khaki は 四十近い 大尉で，Roosevelt に 一寸肖て居る。傍の若いのは 黒服。大尉が 重に 調べる。兩肱卓子に ついたり，片肱突いたりして，しげ しげ 私の顏を 見つつ 細かに 調べる。無論さし紙が 此處にも 來て居るのだ。

私は 日本出發以來 行程の 大要を 述べた。獨逸を見に 往つた 事が，二人の 係の 注意を 鋭くした。

"何の Authority で 獨逸に 往きました？"

大尉 ば 問ふ。

"瑞西 で 獨逸公使館 から 旅券を もらつた の です。"

"其旅券 は？"

"鞄の 中に あります。"

大尉は 細い眼で 瞬きも せず 私の眼を 見つめた。私の 大きな眼に，疲勞は 浮いて 居たらうが，謂ゆ そこに 認められ なかつた と 思はれる，私には 何の 秘密も ない から。

"御夫婦で 世界漫遊 は 隨分 金が かかりませう。あなたは 金滿家ですか？ 財產は 何程 おあり です？"

旅券出願の時，東京府廳の 係は 私に 財產の 申告を 要求した。外國に 出て 先先の 厄介にでも なる事が あつたら 國辱だから，財產調査は 無理で ないかも 知れぬ が，私の 財產申告を 添へて 旅券願が 外務省 に 廻はつた時，其處の 若い人達は こんなものを と 笑つた さうだ。然し 私は 眞面目に 私共の 所有する土地，家屋，立木，屋內現在品，及び 一切の 預金 現金 を 合はせて 三萬圓と計上 して，申告書に 書いた。のみか，地所登記の書類，銀行の 當座預帳まで 自ら 府廳に 持參して，私の 言の 確實 を 證據立てた。地所は 坪五圓で，少し 高いと 思ふたが，府廳の 役人を 安心さす 爲に 値を 張つたので あつた。私の 財產調べは，英吉利 に 來て 忽ち 役に 立つた。

"約三千磅です。"

と 私は 東京府廳へ 申告 の ままを 答へた。最も 近頃は 磅の値が 下つて居るが，そんなに 細かで なくてもの 事だ。

"三千磅？ それで 御兩人で 一年間の 漫遊と すると，如何しても 全財產 の 半額は 消えますね。"

大尉は 頗 合理的で ある。而して 大尉の 計算は それでも內輪に 見積つて ある。何故なれば 私共の 世界一周は 二萬二千圓を 使ひ，私が 戯れに 言ふた やうに，日本 から 羅馬までは 我足で 歩いたが，羅馬 から 日本迄は 義足で 歩いた からで ある。義足と 云ふのは，借りた おあし の 義。

"然です。"

大尉の 眼は 鋭く なつた。獨逸から 金が 出はせぬか と 云ふ疑念が 閃めいた らしい。誠にお氣の毒さま，あの けちな をぢさ

んが，加之 ぎゆうぎゆう 云はされて居る 今日 此頃，唯の一馬克一 Pfennig も 滅多に 出すものか。然し 大尉は さう 思はない。

"あなたは 著作家 ですね。大約 何部程 著作が おありですか？"

"左樣，一ダアス も ありませうか。"

私は 兎の糞の やうに 貧弱な 私の 所產を きまり惡く 頭の中に數へながら 答へた。

"あなたは Successful author ですか？"

"然，Very popular です。"

と 私は 正直に 答へた。日本では "Popular" は，劣等低級の 別名 として 苟も 文士の 恥ぢねば ならぬ もののやうに なつて 居るが，西洋人の前 に 立つて，"Popular です" と 答へた時 全く 私は 肩身が 廣かつた。

大尉は いよいよ 鋭く 私の 眼を 見る。人を見るに 眸子を見るより よきは なし，と 孟子 の 言 を 此英吉利 の 大尉 も 實行して居る。

私は 言を 添へた。

"私は Popular です。私共の 旅行も 讀者が さして くれるの です。然し 私の 財產が 三萬圓は 慰，百萬長者で 假令 私があらう共，今度のやうな 旅行を する爲には 全財產を 拋つても 少しも 惜しい とは 思ひません。それに，文筆の人に 金は 必しも 益をのみ するものでは ありません。財布が ふくらむと 著作

が 鬱む ことに なり易い ものです。"

力强い 私の 言葉が しつかり 頭に 入つた と 見えて，大尉は 額を 俯いて 頷いた。

然し それで 直ぐ 手放す程の 甘い をぢさん でも なかつた。歸つたら 無論 旅行記を 書くが，それは 單行本として 出し，所謂新聞 雜誌の 記者ではない 事を 確めて，やつと 私共の 英吉利入國は 許された。

訊問所を 出ると，私共の 手荷物と鞄が 持つて 來られる。大尉は 追ひすがるやうに して，一寸 獨逸の 旅券を 見せてくれ と云ふ。私は 鍵を 撚つて 黑い鞄の 蓋を開け，直ぐ 中子にあつた 黃色い 獨逸の旅券を 取り出して 大尉に 渡した。眼に くつつけるやうにして それを 見て居た大尉は，それを 私に 戻す と 目禮して 去つた。

私共は 初めて 自由に なつた。

第二
倫敦へ

(一)

汽車は とくに 出てしまつた。私共は 驛夫の 呼んでくれた 馬車で，荷物諸共 Southampton の港を 他の 停車場に 往つた。荷夫に 手傳ふて 重い鞄を 下ろすとして，六十餘の 人の良い 馭者が 右の手の 指を 少し 傷つけた。赤い血が 私の頭を 痛くする。馭者は 何でもないと 笑ひ，六志の 馬車賃 に 十志をやると 悦んで 去つた。

私共は 歩廊の雜誌店で，汽車の時間表を 買ふ。剝製の 黑い犬が 頸に 箱を下げて居る。倫敦の ジョン と 云ふ 善良な 犬 と 書いてある。 箱は 孤兒の爲。

待合室の暖爐に あたりながら，私共は 汽車を 待つ。 薄青い 頭巾を被た 十五六の 物賣の娘が 三人 つり箱を 下ろして，暖まりに 來る。私共は Chocolate や 近邊の產と云ふ 柚子見たやうな Orange を 買ひ，商賣が あるかなど 問ふたり，私共が 世界周遊中で 妻の帽子は 佛蘭西，靴は 白耳義，手提は 獨逸で 買つた事や，獨逸の娘達の 若ざめて居る話など を する。皆が しみじみ聽いて居る。

兎に角 私共は 英吉利に 來た。英吉利に來たのは 何と云ふても 第二の故國に 來たのだ。言葉の親しみが すべてを 近くする。それにつけても 日本を出て 私共が 過ぎて來た 邦邦で，其國語が 自由に 話せたら，自他の悦喜も 多かつたらうに，と 今越えて來た 海のあなたの 邦邦に 濟まぬ 怠慢の罪を 今更に 感ずるのであつた。

汽車が來た。 荷夫が 荷物を 運び込んでくれた 一等室は，私共 唯二人。紺地に 白模樣の Cushion や，大きな硝子窓を 上下する 同じ 織物の 太い括紐も，英吉利らしい 重厚な 感じのものであつた。

"Lunch——Basket" "Lunch—— Basket" と 兵隊上りの 若者が 歩廊を 賣りあるく。呼んで 3志6片 出して 一つ買ふ。手細工に 大きな 平たい 重い それを Cushion の上に 置いてくれた。

一時 發車。

Basket を 開ける。ハム と 冷肉が 一皿。セロリイ と トマト。パンは 四角が一切，小さい圓いのが一個，Tea Biscuit が 二つ。Knife, Fork を 添へ，芥子と胡椒と鹽を 劃つた 皿が ついて居る。Basket の 蓋裏には，どうぞ 最寄の 停車場で お出し 下さい と 注意書が 貼りつけてある。好い 氣もちに なつて，私共は 英吉利紳士の 食事を 汽車中で する。而して 先刻買つた Orange を Dessert に 食べる。思ふた程 酸くも なかつた。

内は Heat, 外は 小春の 日かげ うらうら と，牧場や，のんびり した 小川の流れや，人家や，木立や，如何にも 長閑な 景色が つづく。

雪の獨逸　雨の佛蘭西　海越えて
英吉利 に 來つ 小春日和よ

古い墓地近く 過ぎる。落ちついた 故國の 永い眠り所を 眺めつつ，今一つの 私の眼には Palestina は エリコ路の 石ころ路の 路側に 幾十と 竝んで居た 英吉利士卒の 新しい十字の 墓標が 忽ち ぼうつと 浮んだ。

"倫敦まで おつ通しです" と 發車の前に 荷夫が 教へてくれたが，果して 汽車は Southampton を 出たきり，停車場も 停車場も 乘り打ちして ひたもの 倫敦へ 急ぐので あつた。

忽ち 空が 黯くなつた。あの小春日が と 驚いて見る 黑雲から はら はら はら と 白いものが 落ちて來る。雪——と 思ふと 何時の間にか また 青空に なつて居る。

窓の外の田舍は 何時か 郊外に，場末に，雜沓に 移つて，午後三時 私共は 倫敦 Waterloo Station に 着いた。

（二）

兵士上りの 若い Porter が 私共の 手荷物を 車にのせて 出

口近く 下ろすと，今度は 貨車から 今一切 合切 下ろされた荷物の 處に 往つて，私が 此と 指さすままに 私共の鞄を さつさと 手車に のせる。引換切符も 何も あつたものでは ない。Palestina あたりでも 英吉利人が 經營して居る 處では 似たやうな 經驗もないでは なかつたが，此處は 本場だけに それが 徹底して居て，如何にも 氣持が よい。

自動車が 無いので，私共は Porter が 雇ふてくれる 箱馬車に のつた。鞄や 手荷物一切は，鐵柵のついた 天井に 積まれた。ごたごた 荷物を 頭にのせて，がたがた と 挽かれて行く 氣もちも 傍目も 決して 好くは ないが，與へられたもので 納まる外はないので，おとなしく 挽かれて 行く。

大きな 川に 出た。高い 長い 晴々した 橋を 渡る。川は Thames，橋が Waterloo bridge だ。川向ふの 宏大な建物，高い塔の上には 大きな旗が ゆらゆら 夕風に 靡いて 居る。英吉利の旗の外に 佛蘭西の三色旗も ある。橋を 渡り終つて，通る夕暮れの街々 巷々は，紅白段だら に 卷いた旗棹，さまざまの 英國旗 佛國旗が 今日を晴れとやうに 飾られて居る。これは 休戰一周年の紀念訪問に，佛蘭西の Poincaret 大統領夫妻が 昨日來たのを 歡迎の 裝飾である。大統領夫妻は 昨日 海峽を 渡つたのだ。巴里で 英吉利の官憲が 私共に Havre——Southampton の 航路を 取らせた意味が 讀めた。間近い Dover の 渡は 大統領夫妻の 爲にあけられた のだ。

兩國旗の 入り亂れて 美しい 夕暮の街を 幾曲り，後で Hyde Park つづいて Kensington Garden と 知つた 片側公園の 長長しい 通りを 公園の 盡くる所まで 往つて，馬車は 一つの Hotel の 前に とまつた。下りて見ると，それは Kensington Palace Hotel で あつた。私共のは Kensington Palace Mansion Hotel である。それは 先のから 少し 後戻りして，一寸横に きれ込んだ處で あつた。

赤い 大理石柱の 二本相對して立つ Portal の 石段を 上り，玄關から 帳場に 往って 名刺を 出す。N. Y. K. の これこれで室が Reserve されてる 筈。茶を啜りかけて居た 帳場の 若い女少しも 其意を 得ない。そんな約束は ない と云ふ。變だ。云はるる ままに N. Y. K. に 電話をかける。日本語の人が 出て，其樣な筈はない，兎に角 早速 誰か往くと云ふ。

荷物を積んだ馬車は 外に待たせて，玄關脇の Sofa に 私共はかけて待つ。眼の前に 五歲位の 愛らしい男の子が 現はれる。日本の子だ。妻を呼んで この兒の 可愛いのを御覽 と云ふ。不圖眼を 上ぐると，背には 其子の阿母であろ，若い美しい人が 立つて居る。やがて 其人は 電話室に 入つた。母子で 先づ 倫敦に着いて，一足おくれた 主人を 待つ人々と 後で 知つた。戰後の世界を漫遊の 日本人は 數あつても，夫婦の漫遊は 少なく，子供連れはますます 少ない。旅にして 日本の子供を 見る事は，私共を 悅ばせ 羨ませた。

N. Y. K. の 若い吉君が 來たのは，ややしばらく たつてからで あつた。初對面の 吉君の後に また一人 支那人見たやうな 眼鏡の 若い男が ぬうと 立つて居るのを，妻は一目見て，淺さんでは ありませんか と 叫んだ。それは まがひもない 淺君で あつた。巴里から はがきを つい昨日 出した 私には 季の姉の 二女を妻とし，年久しい 柏谷の Oftenner の一人で あつたが，近年 私の家の 門戸閉鎖で，淺君も 度度 門前拂ひを 喰はされて 居たのである。高商出で，N. Y. K. に 入つて 最早 數年になることは知つて居たが，つい 先々月 倫敦詰になって 先廻はりして 來て居る事は 少しも 知らなかつた。

吉君の 談判で，事情は 分かつた。室は 確にReserve して あつたが，日本人夫婦とのみ 姓名が 通じてなかつた爲，他の 日本人夫婦の客が 一日早く來て 室は 自然に ふさがつたのである。可愛い Boy の 連れが それで あつた。兎に角 Manager は 私共の爲に 別に一室を 設くる事を 諾したが，それは 明日の事で，今夜は 氣の毒ながら 廣間の隅の Sofa にでも，と 云ふので あつた。

私共は それで 滿足したが，淺君が 吉君と 相談し，電話をかけて 到頭 私共を 清さんの宅に 一泊と 云ふ事に きめて くれた。

あまり長いので 如何に 落ちついた 英吉利氣質でも 當然 唸やいて居る 馭者君を やつと 歸へして，荷物は Hotel に 預け，

Bag 一つ Basket 一つ 持つて，四人は Taxi に 乘つた。

吉君は 途中で下り，自動車は 賑やかな 光の街，淋しい通りと 隨分長く 走る。淺君が 窓から頭を出して 車掌に 右に 往つて左に折れて 云まと 細かな 道筋を 教へる。やつと ある 横丁のある家の前に 止まつた。昨日 初雪が 降つたさうで，此あたり 夜目にも 地が 薄らと 白い。

私共は 淺君の 先導に つれて，遠慮なく 通る。主人の 清さんは 東京高商出 の 人 で，船から 陸と 勤めて來て 今 N. Y. K. の 倫敦支店副長として 働き盛りと 云ふ所。此夏 洋を 渡つて 來た 女子學院出の夫人 と 十一の百合さん 紀元節の誕生で名づけられた 三歳の 紀さん と West Hampstead の 屋敷町に家を成して 居るのである。"宿かさぬ 人のつらさ を 情" ではないが，Hotel の 手違から 倫敦の 第一夜を 他ならぬ 日本の Home に 私共は 迎へらるるを得て，五目飯，味噌汁，卵のつゆ，後では また 汁粉などの 郷味に 倫敦を 忘れた。清さんは 近來倫敦の評判で 何十遍 も 見た人もある と 云ふ Chu Ching Chow の 芝居の話をして，子達に 今日 買つて歸つた 其劇中の 歌の Record を 蓄音器に かけて 皆共に 聽くのであつた。

淺君が 歸つた後，私共は 特にうれしい Bath の 馳走になり，瓦斯暖爐の 紅く 燃ゆる Bedroom に 退くと，夫人の心付けで 若い 日本女中が 湯婆を 持つて來てくれ，屋外の 雪も霜も 忘れて，私共は 倫敦の 第一夜を 温かい 夢に 入つた。

(三)

十一月十二日。からりとした 晴れだ。朝寒に 雜炊の馳走は殊に 妙。早や 百合さんの 若い女教師が來て 日課が 始まるので，私共は 三階の客間に 移る。畳幅をかけ 雛人形など 飾つて，つとめて 日本風に してある。長方形の 庭を 見下ろす。女教師は 其庭で 百合さん に 體操なども 教へて居た。指の運動から はじめて，極めて 嚴格周到に 教へると 云ふ。父母と 英吉利で そだつ子供は 惠まれた ものだ。

清さんが 出勤の後，私共は 日本の 新聞など 見ながら 淺君を待つ。中と 來ない。妻が夫人と 話して居る間を，私は 窃と 下りて，出て見る。近くに 停車場は あるが，要するに 淋しい處で，雇はうにも 自動車一つ 見つからぬ。歸るとすれば，棟つづきの入口も 極めて 相似た樣に 欺されて，早速 異つた家の 玄關にかかり，出て來た 英吉利の婆さんに 敎はつて，さりげない 顏して清さん宅に 戻る。

附近に 猶太人の婆さんが 經營して居る 下宿が あつて 日本人が 可なり 居るさうな。若い 太つた 山君が 其處から來て，病中 此處の主婦 から 氣をつけられた 體など 言ふて居た。やがて 痩せた紳士の 來客がある。學習院の 熊教授。先頃 伊太利に 往つて ナポリの 案内者の 手帖に 私の書き殘した ものを 見たなど

話して居た。私共の寫眞まで貼つてあつた とは，下さんからでもらつたのだらう。熊さんは私共より晩く日本を出て早く英吉利に來，近く米國を經て歸るさうで，そろそろ荷造りをはじめる と云ふ話が私共に羨ましく聞かれた。熊さんは今年が銀婚さうな。ポツケツトから出して見せられた寫眞には，石の門に高女中學校の子女達が列んで居て，また私共を羨ましがらせた。私共ゐやうに Home を負ふてあるく蝸牛の夫妻は，熊さんの Home sick が羨ましいのも，饐く事を知らぬ人情でちらう。

淺君がやつと來た 昨日 Hotel に來てくれた吉君の母者の訃が來たさうな。傍事ならず 私には 響いた。

私共は諸君と食堂で午餐の馳走になつた。日本流に燒いた牛肉の馳走がある。熊さんは肉に饐き，Mutton など食はされると たまらぬと云ふ話をする。Palestine で Mutton を見るも いやになつて 半飢れに(がつ) なつた 私共は 一も二もなく同意する。

諸君が去つた後，頼むだ自動車が やつと來たので，私共は清夫人に夜來の厚い待遇を謝して，それに乘つた。

Hotel に往く途，自動車を待たせて，私共は大使館に寄つた。大使館は英吉利らしい大使館で，大使の珍さんは英吉利にふさはしい大人であつた。先頃の鐵道のストライキに，某公爵某男爵と云はるる人人が自身自用の自動車を乘り出して

公共の用を勸めた話や，以前の下男が將軍になり主人が却て下風に立つと云ふ樣な新しい世態を穿つた芝居などの話を私共は暖爐の前に立ちながら ゆつたり物語る大使の重い口から聞いた。

若い館員の甲乙が かはる がはる 私共の見られ榮えぬ顏を見に來る。官邊の屆の事など聞き，待つて居た郵便物を受取つて 私共は自動車に歸つた。

自動車は Hyde Park を突切つて，また一走りして Kensington Palace Mansi n Hotel に着いた。

私共の爲に設けられた室は，玄關から左に折れ，ずうつと往つて一寸した段を下り，讀書室につれて二曲りして，また段を上り紅い敷物を敷いた硝子屋根の通路を行き當つて，また一寸段を上つて，それから十段も階段を下り，閉め切りの口に傍ふた 81 A と云ふ室であつた。玄關から小一丁もある どん詰まりの室。二つの瓦斯の白い光が廣い，靜かな，落ちついた室を照らし，壁つきの大きな暖爐に石炭の火が赤赤と私共を歡び迎へる。

兎に角 私共が倫敦の Home もこれで出來たわけだ。

以前親しく往來して居たので，私共の嗜好を覺えて居る淺君が，藤村の羊羹を持つて來てくれたので，室内に茶を呼んで引越しを祝ふ。

淺君が歸ると，私共は洋服をキモノに換へて玄關近くの

食堂に 往つた。

而して 歸ると 窓の緣帷を ひいて，椅子や Sofa を 暖爐近く引寄せ，瓦斯の光で 大使館で 受取つた 故國の郵便物を 開いた。それは 大坂 坡西土の 南さんから 轉送して 來たもので あつた。二度の 巴里には 私共への はがき 一本 來て居なかつたので，七月の初に 坡西土で 一通の手紙を 受取つて 以來，四ケ月半ぶりに 接した 故國のたより で ある。

エルサレム で 出した "私の所望" の 反響が 二つ三つ。中に六十八翁 伊藤彦九郎氏が 朝日新聞を經て 送つた "無窮の平和" と 云ふ 小册子が あつた。

思ひがけない 粕谷の留守を 托した 其家の主婦が 五月に 突然逝いた 間接のしらせ，"死の蔭に" の 出版者が 失敗して 田舍に 退いた しらせ，朝鮮の 水原で 我官憲に 朝鮮人や 亞米利加宣教師を 怒らすやうな 無理が あつた しらせ などは，私共を 或は 驚かせ，或は 惱ませる ものであつた。

私共は 遂かに 十二時 過ぐるまでも それ等の 故國の たよりに しんみりと 讀み 耽つた。

第三
倫敦日記

(一)

英吉利が 私共に 提供した 住居は，私共の心に適ふものであつた。倫敦の 西山の手，Hyde Park や Kensington Garden の 南側を 通る Kensington Road の 片側町の 一 Block の 頭を占めた Kensington Palace Mansions Hotel は，Hotel よりも Mansion 卽下宿で，決して 所謂 Fashionable でも 乃至 備はつた意味に於ての 所謂 Comfortable な Hotel でも ないが，矢張 私共には 一番好い 家で あつた。第一に 位置が 好ハ。空氣と 空間の 餘裕を好む 私共の爲には，往來一つ越せば Kensington Garden で，Hyde Park を 合はせて 二百五十餘町歩の 公園は 我有である。買物を しようと 思へば，比較的に 新開町ながら，倫敦 Shopping の 中心は 此處に 移りつつ ある と 云はれて居る Kensington High Street が 近くにある。出かけやうと すれば，地下鐵の停車場は 矢張 其 Street にあり，また 近い 屯の Taxi や 間斷なく 往來する 乘合自動車で，Oxford Street や Regent Street の買物にも，銀行區域の 用達にも，王宮や 議會 乃至 觀劇にも，三十分 或は 一時間足らずで 樂に 往かれる。

五階建の がつしりした 英吉利式の 建物，必要につれて 隣りを 併せたので 繼ぎ合はせの 頗露骨な，無細工に 横長な Hotel であつた。Block つづきも Hotel，東向ふも ホテルで あつた。私共の室 84號の Aは，此無細工に 横長な Hotel の 新らしく 併合された それの 西南の隅で，Hotel から 云へば トントの どんづまりの Ground floor に あつた。Ground floor の 室に 置かれた事は，此世界 一周に 唯 倫敦だけで ある。堅固な立脚，安定な位置，これから 築き 起さうと 云ふ 氣分の 私共に，此 Ground floor の 室と云ふ 事が 何程 悦喜を 與へたか 知れぬ。それは 西向きで 中の 一つは 角面突き出しに なつた 三つの 大きな 上げ下ろしの 硝子窓は，自動車などは 滅多に 通らぬ 靜かな 横丁に 向いて 居る。

室は 約 十疊も 敷けさう。濃綠の Carpet を 一面に 敷きつめてある。天井が 高い。然し ナポリの それのやうに 落つこちる危險は なささう。もと Restaurant で あつた と 云ふ。室の 東北の隅の ひらきを 開けて 見たら，料理の皿など のせて つり上げ つり下ろす 仕かけが まだ 其ままに なつて居た。天井は白，壁も白で，三方壁は 紺模樣の 壁紙で ぐるりと 張られて居る。山鳩のやうな 鳥が 枇杷の葉見たやうな 木の實を喙む 模樣で，それが 私共に 熱帶を，殊に 錫蘭を 妙に 想はせた。出入の 扉と 東北隅の 側の扉とは，深綠に 黑い緣を あしらひ，金線でそれを 明るくしてある。まるで 金庫の扉だ。金庫と云へば，室全體の 岩丈

堅固が どうしても "Safe" 其ものの 感が ある。金庫の内に 居るやうだわ，と 私共は しば しば 言ひ合ふた。自惚を 云へば，私共は 寶物扱ひ せられたわけだ。淋しい と 思ふたり，鬱陶しいと感じたり，いやと 思ひ出したら，それは Providence の 壓抑の如く，人を 發狂せしめずには 措かぬやうな 室だ。幸に 私共は 英吉利に 來て 極めて 樂に なつたので，此金庫か，地下室か，牢獄見たやうな 室は，八重垣つくる 八重垣うちの のびやかさを のみ私共に 感じさせる ので あつた。

硝子窓は 觀音開きの これも 綠黑金の 窓蓋が 掩ふやうに なつて居る。まだ 其上に 粕谷の 書齋の綠帷を 思はす綠帷を 高くから 垂れて，其一枚毎に 中央に 赤い花環の 模樣が 一つ ついて居る。それが 劇場の 緞帳 か 引幕を 思はせる。

扉を 入って，壁附の 南枕に 木製寢臺が 二つ。寢臺の 足もとに 古物の Sofa が 一つ。窓下に 妻の あまり 美しくない 然し 大きな 化粧臺が 一つ。伯林の ホテルの 私共の 室に 鏡一つ高くかかつて居た 外に 婦人用の 何等特別な 設備も なかつたに 比して，これは 夫人を 優待した譯で ある。西北隅の 壁際に，二人用の 洗面臺が 一つ。東の壁側には 大きな 衣裳戸棚が 据ゑて ある。籐製に 更紗を張つた 其癖 埃及人 や 印度人 から 見た 英吉利人のやうに 尻の重い 硬い 拳椅子が 一つに，籐の常用椅子が 二つ。天井から つり下げた Candelabram には 白色 瓦斯が 二つつく。殘りの 二つも つけてくれと，Goethe の 臨終の願の "More

l'ght" を 帳場に くりかへしたが，到頭つけて くれず，やつと立つ少し前に なつて 電燈が つくやうに なつた。讀み 書く人に化粧臺一つでは やり切れぬので，帳場に云ふたら，古道具屋から仕入れた と 見え，競賣札の ついたままを 持つて來てくれた。妻の爲に 軟らかい 椅子をと 注文しても，前からあるのと 同じものしか 持 て來て くれなかつた。便器は Bed 下に 直(ぢか)に入れてあ〻。あまり 殺風景だから 新聞紙を蓋して 置く事にした。もとより電鈴一つ あるでなく，きまつた 時刻に 女中が 朝の湯 或は水を持つて來，掃除に來，夕食前の湯を 持つて 來る時の 外は，一一自身出張して 女中も Porter も 探がさねば ならぬ。W. C. は 階段の 都合三つも 上つて 行く 二階だし，Bath は 尙其上に 一階上らねば ならぬ。不便を云へば 夥しいし，古道具を 寄せあつめての 室内家具も，古物で 新世帶を 造る 此 第二の創世，新開闢，世界的改造時代の 氣分に 如何にも ふさはしく，それが 却て 私共に 嬉しい感を 與ふるので ある。北の 壁つきに 大きな 暖爐がある。Coal boy が 大きな バケツ に 石炭を 一ばいと，古箱を割つた 焚付の 二三把を 持つて來て，其都度 Card に 室の 番號と姓名を 記入させる。私共が 寢て居る内に 女中が 來て 古新聞など 使つて 火を起す。外出すると，歸る時間前に ちやんと 燃しつけて ある。Heat でも 要は 足りるが，生きた火の 紅く燃ゆる 暖爐は，何と云ふ 嬉しさ だらう！ 樹など 燃す 圍爐裡 欲しくて村住居を 始めながら，ついぞ 其慾望を 果す事なしに，火鉢と 炭

火で 暮らして居る 私共は，戰後の 英吉利に 來て 此 "Fireside" の 快味を 與へられた ことを 感謝した。それにつけても，あの伯林の 火の氣のない 室の 寒かつたこと！ 此頃は 如何して居る だらう？ と 此火の 嬉しさに 連れて 獨逸の上が 思はれ〻。此暖爐にも 永いこと Tongue は もとより，火を あせるべく 短い 鐵の棒ぎれすら なかつた。黑い石の Mantelpiece は 潤くして，私共が 到る處で 生活の 標にする 豆眼ざまし時計 と 旅行用寒暖計と色色記入された 1919 年の 刻暦は 此處に 處得顔に 並び，時時は寫眞 また 新着の畫はがき など 此處に 飾つた。暖爐が 室の魂である。其火が 私共の心身を 溫めた。

獨逸以外 大陸で Bath 附 Room の 便利に したたか 馴れた私共は，もつと 便利な室と 思ひもし 願ひもしたが，何時となく此處に 安住して，果ては 假令 王室の 紋章つきの 自動車が 迎へに來やう とも，Palace なら 此 "Palace" と 少しも 動ぜぬ氣に なつて了ふた。

(二)

十一月十三日。晴。昨夕 私共は 與へられた Mansion の 此室に 落ちついた。昨夜 何だか 寒かつた と 思ふたら，今朝 見ると，窓硝子を 一枚 しめ忘れて あつたの だつた。

朝食を 命じたが，十時頃までも 持つて來ぬので，食堂に出

る。非常に 雜沓して 居る。

不足品の 目錄を 帳場に 提出。樂椅子，外套併，其外數點。

それから 自動車で 中央倫敦の 商業區に 往き， Hongkong & Shanghai Bank で 信用狀の 殘額 30 磅を 引出した。横濱の 支店で 振出してもらひ，方方で 受取つて 今本店で 悉皆 受取つた 譯だ。 年配の行員が 少し笑つて，何磅紙幣で 上げませうかと 云ひ，手の切れるやうな 1 Pound 紙幣 30枚 くれた。これで 私共の 所持金は 皆になる。

更に Paddington Green の 市警視廳 に 往つて，二人分 四志拂つて，外國人登在の 登錄を 受ける。 登錄證 には ちやんと 私共各自の 寫眞を貼つて，番號は 4715 と 4716 である。 これで 私共も 當分 英吉利に 入籍した 譯である。寫眞を貼つた 横には，"英字で 署名不可能の者は 左拇指紋" と ある。伊太利，瑞西，伯林 と 恰も 私共の 後を 追ふ樣に 廻はつて 來た と 云ふ 大阪の 人に 會つた。

Hotel に 歸つて，午餐の後，淺君が 來た。水さんも 昨日 巴里から 歸つて，明後日は 私共を 晩餐に と 云ふ事で ある。旅客輻輳で，船は早くしないと 中々 手に入らぬ と 云ふので 淺君に 聞き合はせて もらつたが，米國へ 一月出る 船の中で 三萬噸の Mauritus は 出帆期 不確實さうで，一月十七日の "Royal George" 一萬一千噸の に きめる。太平洋の 船の事は，紐育東洋汽船の 淺君の 知人に 照會して もらう。

大使館から 東京朝日 が 屆いた。 倫敦に來ると 直ぐ 故國の 新聞が 來るとは，嬉しい事だ。

此處の Hotel は 日本人が 多い。 食堂で 若い人達を 見受ける。淺君の 話によれば，倫敦には 日本人が 千人から 住むで居るさうだ。それに 往來の 旅客を 加ふれば，大分の 人數であらう。今迄 私共の 通つて來た所で，絕えて 日本人を 見なかつたは，唯 Palestina だけだ。

夕食後 "人本主義 無窮平和"を 妻に 讀んで もらう。著者 伊藤翁は 信州出の 當年六十八の翁で， 此册子は 今年二月の著である。第一 此地球に 名が 未だ 無いから "平和星" と 命名するから 始まつて，世界的平和の 經綸が 中々 細かに 語られて居る。去五月 Abbas Effendi の 許で 見た 日本人の 平和の 畫はがきと 云ひ，此小册子 と 云ひ，人類が 一つに なりたい 望が 全く 符節を 合はして 居る。

其內 册子の 經綸は 可なり 細目に 涉つたので，疲れて居る 私は 暖爐の 快い 溫味に つい うとうと して了ふ。

（三）

十一月十四日。今日 も 晴。

終日 在宿。

午食後 女中が 私共の室を 掃除の間 讀書室で Daily Mail を

見る。忽ち私は息を呑むだ。ある一項が私の眼を射たのである。Tolstoy 寡夫人が死んだ。去四日クリミアで。ヤスナヤポリヤナでなく，クリミアで。村が不穏でクリミアに避けて居たのか。それとも老病で轉地をしたのか。何れにもせよ，クリミアで死んだのだ。クリミアは以前爺さんが肺炎後轉地した處で，爺さんが長靴で磯に腰かけて居る向ふに，騎馬帽に長袴鞭を右手に娘かと思ふやうな若若しさで夫人が立つて居る畫はがきは，私の頭にある。波瀾多かつた夫婦の晩年の中で其時のクリミアは夫人にも嬉しい一齣であつたに違ひない。其クリミアで亡くなつたのは，夫人も本望であつたらう。

私がベレスチナのテベリア湖畔で夫人に書いた手紙は，テベリアの郵便局で刻ねられ，坡西土の佛蘭西郵便局で刻ねられ，今も其まま鞄の内にある。露西亞行は今度は駄目と見切つて，夫人にみやげの水飴は嘗めて了ふた。伊太利 Como 湖畔の Bellagio では夫人の影を Tolstoy 本家の老母堂に見た。伯林では頻に思ふたが，終に手紙を書きも出し試みもしなかつた。英吉利に來れば，最早クリミヤで死んで居る。十一月四日は私共が獨逸を出て，白耳義に眼ざめた日である。私は少しも知らなかつた。

夫人は爺さんに十七も年下だから，今年はまだ七十五である。私共は今度露西亞に往けなくも他日往かうと談し合ふた。爺さんの墓邊に蒔かうと思ふて持つて來た自園茶山花の

種子も，供へてくれと托された矛刺や百合花の靈も，今度は持參歸るつもりで居る。私共は待つことが出來た。然し夫人は待たなかつた。十三年前一兆同志が氣まづくなつて別れたきりで，心は兎に角手は握ることなしに，今生の別れとなつた。私はそれを殘念に思ふ。然しまた婆さんを爺さんの許に送つて安心と云ふ氣もする。

古倫母では生みの母，倫敦では Tolstoy 夫人，世界を一周もし果てぬに，私共は母や母見たやうな者を亡くして了ふた。私は鞄を開けて，六ケ月前に書いた手紙を讀み返へして見る。

Lake of Tiberias

22 May, 1919.

Countess dowager Sophie Tolstoy:

Dear Madam.

After the silence of many years, I take up the pen to write you. How do you do, dear Madam? Though you are now over seventy and though you have had so many sorrows and sufferings in your life, yet I hope you are quite well, and notwithstanding the still unsettled condition of things in Russia the days at Yasnaya Polyana be quiet and even.

It was in February of 1917 that Leo your son came to Nihon and passed an afternoon at our own house, when I had the

chance of hearing about you all. I wonder whether Leo. told you anything about us or not. I understand him to be now in Sweden. Which of your sons do live with you now? Perhaps Michael? But dear Madam, you are happy in having sons and daughters who love you and are the comfort and stay in your old age. For however selfreliant one may be, there is a time when he or she sorely needs the natural affection of the blood. In that respect, I and my wife who after twenty six years of marriage have no offspsing of our own are rather unfortunat, though we percieve the special significance and mission meant for us in it too.

It is thirteen years since my visit to Yasnaya Polyana. About nine years have passed since his death. What a lot of thing occurred during the interval! What a prodigious amount of suffering the World has had to pass through! It almost drives one to despair to think what price one had to pay. Yet dear Madam, we all know this to be the birthpang. New world is being born. You who had so many experiences of birth pangs and the joys of Motherhood after quite understand it. What do you think will be the opinion of his? Of course his pain and sorrow on seeing much blood shed and on hearing the din of the fight would have been difficult to express. Yet

through those thousand hideous scenes would he fail to percieve and rejoice in the triumph of God? Yes, as some one said, "God is wiser than we." Though the peace conference at Paris may persist in making a series of blunders, though the fermentation in Russia and the other countries may boil over to the excess, yet we could not but see that the new Era is being born. It is quite near — almost at hand. Nay, it is almost already done. A little patience — and the pang will be over. The pain is momentary. Joy, forever.

You must wonder that I am writing from unexpected corner Yes, I write you, not from Nihon, but from the lake of Tiberias in Palestina. Not only I, but my wife is here with me. We left Nihon toward the end of January, landed at Port Said on the middle of March, stayed at Cairo about half a month, then spent whole April at Jerusalem, and after passing about two weeks in Nazareth we came here and already stayed a week. Why did we come to Palestina? What for? The reason is this — we intended to resuscitate Jesus Christ. After much musing and pondeing over the condition of mankind, we — I and my wife — came to the conclusion that nothing but the second appearance of Jesus Christ could reform the world at large. We have had enough of dead Jesus, crucified Christ.

Of the cross we have had too many. No, he must come again, the Jesus Christ. He must come not in spirit, but in flesh. In short, the prophecy and promise so distinctly made in Bible as to the second coming of Christ must be fulfilled now. "I believe in the teaching of Christ and I believe that complete happiness on Earth is only possible when all men believe in his teaching." So said your lamented husband. I fully concur in that. But mere dead words of dead Christ will do nothing. The world must have the living words of living Jesus. The new Earth must turn on that only axis —Jesus Christ in flesh. Were we successful in resuscitating him? That we do not know. He the Father only knows. Time will show.

Tomorrow we start for Damascus. By the beginning of June we shall be back in Jerusalem. Then via Port Said we go to Europe. From Europe to America, and then crossing the Pacific we shall return to Nihon, thus making the circuit of the world. Now two countries we would like the most to visit are Russia and Germany, which however are perhaps most difficult to enter at present. The chief attraction in Russia is, needless to say, Yasnaya Polyana. To see the dear Yasnaya again, to speak with you freely, and to visit and to speak silently to his grave are the fond wishes of mine. My wife

who loved him as she always loves dear old fatherly men and who fully Sympathize with you —why, she is even much more earnest than I—if I may say —in the wish to come to you. She speaks but little English, yet great deal has she in her mind and her heart. We have some cards entrusted to us to present them to his grave. A girl student brought her piece of painting to offer it to his grave by our own hands. They all know our intention to visit you. You see how we all love him and sympathize with you in Nihon. Thus our visit to you has manifold significance. Personal but national, it may be said. But then they tell us that the time was unfavourable. We must bide the time it seems. We intend to stay in Europe until the end of the year. Circumstance will change in the interval. Favorable time will come, I believe. So whenever and wherever we got the chance, we will hasten to your Yasnaya Polyana. You will be so kind as to allow us to pass a night under your roof. We shall see your old yet hearty self and speak with you on the sorrows and joys of our lives to our hearts' content. We shall see some of your sons and daughters and grand children. Together we shall be to his grave and speak in spirit with him. We pray our Father to give us this dearly loved wish.

Hoping to see you,

Dear Madam,

pretty soon,

We remain,

Affectionately yours.

Kenjiroh & Ai Tokutomi.

私は 今 書き 加へる。

"So you are gone, gone to him, dear Madam, even as my old mamma did ten months ago go to my old papa. You are gone, both you and mamma. You could not wait for us, neither of you. Shall we grieve over you, both? Grieve, of course we do. But rejoice we do too over the peaceful end of your toilsome journeys and the happy meetings of you both with your husbands.

May you all rest in peace!"

(四)

十一月十五日。水さんの 馳走にゆく日で，淺君が 案内かたがた やつて來た。英吉利は まだ 砂糖克已で，茶を呼んでも 砂糖は

一人に付散藥の 一包程も くれぬ。淺君が 今日は 自身香港で 仕入れて來た 角砂糖一罐を 讓つて くれた。千金にます 贈物。

夕五時半から 出かける。Kensington High Street から はじめて 地下鐵に 乘る。Charing Cross で Tube に 乘り換へる。地下深く 白い 滑とした 所謂 化粧煉瓦で 穹窿を かためて，停車場處とに 電燈晃とと，成程 獨逸の 飛行船 飛行機の 襲來を 此處に避難の 婦女老幼が 集まつた も 尤と 思はれる。

Lift で上つて，Hampstead 驛で 出る。而して 立止まつては 路を 案ずる 淺君の後から それでも 誤なく 阪の上の 水さんの宅に 着いた。

好い 住居である。唯 女氣子供氣がない爲に 折角の家が 淋しく 寒い。水さんの家族は 東京に 住むで居る。子達の 學校の 關係から さうな が，斯る 別居は 傍目にも 心憂く 思はれる。一夜の宿に 温まつた 清さんの家を 知るだけに，水さんの身邊が 殊に淋しく 氣になる。私共が 二人で 歩いて居るから でもあらう。水さんは 電車の切符が 變つたと云ふては 封じて送り，見るもの 聞くものにつけ 毎日のやうに 故國 たよりをすると，東京の子達も 劣らじと たよりをし，珍らしくない ものまで 阿父に 書き送る さうな。

客は 私共の外に 學生時代 粕谷に來た事も あると云ふ 時事新報記者と，鎔理學士。英吉利の英語は 耳馴れぬ 英學者に 分かり かねる話。水さんが 上手な 謠 の話。淺君も 二年越し 習つて居

るといふので，話がはづむ。水さんは自身船に弱い爲，船酔ひの藥で一番好いと云ふ Mothersill's sea sick remedy を妻に敎へてくれた。時事記者の話によれば，それは銀座でも賣つて居るさうな。私共のやうな田舍者は，燈臺下暗く洋行して每每日本を知る。其爲にもよく出て來た。

女氣はないが，料理番が腕を振つた馳走の數數が出る。雪の樣な米の飯，鮓，鯛の刺身，鷄甘煮，鯛味曾汁，蒲燒，鰕と胡瓜の酢の物，すり身の吸物，漬物，葡萄と梨，羊羹とつぎつぎに出る。私は若い人よりも健啖の自分を見出した。水さんも深くはいけぬさうな。出された葡萄酒も日本酒も，素人にすら好いものに思はれた。

それから間を置いて，甘酒の馳走がある。甘味も程よく，少し臺が入つて居て頗氣の利いた味だ。東京は淺草で鏈にして賣つて居るのさうな。倫敦に來て甘酒と，富士の絶頂でのそれの樣に珍らしく嬉しいものだ。

N Y. K の支店長として，其船に乘つて來る程の名ある人達は一度は水さんの家の鄕味の振舞に會ふのださうな。私共も其船にこそ乘らなかつたが，Cöln で水さんに會ふた爲に，倫敦の Hotel と云ひ，得難い甘酒の御馳走にまでなつたのは，ありがたい事である。

十時頃私共は淺君と謝して起つ。玄を出れば，地が月影のやうに白い。雪が降つたのである。然し最早止んで居る。

雪を踏んでしばらく歩き，乘合自動車で Oxford Circus まで行き，それから淺君の案內で買物所の Regent Street を歩く。大袈裟な道普請で，歩道に傍ふて積まれた四角な木片は革命騷ぎの市街戰に出來た Barricade でもあるかのやう。直ぐ同じ道普請をして居た伯林が眼頭に上る。

Charing Cross で私共は淺君に別れ，地下鐵 Kensington High Street で下りて，Hotel に歸る。

（五）

十一月十六日。曇。午後 Kensington garden を歩き，ヰクトリア女皇の皇婿 Prince Albert の紀念像の前に立つて，塔の透かしになつた處に腰かけ委の其像を見る。ヰクトリア女皇の民等が謝恩を表する爲にと題詞がある。こは妻に Albert 親王の話をして，其立場の困難を語つた。ヰクトリアが賢い女であつたればこそだ。でなければ，男子として中々立ちにくい位置だ。嵐はもらう。然し國政に干涉は容さぬ。と云ふ樣な養子婿のみじめな云はば嫉妬の眼で睨まれ通して，而して否應なしに此樣な謝恩の碑まで建てさせた Prince は見上げた男ではあるまいか。それでも“ヰクトリアの民”と死後までもまだ差別を立てる英吉利氣質が，まことにしぶとい英吉利人らしい。

闇をぬけて 道に迷ひ，六時頃 やつと ホテルに 歸る。

（六）

十一月十七日。雨。午后 雨仕度で Kensington High Street を 歩き，倫敦地圖，案内記，當月新刊の 婦人雜誌 "Eve" や 果物など 買ふて 歸る。

亞弗利加から らしい 黑人が 書店に 來て居た。店員が 子供にでも 言ふ如く Bible を 買ふべく 勸めて 居た。異な感がした。

果物は 相應こ 好い。白耳義で 食ふた それ程では ないが，Muskcat 葡萄も 可なり 甘い。然し Eve が 倫敦に來た月に 倫敦で出た "Eve" は 時を得て居ると 謂ふて 買ふた 婦人雜誌は，內容の つまらぬ ものであつた。表紙の 半裸體の女が 懷劍片手の 姿で，それに 鞘に をさめた 日本刀など あしらつで あるのは，日本の Artist の 手にでも なつたものか。感心したものでも 無い。

（七）

十一月十八日。最初の程は 朝朝 暖爐を 焚きに來る 女中の Ada に 口頭で 朝食の注文を したが，一昨日から 注文の 傳票を

書いて，Mantelpiece の 上に 置く事にした。稀に 男が持つて來るが，大抵は 女が 持つて來る。

私共の 室は Ground floor だが，私共の 下にも 住んで居る家族がある。釜底帽の 五十前後の男が よく 朝出て 夕歸つたり，學校行きの 十二三の子供連れが 待つて居ると 同じ位の子が 何處からか 現はれて 來たりするを 見たが，それは 私共の 下に 住む人達なのだ。地表から 一間ばかり 掘り下げてあるので，船の D Deck の 船房のやうに，それでも 陽光が さし入るのだ。よく Lyon と 書いた パン屋の車が 私共の 前に とまるのは，下の家族に 配達するのだ。今日は "Hardy loggie——Hardy loggie" と 云ふ 觸れ聲が 透かした 硝子窓 から 聞こえて，一尺程に切つた 堅木の薪を 馬車に 積んで 賣る男がある。硝子窓から 私共を 覗いて，買はぬか と 云ふ 態をする。夫婦で 間借りを して居ると 思ふたらしい。嬉しい 氣もちになつて，買ひたかつたが，石炭が 十分あるので，私は 手を振つて見せると，"Hardy loggie——Hardy loggie" の 聲は 馬車と共に 下町の方へ と 往つて了ふた。觸れ聲と云ふものは，なつかしい ものである。私共が そだつた 熊本で，私は 郊外住居だつたが，妻は 市中の 住居で，よく "ノツギャア——タツギャア" を 聞いた ものだ。"薪や 薪や" の訛りである。"タツギャア——タツギャア" と "Hardy —Loggie" と 物のみか 音までよく似て居るので，殊に Home の 情調を そそる。それは 私共が エルサレムで 聞いた 飴賣の聲が "薩顏の笛，胡瓜

の苗" を 想はせた と 同じやうな ものだ。

Hotel に 蟄居して，朝が 晩いので 減りもせぬ腹に，あまり うまくもない 宿の午食を つめ込むのは 感心せぬ。そこで 今日を 初めとし，降つても 照つても 外出し，午食は 外で 食ふ事に する。

そこで 出かける。今日は 曇り日だ。ぶらぶら Kensington road を 東へ歩く。昨日は Kensington Garden 外の 歩道に 傍ふて 馬の爲に 設けられた 二の新しい 花崗石の 水槽を 見た。それには 何年何月 何處で 戰死した 良人の紀念の爲に，と 云ふ 文句と共に 寡夫人の名が 鐫つてあつた。今日は 反對の側の廣い 歩道を 歩いて居ると，まだ 若い男の 鉛石に 胡躍かいて 物乞ふのを 見る。白や 赤や 青の Chalk で，海の景 山の景など 鉛石に 描かれて居る。而して 其處には 白 Chalk で "私は カタリ では ありません。何年何月何日 佛蘭西の 何處で Liquid fire の 爲に 負傷して 働けなく なつた者です。Ladies and Gentlemen, 何卒 あなた方の Brother の 困つて居るのを 看過しに しないで 下さい" と 書いて居る。私共は 已に 數個の銅貨が入つて居る 脫いだ 其帽の中に 幾個の 銅貨を 加へた。少し往つて 見かへると，其前に Bag を 開けて居る 髮ノ白い Lady の 姿も 見えた。こんなのは 後でも よく 彼方 此方で 見かけた。死力を 出した 大戰の 後始末，中ゝ 英吉利も 骨が 折れる と 思ふ。

私共は Hyde Park Corner から Green Park を 通つて，

Buckingham 宮に 王旗の 翻るを 眺め，其處の廣場に いち白き 大紀念碑，空と地の間に 小高く 悠然とした ヰクトリア女皇の 圓熟した Womanhood を なつかしみ，St. James Park を 通つて 到頭 Westminster bridge まで 歩いた。此處の 朝景色は Wordsworth の Sonnet で 想ふて居たが，眞晝中の 曇り空の 下で，橋の上の 車は車，馬は馬，人は人 と 秩序正しい 雜沓，橋の下の濁り Thames に 或は 汽笛を 鳴らし，或は 荷足舟を 曳き，おのがじじ 上り下りする 船の 賑合ひも 好く，橋の西詰に 川に向ふた一構へ，名物議院の 高い 時計臺の上に 開會中の 大旗が ゆらゆら と 搖いで 居るのも 殊に 好い。

ぶら ぶら 議院の前を 歩く。Robert Peel だの Palmerstone だの Cobden だの と 知名の 政治家の 紀念像が 數數 立つて居る。

Westminster Abbey に 入つて 見る。卽位の式には 毎も使はるる 薄暗い 古い 建物は，今 禮拜中で，佳い Choir の 歌の波が 寄せては 返へして居る。Poet's Corner の 名高い墓を 見るつもりで 來たが，禮拜中で それを 見合はせ，お馴染の Gladstone や Disraeli の 像を 見ただけで Abbey を 出る。

議會向ふの A. B. C. で 茶と パン の 午食を 濟ます。二人で十片。A. B. C. とは Aerated Bread Company の 頭字 だ。Aerated の パンは 輕い。

それから 乘合自動車で Piccadilly Circus 迄行く。途中 往來

の眞中に 新らしく 建てられた Cenatoph 招魂碑を過ぎる。國旗で 掩ひ，周圍に 數數の 花環を 飾つた 其處には，多くの 男女や Khaki 姿も 見える。往來の 烈しい處で，よく 怪我人が 出來ると 新聞に 苦情が 出て居た。

馴れて居るので，それでも 怪我は 少ない方だが，先日は 此處では なかつたが，十歳になる女兒が 學校歸りに 荷物自動車に 轢かれ，學校中で 其葬式を 送つた記事が 新聞に 出て居た。

Piccadilly Circus で 自動車を 乘り換へる。此處は 熱鬧區で，向ふへ越すに Subway も ある。地下を 行くのだ。それでない者の 爲には，間島の 安全區がある。隙を見て 其處に 越し，また隙を見て 向ふに 越すのだ。乘合自動車には，何れも 警句が 書いてある。"感は 思よりも 早い" とか，"行る前に 先づ御覽なさい" とか 色色 注意の語が 書いてある。危い場所には 一際すぐれて 丈高い 巡査が 立つて居る。四辻では 交り番こに 通行の 流れを通す。止つた間に 自動車の 間を 縫ふて 慣れた人は 越す。大勢 なれば 越す方が 優勢で，數の蔭に 隱れて 越す道もある。私共のやうに，靜かな 村住居して 神經の のびた者は，人ごみの中を 歩くに 一通りならぬ 苦勞する。此旅に 出かける 少し前も 夫等で 電車から 落ちた 事がある。それは 新宿の 道分で，落ちた者も 惡いが，無遠慮の 乘合の一人と 車掌の 不 意が 落した と云ふても よかつた。幸に 私は 少し 膝を すりむき，妻は 下駄の緒を 切つただけで 濟んだが，それ以來 日本の 電車が 恐くなつ

た。日本を出て以來，馬車や 自動車で 出あるく事が 常であつても，人ごみを 歩く場合も ないではない。從つて 冷汗になる 場合も 時には あつた。坂西上の 停車場外で，危く 追つた 自動車をかはす餘裕が なくなつて，私は 氣遠くなつて居る妻を 突きやるやうにして 二人共 纔に 免れた事が ある。佛蘭西人は 敏慧輕快で 飛行機でも 自動車でも 操つる事 流るる が 如く，見て居て氣もちが よく，それでも 其間を 横切ると よく 冷汗が 流れた。英吉利人の 自動車を 操る 手際は 佛蘭西人より 少し 手重だが，然し 安全と云ふ點では 却て ヨリ安心な 心地がする。行くに 路あり，廻るに 規あり，巡査が 手を擧れば はた と 止まり，自動車が 廻る場合には 高く 右手を 廻る方向に 向けて 行人の注意を 率ひ。これは 新嘉坡以來 見馴れた 處で，如何に 戰後で 荒んで居ても，英吉利の 訓練は 一朝夕に 失せるものでは ない。

Piccadilly Circus で 乘合自動車を 下りると，私共は 車掌が 教へた 通り，Kensington 行きのに 乘るべく，向ふへ越しに かかつた。私は 右，妻は左，自動車の隙を 見て，間島へ 渡らうと 二足三足行くと，思ひかけない 右角から 忽ち 自動車が 來た。はつとして 妻の腕を 捉へて 後へ 退つた 時は，自動車は 私の右の腕に 危く 突かけて 止まつた。私は 冷汗を 流した。今少し 亂暴な，人の命を 何とも思はぬ 車掌だつたら，私共の血は Piccadilly を 染めて，此報告を 私共は 書く事が 出來なかつた のだ。それについて 思ひ出すは，私共の 遇難が 新聞に 公にされた後，佛蘭

齒語が出來るから秘書で連れて往つてくれの，瑞典に往つたら某と云ふ西洋人の妻になつて居る女に會つてくれの，と樣々依頼や注文の手紙を私共は受取つたが，中に私共を苦笑させたのは傷害保險の勸誘だつた。成程新宿で日本の電車から落ちた手際を見れば西洋の人ごみの中で自動車に轢かれたりはあるまじい事でもない。それを見越したやうな保險勸誘は，親切と云ふ事が出來なくとも，少なくも其道にかけてぬかりのないとは云へやう。然し私共保險と云ふものが金輪際嫌ひだ。傷害保險をつけて世界一周の旅に上るなんかはづかしい事だ。そこでやめた。此時若し英吉利の自動車で死傷したら，それ見た事かと保險會社の勸誘員に鼻うごめかさしたであらう。

兎に角自動車に轢かれ損ねた私共は無事に向ふに越し，別の乘合自動車で無事に Hotel に歸つた。

歸ると私共の室は漏れた瓦斯の臭ひ滿ち滿ちて居る。Hall porter の一人が來て直してくれる。私共の瓦斯は粋形になつた開閉器の鏈を引いて明るくし小さくするやうになつて居る。不用意の瓦斯心中を遂げない爲め，今夜から就眠前嚴重に瓦斯管のねぢをねぢて置く事にする。而して夜間の用の爲に，日本から持參の手燭を出した。

（八）

十一月十九日。雨。今日から Daily Mail と Daily Mirror が

きまつて來る。英吉利に來て今更に羨ましいのは，事事物物人人類類にあらはれて居る“自由”だ。戰ふは同化で，敵の武器をとらずに戰へるものでない。獨逸との戰で英吉利の“自由”は大分傷められた。それでも本質は中々變はるものではない。新聞一つ見てもそれは分かる。Northcliffe は Bolsheviki が大嫌ひで，盛に排過激の宣傳を新聞でやつて居る。然し其新聞には英吉利が過激派を潰さうとするのは，百年前佛蘭西革命を潰さうとしたと同じく勞して功なしと云ふ某將軍の投書を麗麗と掲げて居る。段々險惡になりさうな勞働者の主張を危險視しつつ，或はそれ故に，特に彼等の見を公にする爲に一欄を供して居る。“妻が良人の外に男友をもつの可否”“獨逸人に嫁した英吉利女の身の上”と云つたやうな問題でも，千差萬別の異見が投書欄に肩を摩して居る。“自然”が最上の智慧で，‘自由”が一番安全である事を此處の苦勞人はよく知つて居る。

雨裝束で出かける。Hotel から南へ少し往つて，近い處に藥屋や果物店を見つける。今日は Albert Hall に “With Allenby in Palestine” の活動寫眞を見るつもりだが，時間が早いので，例の通りを Knight's Bridge Street まで歩いて，一の飲食店で燒き立ての熱い Beefsteak と Ginger beer でうまい晝食をする。

それから立戻つて Royal Albert Hall に行く。それは私共

め Hotel に 程遠からぬ Kensington Road に 面して，小山のやうに 踊る 楕圓形の 會場である。五十年前に 二百萬圓を かけて出來たもので，周圍 百三十五間，樂に 八千人を容れ，其處の Pipe organ は 九千の Pipe があつて 世界的に 大きな Organ と 云ふ事である。音樂會や 色色の會が 始終 催されて，私共は往來の 度毎 さまざまの 看板を 見せられる。"With Allenby in Palestine" の 活動寫眞の 看板が 此一兩日 出て 居る。Allenby と 云へば，Cairo で 顔を見，Nazareth で 私が 手紙を 書いた彼は 先日 凱旋し，日にやけた面目，古びた服裝，飾り氣のない 武將の 風采は，功を 先任將軍と 部下とに 歸する 謙讓と，九十を越した 母堂への 孝行で 英吉利人 一同の 評判が 好かつた。活動寫眞 は 亞米利加人 が 飛行機で 從軍撮影 した ものだ。Alenby 自身も 先日 見物した さうで ある。

二志拂つて，階上席に 通る。八千人も 容るる 建物だけあつて，大きなものだ。晝夜二回の 興行で，今日は 七分の 入りである。

寫眞は Palestina の 部と，Arabia の 部と 二つに 分れ，Palestina の 部は Allenby が 主人公，Arabia の 部は 亜剌伯の人心を收めて 側背から Allenby に 力をあはせ，其功を 成さしめた Lawrence 佐が 主人公で，兩將兩軍 Damascus で 相會する處で 目出度 終を 告げる事に なつて 居る。

午後二時半に，何の 前置も 雛子も なしに 映寫が 始まつた。

活動が 大部分で，動かないのも ある。背廣の 若い男が 出て來て 說明する。卽ち 飛行機で 從軍撮影の 重役者 米人 Lowell Thomas だ。彼が 出て來ると，會衆が 先づ 拍手を 浴せる。大きな 建物だが，聲は 可なり 通る。然し 私には 斷片的にしか 說明が 分からない。皆が 哄と 笑ふ時，平氣で 居らねばならぬのが，頗 苦しい。然し 說明が なくも，畫は 自ら 說明する。婆さんが 賣りに來た Programm を 三片で 買ふて，それを 見い 見い 遷り變はる 畫面を 眺める。五ケ月前に 埃及や Palestina を 親しく 步いて來た 私共には，光景の 多くが 倍の 鮮やかさで 活きて來る。

軍用飛行機から 見下ろした ピラミッド が 現はれる。蘇西運河を 下に見て，沙漠を Palestina へ 進む。六萬と云ふ 駱駝の 縱列。Khaki 服，班白の 八字髯，虹色の 勳牌を胸に，鐵壁も 透さでは 止むまじい 像が 大きく 映ると，會衆が 驩呼の聲を 上げる。Allenby が 消えると，飛行機が 小さく 現はれて ややに 大きく 近くなり，一ぱいに なつて 過ぎる。昔の ユダヤの 今の村村が 現はれる。井に水汲む 甕の女。砲車が行く。砲の 白い煙が 爆發する。騎兵が奔る。エルサレム が 落ちて，Allenby を 先登に 徒步 入城の行列。それを 迎へる エルサレムの父老。お馴染の ヤツファ門，直ぐ 其處の Hotel に 私共は 五十日も 居たのだ。空から 見た エルサレム。橄欖山，ゲツセマネの園，Omar の Mosque，お墓ゝ會堂，倫敦に來て また まざ まざ それを 見る。

然し なつかしいとは 私共ばかりではない。私共の 隣に居る 若い Khaki の兵士兩人は，初から 終まで 畫のうつる毎に ところところ喜び，くつくつ 笑ひ，其處で 苦しみ 死を冒し 而して 生きて 還つた者で なければ 出來ぬ 怵へられぬ 悦びの 騷ぎを する。

十分間の 休憩が あつて，亞剌比亞の 部に 入る。說明者は やはり 同じ人。分からぬ事も 依然たるものだ。今度は 埃及 からずうと Khartoum まで 南下する。沙漠の 沙嵐。紅海に 出る。汽船で 亞剌比亞の港に 着く。牛や馬を 船から 丸太で 海に 刎ね 落すと，驚いた 牛馬は それでも 水中で 起き上つて，眞顏で 陸へ上る。それが 皆を 笑はす。牛さん 馬さんに 濟まない 氣がする。亞剌比亞の 沙の上の邑。あの頭の かぶりもの，あの夏冬もない 寬濶の 袍，髯長に 納まつた 亞剌伯酋長。其裝をした 亞剌比亞の 無冠王 Lawrence。亞剌伯を 抱き込んだ Lawrence の 別働軍は 次第に 北上する。シナイ山が 映つる。進んで 死海 ヨルダンの谷が 出る。裝甲自動車が Moab の地を 奔る。空中戰。敵の一機が 火を起して ぱた ぱた と 死海の濱に 燃え落ちるので，私共は はつと 息を つまらせる。

Lawrence は ヨルダンの 東を 北へ進む。已に エルサレムを 落して，エリコの谷かけて 別働隊と 聯絡を 通じた Allenby の 本軍は，地中海岸から エルサレム以北の 山地を 一掃して，エスドレロン の 野から ナザレ ヂベリア を 席捲し，長驅 Damascus に 入つて，此處で Lawrence の軍と 東西 相會する

事になる。

それから Aleppo が 落ち，土耳其が降り，やがて 歐羅巴でも 休戰になり，Mesopotamia, Syria, 亞剌比亞，パレスチナ が 土耳其の 軛を はなれる と 云ふ 段取で，映寫は 終を 告げる。

終つたのは 五時で あつた。

私共は 戰ふた 人人に しみじみ 氣の毒と 云ふ 氣分に なつて，Hotel に 歸つた。歸りに 黑葡萄，Jamaica の Grape fruit と一瓶の アルコホル を 買つて 歸つた。

白耳義での 電報の 返事として，正金支店から 文淵堂の爲替入手の 通知が 來て居た。

それから 私共の 赤と綠の 鞄が 二個 郵船支店から 着いて居た。此は 去七月初 私共が 伊太利行の 船に乘る時，坡西土の 南さんに 頼んで 倫敦に 送つてもらつた もので，鍵を添へて 置かなかつた爲に，倫敦に 着いても 稅關の檢査が 出來ず，主が 大陸を ぶらついて居る間，四ケ月と云ふもの 稅關の 厄介になつて 居たのだ。氣永の 英吉利人も あまりの 事に 劫を 煮やし，錠前を 破して 檢査を 濟まさうと 云ふのを，郵船で もう少し もう少しと 頼むやうにして，到頭 私共の 到着まで 待ちつけた と 云ふ事である。

金は 着く。鞄は 着く。果物屋で 買つた 夏密柑見たような Grape fruit なるものの 案外 酸つぱかつたのも，大した 失望には ならなかつた。

一週間の Bill が來た，朝夕二食を 添へて 20 Pounds に上らない。先づ 一日 二十三四圓 と 云ふ處だ。

鞄を開けて 坡西土で 一別以來の 内容に 對面する。獨逸で欲しかつた 軟らかい 毛布や，温かい 下着や，冬物一切が 出て來て 私共を 悦ばせる。妻は 無いと 思ふたものまで 見出し，送り戻して しまふたつもりの 懐爐灰まで 入つて居た のを 喜ぶ。少し輕かつた かけ物 の 脚邊に Silket の 毛布を ふわりと かけて，馴染の 銘仙の 丹前を 袖たたみして 側の椅子に うちかけ，俄富限の 夢は 長閑な ものであつた。

（九）

十一月二十日。朝 私共は 自動車で 正金支店に 往つて 文淵堂の 送金を 受取る。此處にも Roll of Honor が 掲げられて，從軍店員の 姓名が 出て居る。死傷も 一二に 止まらないで あらう。店頭に 日本人の影も 二三 見えた。係の 若い三——君が 多分あの 三さんの 何かで あらう と 思ふ 私は，不如歸の 著者として少少 くすぐつたい 氣がした。

更に 郵船支店に 行く。正金にも 二三 日本人を 見たが，此處には 更に多い。水さんは 留守で あつた。副長室に 獨事務を執つて居る 清さんに 過日の禮を 述べる。それから 出船前の 忙しい 淺君の デスクを 訪ひ，Oxford 行きの 打合はせを して，此

處を 出る。

それから 倫敦第一の 婦人服仕立屋に 連れて往けと 自動車掌に 云ふて，Regent Street の 宮内省御用 Nicoll に 案内される。金不足で 巴里で 出來なかつた 妻の服を つくらせやうと 云ふのだ。私は 巴里で 背廣を 作つたので，英吉利で 作らうと 思ふて居た 冬の 杉の色の服を 作る事は 見合はした。巴里で 男の服を作り，倫敦で 女の服 を つくるなんか まさに 逆さ事だが，決して 奇を好んだ わけでは なく，金の都合が さすわざである。妻の 服地には 樺茶の 天鵞絨を 擇んだ。近頃の 若い西洋婦人は，申合はせた やうに 袖の濶い，袴の窄くて 短かい，意氣な 服を着る。それで 踵の高い 靴をはいて，薄い 襪から 白い足が 透いて 二本 にゆうと 立つた處は，ある人が 評した通り まるきり "驚ゐ感じ" だ。若い女には 所謂 意氣かも 知れぬ。上品では 無論ない。歩いたり，車の 上り下り には 裾が狹いのは 不便に きまつて居る。袖が 寛くなつたり，裾窄くしたり，飛んでもない 廣い帶をしたり，畢竟 日本趣味の 適用は，洋服として 惡化である。男裝の女は 興がさめる。私は 支那料理の如く 支那服も 男は好きだが，支那婦人の 股引姿は 好まない。此頃は 倫敦でも 男子の服の 無趣味を 改善の會など 出來て，仕立も 色彩も 色色工夫を凝らし，エリザベス時代 に 復歸したやうな ものの 展覽會などが 開かれて居る。子供には 好いかも 知れぬ。私は 婦人の服については，英吉利の 皇后さん と 同樣 裾寛かな 袴の 賛成者だ。

英吉利も 皇太后時代 までは 諸買物は 宮中に 取り寄せて されたさうなが，今の 皇后さんは クリスマス の 買物でも 女官一人連れて 一頭立の馬車で さつさと 町に 出かけ，人の氣が つかぬ間に ぐんぐん 買つて歸る と云ふ 風だから，寛かな袴は 所謂お上品を 意味する ものでは ない。私は 私の皇后の爲に おとなしい Style を 擇んだ。而して 20 Pound の 手金を 拂つて 店を出た。

自動車を 返へして，私共は 唯有る 食店に入り，茶とパンと Ginger beer で 午を 濟ます。婦人連れと 思ふて，女ばかりの 處に 與り据ゑたら，手處は Lady's Corner だと 注意を された。多くの 倫敦の 果物屋は 花屋をかねる。これも 宮內省御用 と 云ふ一の店で，私共は 故國を偲ぶ 柿二個と，西班牙產の 生栗を一封度 買つた。菊た切花や 鉢植が 美しい色 と 佳い 芳を 舖に滿たす。日本出來と 云ふ 菊や 櫻や 梅の 造花は 無下に まづいものでは あつた。

Taxi で Hotel に 歸る。

暖爐の火で 栗を煨いて 食ふ，甘い。

Mantelpiece の上の 剝暦に 書いて置いた 文字が，今日は十一月二十日 Tolstoy 爺さんの 十年忌である事を 告げる。Leo が 粕谷に 持つて來た あの 爺さんの べそかいた 寫眞 を Mantelpiece に 立てる。婆さんに 私が書いた 手紙を 其處に並べる。爺さんが 死んで 滿九年。婆さん 死んで 唯十七日。會つて 如何樣

な話を して居やう？

露西亞は まだ ぐらぐら 煮えて居る。Daily Mail は 大の 過激派嫌ひだから，報道も 一一當には ならぬが，それでも すべてが Too much である事は 疑ふ事が 出來ぬ。婦人に對する 亂暴が 頭を 痛くする。Trotsky は Jew だ。Jew の Vindictive な 强い 復讐心は いやだ。然し 露西亞人は 終に 露西亞人だ。其愛する天性が 勝を 奪に 制するは 疑もない。過激派征伐が 露西亞の救濟では ない。過激派を いぢめれば，彼等が 露西亞を ヨリ多く 窘めるのみだ。無理暴力は いけない，過激派が するにせよ，外國が やるにせよ。

（十）

十一月廿一日。美晴なので，午后 Taxi で 動物園 に 行く。Green Park で，晴晴とした 好い 動物園で ある。茶店で 茶など飲み，ぶらぶら歩いて 見る。伯林の 動物園住者が ひもじい顏をして居るに 引換へ，此處のは 榮養十分で 居る。象の子が 愛らしい。丁度 餌をやる時で，獅子や豹，黑豹の 住む舍は 見物が 賑やかで ある。鉛筆寫生をして居る 若い婦人なども 居た。

大塊の肉を 與へられた 牡獅子が，ゆつくりと 腹遣ふて 眼を細くして 血だらけ の 肉の血を 大きな舌で 舐め 舐めして 居るのが，凄くもあれば，可愛ゆくもある。食時には 別檻に 移さるる

牝獅子が，宛てがはれた 肉塊に 不足を感じてか，Disdain そのまゝの顏をして つんとして居るのも，女らしい すべてが あらはれて居る。肉を貫ふと 直ぐ 後の洞に くはへ込み，ひらりと 出ては躍り また 舞ひ戻りする 豹も いぢらしい。

時が 晩いので，大部分を 見殘して，裏門から 出る。見かへると 落葉した Oak と Oak の間に 洗濯盥大の 紅い落日が 今落ちて行く。横雲が それを 二つに しきる。

違つた 乘合自動車に乘つて 又下り，淋しい處を ぶらついて Taxi を 見つけ得て，直ぐ Hotel に 歸る。

淺君が來て，明日 Oxford 行き の 相談を きめる。

第四
OXFORD

(一)

十一月廿二日。Oxford に 行くべく Taxi で Paddington 停車場に 往く。淺君も來て，汽車は 十二時三十五分に 出た。一泊のつもりなので，私共は 寢衣を入れた 手提一つ，淺君は 小さな 信玄袋一つの 輕裝。

雨が 降つて居て，ゆつくりした車室は 靜かな事で ある。

Slough に 來た。Windsor へは 此處で 乘り換へる。淺君は 先頃 其處に往つて 名高い Eton の 中學を見，例の 山高帽を かぶつた Eton boys の 昔昔した 容子を 見た話をする。

Reading と云ふ Oxford 道には 似合はしい 妙な 名の停車場で，淺君は Lunch basket を 買つて 午餐 をする。內容は Southampton で 私共の 食べたのと 似たやうな もの。

雨は まだ 降つて居る。しつとり と 濕ふた牧場，ゆつたりした 小川の 流れ，ゆるく 起き伏す丘，處處の 田舍町や 村や すべて のんびりして 少しも 齷齪した 島國の 心地はせぬ。都會には 夥しく 寄りこぞつても 田舍は 並はづれて ゆつくりと 住みなして，傍眼には 隨分地所が 遊んで 居る やうにさへ 見える。世界

に 跨げて居るから，本國は ゆつくりして 居るのだと，山の上まで開かれて 田畑になつて居る 九州生れの 私共や 山陽生れの 淺君は，我等の本國に 思ひ 比べて 嘲ち言も 出るのでぁつた。

午后二時十分頃，Oxford に 着く。停車場に 待つて居た 三十前と 思はるる 我等の同國人 と 相見て 初對面り 挨拶を 交はす。N. Y. K. から 留學して居る 市君で，私共の爲に 東道の勞をとつて くれるのである。手紙で 打合はせは あつたが，淺君も 初對面 であつた。

(二)

馬車で Randolph Hotel に 行く。此處も Hotel は 繁昌である。私共のやうな 遊覽の客も 多いらしい。市君から 話がしてあつたので，私共も 淺君も 各其室を 得た。未だ 暮るるに間もあるので，少しでも 市君の先導で 見て廻はる可く 出かける。

人口五萬の上を 住まはす 古びた 大學町は，しつとり 夜來の 秋雨に 濡れ，雨は止んだが 鋪石の 道路は 水潤りが出來て 滑りがちである。道路の 眞中に Gothic 式 尖塔がある。其中程に 立つて居る 三人々像は，約四百年前 信仰の爲に 此 オツクスフオドで 焚き殺された 殉教者で あるさうな。市君は 其塔の尖つた 頂を指して，先頃 大事の茶目が 夜窃に あの頂に 攀ぢ上つて，物もあらうに 便器をかけて 置いたのが，翌朝 發見されて 大騒ぎに な

つた事を 話し，隨分 命がけの 惡戯です と 市君は 曰ふた。十字架の時代は 過ぎた と 宣ぶる私には 含笑まれる 惡戯である。此處 茶目は 猛烈で，新婚近い教授の家に 花嫁に扮した 大の男をのせた 馬車を 乘りつけ，無理に 教授を 拉して 鳴物入りの 行列で 囃し歩いたり，私共が 倫敦に逗留中 此處の 大學の連中が 素人芝居の 催を 教授連に 制止された爲 他の 田舍町に 押し出して 大大的に 興行して 物議を釀した 事も あつた。戰後は 殊に若い者の 力が 溢れて居るのだ。戰爭と云へば，市君の話によれば Oxford から 出征した 大學生や 若い教授達は 總數の 九割に 上つたさうな。歸り得る者は 歸つて居る。まだ 歸れぬ者も ある。永久に 歸れぬ者も 少なくない。埃及や Palestina 以來 私共が 接觸した 氣爽な 開けた頭の 若い 英吉利將校の 中には，斯處のや Cambridge のが 隨分 居たらう と 思ふ。今から 二十年立つて，戰爭を 經て來た 此處の 連中が 出て働く時が 思はれる，と 市君は 云ふ。

暮れかかる 曇り空の下に，私共と 淺君は 市君の 先導で二三の College を 見る。市君が 屬して居る Lincoln's College も 其内に あつた。冬近く 青青として居る 芝生の綠。落葉木は 疎らに，常綠樹は 鬱葱とした 園のさび。三百年 四百年の 眞黑になつた 古建築を 止むことを 得ぬ 修繕を加へて まだ 日用に 使ふて居る。如何にも 英吉利らしい Oxford らしい College の 落ちついた 建物。殆んど 何れの College にも 添ふた 薄暗い 禮拜堂。

其 College 出身の 名士の油繪肖像 を 掛けた食堂。其禮拜堂には必しも 出席を 强要されぬが，食堂の 晩餐には College の 寄宿生は 勿論，公認下宿住居の者も 必ず 出席し，教授連は 一段高い Platform の 食卓，學生は 下の Hall で 木の 長椅に かけて スウプに 魚若くは肉の一皿，野菜の一皿，それに Sweet 位の 食事をとる 規定さうな。面白い 事には，食堂卽ち 講堂で，日間は此處で 講義が ある。

市君に 跟いて 其下宿に 往く。寢室は 階下に，居間は 三階にある。石炭くべて 暖爐近く 近寄せくれた Sofa に 私共は かけて，茶や パンや 菓子などの 馳走になる。市君は 1總は 茂原の生れ，東大法科を出て，N. Y. K. の 神戸支店に 勤め，更に 擇ばれて 此處に 留學して居る。一高在學中，物議を起した 私の "謀叛論" を 聞いたさうで，萬更無緣の 中でも なかつた。私は 市君には 何處かで 會ふた事が あるやうな 氣がして ならなかつたが，後で思へば，それは "みみずの たはこと" の "曉齋畫譜" の 贈り主に 君が 肖て居たので あつた。

市君が College の 夕食に 赴く 時間が 近づいた ので，私共は 淺君と Hotel に 歸るべく 立つ。市君も 送ると 云ふて，Undergraduate の Gown を 被る。黑い 毛織子の ひらひらした 半マントの やうなもので，學生の 制服で ある。帽子は てんで 冠らぬ習 さうな。

一つゝ店で Oxford の 畫はがき や 案内記を 買つて，Hotel

に 往く。市君は 明日を 約して College の 夕食に 往つた。

私共は 淺君と 夕食を終へた後，暖爐の火 熾に 燃ゆる 廣間で 色〻故國の 物語をした。以前は 近しく 往來して，其結婚すら實は 私の 發意で ありながら，近年私が 死蔭の谷から 生きながら 墓の中に 埋れ 一切を 遠ざけて 居た爲に，淺君は ややに 遠くなり，"新春" すら よく 讀むでは 居なかつた。私は 私自身を Assert する 必要に 迫られた。私は 自分の立場，私共の旅について，長〻 と 力を こめて 話した。後で 妻が 言ふた如く，淺君の額に 蚯蚓の樣な 筋が あらはれて ぴちぴち 動き，向ふの隅に かけて居た 五十年配の 英吉利婦人が 日本語で 話す 私の顏を 熟と見まもつた までに。

（三）

十一月廿三日。昨奮の 後の疲れで，眠るともなく 眠り，寒い朝に 眼ざめて 私共を Oxford の Hotel に 見出した。廣間や 食堂には 暖爐が 燃えても，各寢室には 火の氣が 無いので また 伯林に 逆戻つたやうに 寒い こと 夥しい。

似た色故に 私自身 取り違へ 着て來た 胴着の 間違が 原となつて，私共は 此行 第一の 大喧嘩を して了ふた。昨日 Oxford に 來るに 少しも 氣が進まなかつたのは，斯樣な事が あらう爲であつたに 違ひない。

私共は よく 喧嘩をする。而して それは いつも 愚にもつかぬ 喧嘩だ。喧嘩は どうせ 愚にもつかぬ もの だ。然し 其れは 同時に 止むに 止まれぬ 喧嘩だ。喧嘩と云ふても，戰爭と云ふても，皆 そんなもので 正正 堂堂 なんかいふ 喧嘩や 戰爭が ありやうは なく，同時に 無くて濟める 喧嘩や 戰爭は ない。私共は 結婚以來 廿六年 喧嘩を しつづけて居る。最初は 私の 獨喧嘩で あつたが，妻が 段々 强くなつて 追々 立派な 喧嘩になつた。箱谷では 十 間の 長廊下を 隔てて 私は 重に 奥に居り，妻は に 母屋か 書院に 居るので，喧嘩も 一寸 臆劫である。此旅に 上つた以來，船は船房，汽車 馬車 自動車は 同乘 Hotel は 一室，四六時中 一處に居るので，喧嘩の機會は 存分に 與へられた。而して存分に 私共は 利用した。此意を 先途と 喧嘩した。私共の滯在した 殆んど 何の場所として，私共の 喧嘩を 印しない 場處は 無かつた。陰陽電氣の 取組み合ふて 段々 轟々 世界を 廻つて あるくのでは，雷樣の 世界一周だ。到頭 Oxford へ 來てまで，喧嘩の中の 最大喧嘩を して了ふた。それは 昨夜來 昂じた 私の怒が 一夜寢ても 收まらず，小さな 口火 から また 大火事と 燃え上つたのである。

火は 燃ゆるだけ 燃えて 燃え下つた。

後には 灰色の 味氣無い 燃え屑が 殘つた。

朝食を 食はず，掃除に來た 女中を 退け，火の氣のない 室にがつかり 顏見合はせて居た 私共が 顏を 洗ふて 暖爐の 燃えて居

る 下の廣間に 下りて 往つた時は，最早十一時 近かつた。淺君には 少し前に 市君の所に 往つて もらつた，私共なしに 見物し，午餐には 同道して 來るべく。

（四）

一時頃に 二君は 來た。

私共は うまくもない 午餐を終へ，面白くもない 見物に 出かけた。成る可く 多くを 見せやうとする 市君の 厚意を 無に しかねて，導かるる ままに 歩いたが，最早 私共の心 は Oxford には なかつた。

昨日 私共は 大學生の 寄宿舍を 見たいと 云ふた。市君は 入學して 日が まだ 淺く，英吉利學生には まだ 友と云ふ 懇意な友もないので，外國人に 談じて 見やう と 云ふた。Oxford には 印度，埃及，大陸からも 來て居る。日本人も 市君の外に まだ 數名居る，市君は 同じ College の 瑞典人か 何處の人かが 喜んで 其室を 見せやう と 云ふて居る事を 私共に 告げた。然し 私共は 見る事を やめた。

創立者，あの 神を 捨てて 王に 捨てられた 榮枯の夢の 夢み主 Cardinal Wolsey の 緋の衣着た 肖像を かけた Christ Church, Gadstone なども 其處に 學んだ Christ Church の College，五百年の餘になる 一番古い New College，某の畫家が 描いた Stained

Glass, 削り また削りして 凹くなつた 庖厨の 肉切俎 それも 見る。Cardinal Manning, Matthew Arnold, Swinburne などの 學んだ Balliol College, 其處の 教授の一人に 私は 新嘉坡で 私を取調べた Oxon の G——さんから 紹介の 名刺を もらつて來て居る。自轉車 乘りすててある 門に入つて, 門番に 聞くと, 教授は居た。然し 私は 會ふ氣にも なれなかつた。Magdalen College は Oxford 第一の 美しい College な さうなが, 其處の 禮拜堂には あまり 美しくもない Magdala の Maria の 畫像が 挂つて 居た。

總じて Oxford の College 二十二, 其 出身者 には 英吉利の名譽になる 子等の 幾人か 有たぬは ない。先の Edward VII. 今の 皇太子, 先の首相 Asquith から 今の 勞働黨の 領首の Henderson, さまざまの人が 出て 花を 咲かして居る。Tennyson だの いふ 詩人, Wesley などの 宗教家, Ruskin や Cardinal Newman 私共の記憶から 這ひ出す 曾ての此處の 住人は限りない。然し戰後の 疲勞で 唯休息を 思ふ 私共は, そんなに 心を遊ばす暇 ない。

折角 Oxford に 來ながら 何 氣にとめて 見るでもない私共を, それても 市君は 親切に 尙引張り廻はして くれるので あつた。私共は 私共の 今の氣分のやうに 降りはしないが 霽れやらぬ 鬱陶しい 空の 下を, Over かけた 靴 引きずる やうにして 昔 Addison が 散步した 並木の蔭, 名物 對 Cambridge 競漕の 艇庫が臨む Thames の 支流, 昨日の 雨で まだ 濕つて居る 柳の

垂るる 小さい運河に 沿ふた路, 河と河の間から 名づけたであらう Mesopotamia の 牧場なども 廻つて 見る。College でも 外でも時々 遊覽の客にも 會ふた。日曜で 競技か 散步からでも 歸る 六尺ゆたかの 無帽の學生 も あつた。學生らしいのは 成程 何れも 無帽で あつた。

Sheldonian Theatre や 書籍館などを 他所ながら見て, Hotel に 寄つて 勘定を 濟ますと, 四人は 馬車で 停車場に 往つた。

相濟まぬ心 で 市君に 禮を 述べ, 四時三十五分 の 汽車で Oxford を 立つ。

(五)

外は 直ぐ 闇い 夜になつた。內では 私共も 淺君も 疲れて 默つて居る。それでも Reading では 賣りに來た お茶に 一同 咽を 濕した。

Paddington に 着いたが, Taxi が 居ない。地下鐵に 乘ると, 正金の 三君に 會つた。三君は 紐育の正金から 來て 間は ないさうだ。亞米利加は 活氣が あつて 面白く, 英吉利に 來ると氣分が 違ふと 三君は 語る。私共の 入獨を聞いて, 三君は "獨逸は 憊れて居ますか" と 問ふた。"憊れて居ます, 着くなつて" と私は 答へた。而して "今の 私の如" と 心に 附け加へた。

例の Kensington High Street で 三君 に 別れて, 私共 三人

は 十字架から 耶蘇が 取り下ろされた 夜の歸りの 小さな 群の如く，悄悄と Hotel に 歸つた。

火をつけるばかりにして 女中が 置いた 暖爐を 燃しつけた。私共も 淺君も 長い 息を ついた。

それから 三人は 夕食に 往つた。

歸つて また しばらく 暖爐の 前に 憩ふ。

私は 曰ふた，少しも 心配は いらぬ，暴風雨の 後は，世界霽れだ。

淺君が 去ると，私共は 昨日來 疲れ切つた 心身を 墓のやうに 私共を 待つ Bed に 投げた。

第五

倫敦日記（續）

（一）

十一月廿四日。午後 Taxi で Nicoll に 妻の天鵞絨服の 假縫試しに 行く。

（二）

十一月廿五日。ヰクトリア 女皇の 誕生した Kensington 宮は つい 近くにある。今日は それを 見に往つたが，戰後 まだ 公衆に 閉ざされて居る。宮の前には 卽位當時の 十八歳の 女皇の像が，器用な 其末女 Beatrice 內親王の手で 造られて，而して 此 Kensington の 民衆によつて 此處に 立てられて居る。好い 娘ぶりの 女皇である。Kensington 宮前の 此像から，Buckingham 宮前の あの雄大な像まで，ヰクトリア女皇に 現はれた Womanhood の 發展は，卽ち 英吉利の 誇である。

私共は Kensington 宮から 其裏手の 淋しい巷を 辿つて，今國有に なつて居る 亡畫家 Leighton の 美しい家を 見る。小さな Mosque of Cmar でも 見るやうな 其 Amb Hall は，可愛い

Dome, 其一枚 一枚も 苦心して 東方から 蒐めた 四壁の Tile, Damascus 出來らしい 賓の目格子の Blind, 天井から 落つる 五色の光, 室の中央の 四角い Foun'ain に 絶えず 小さな 飛躍を つづけて居る 水の ちよろ ちよろ, 夢を見るやうな 靜かな 薄明り, ぱつと 電燈を つければ さざめき わたる 一切の 美しい Detail, まことに めでたい ものであつた。其他 階段の作りにも, 庭のとりやうにも, 殘された 畫にも, 器具にも, 器用な彼が Laocoon から 脱化した 力人巨蟒を 搾め殺す 彫塑にも, 靜かに 落ちついた 古希臘趣味 が よく あらはれて 居る。Royal Academy の President として, 素行正しく, 愛嬌あり, 男爵に 叙せられ, 皇室の覺え, 社會の 寵遇, 交游の歡愛 何一つ 欠けた處なく, 而して 生涯 獨身の 清く 美しい生涯を 送つた Leighton の 生活は 卽ち Leighton の 藝術で, それは 古希臘の 白大理石 彫刻でも 見るやうに, 美しいが 血の氣が 足らぬのが 私には 物足らぬ。私には 彼と 雁行した Millais, Ruskin の妻を 奪ふた Millais が 却て ヨリ好くさへ 思はれる。ヨリ溫かいからである。罪の無い人, 血の氣のない藝術, 香か 臭のない花, それは 私を 滿足せしめない ものである。

Lyon tea で 午餐を食ふて, 街上花賣りの 婆さんから 紅の Carnation を 買ひ, また Orange や 梨を 果物屋で 買ふて 歸る。去る 五月の頃 まで Palestina で さんざ Orange を 食ふたが, 最早 新しい Orange を 倫敦で 食ふて居る。

淺君が 來た。紐育までの 船の切符が 手に 入つた。和蘭船 Rotterdam, 二萬四千噸, 一月十八日 に Plymouth 出帆の 豫定である。一等船賃 二人 8.. 磅, 航金 30 磅を 拂ひ, 餘は 一月 拂ふさうな。N. Y. K. 支店の 俊英人が 骨折りの 結果である。先づ 大西洋も 渡れると いふもの。ありがたい 事だ。

(三)

十一月廿六日。今朝 福書店から "新春" が 十册屆いた。やがて 手紙も 屆いた。福君が 氣を利かして 留守ノ 無事を 報ずる かはりに 店員に 撮らした 小さな 寫眞の 數枚を よこした。母屋の緣に りん女が 腰かけて居る。地藏さんが にこ にこ 立つて居る。奥の書齋に 百日紅の影が 映つて居る。此等の寫眞が 私共に 多くを語つて 慰めた。猫の B が 見えないのが 物足らぬが, 寫眞送りは 好い 思付で あつた。

昨日 大使館から 晩餐の 案內狀が 屆いた。直ぐ 返事を 出したが, まだ 着かないと 見えて 大使館から 電話が かかつた。禮を云ふて, ついでに 郵便物 經送の禮を 云ふて, 不圖 氣づくと, それは 珍大使 其人の 聲だつた。

妻は 女中の Ada に 言ふて Iron を 借りて, 私の 袴や 自身の 紫のかさねの 襞を 長いこと かかつて 熨して居た。伯林では 其 Iron が 借りられ なかつた。

(四)

十一月廿七日。朝 妻に 髯を 剃つて もらう。十二三の 男の子が 硝子窓から 長いこと 覗いて居て，私のも 剃つて 下さい と云ふ 風をする。

靜かな 横丁だが，矢張 人が通るので 時々 面白い事がある。先日は 小兒車にのつた 女の子が 泣きむづかり 媒姆らしいのが 持て餘して居た。私が 硝子窓越しに 泣く子の 注意を 率いて あやしたら こつきり 泣きやむだ。心機一轉の原に 氣づかずに 媒姆は 小兒車を 押して 往つた。

新聞を見て，米國の 白黑人の 衝突が 心を 傷める。私の "還元" が 唯一の 方法らしい，それが 自然で あるから。

午近く 歩いて Kensington Garden から Hyde Park を 過ぎ，それから 市街を 通つて Nicoll に 往つて，妻の 天鵞絨服の 二度目の Fitting を する。書籍で 英語に親しむ 私に，裁縫屋だの 醫者だのの お供通辯は 骨である。面倒臭いから 大概にして置いて，妻に 叱られる。拂ひ殘りの 2) Pound 19 Shillings を拂つて歸る。

Nicoll に 居る頃から，室内急に 暗くなり，まだ 正午過ぎたばかりだのに と 不審をうつた。出て見れば 霧だ。Piccadilly Circus の 一茶店で，茶を飲むで 出る頃は，ますます 濃くなつて

來た。それでも 乘合自動車に 乘る事が 出來た。妻は 内に かけ，私は 込むで居るので 二階の席に かける。冷いやりした 煙のやうなおぼろの中を，速力を 緩めて，笛を鳴らし ながら 自動車は走る。薄黄ろい 薄明り，つけられた 街燈や 店頭の 電燈が 滲んだやうな ぼけた 光りやうを して居る。通り馴れた Kensington road が幻の世界を 行くやう。倫敦に來て 二週間餘，案外に 好い天氣の日が 多く，今日 初めて 名物の Fog に 會ふた。然し ひどいのは 中々 こんな事では ないらしい。

歸つて かはる がはる 入浴。此處の Bath は 貧しくて，少し 熱いのが 出るかと 思ふと 直ぐ 水に なる。餘程 調子を とる要が ある。

私は 例の 紋付羽織袴 に 草履，妻は 紫に 金鎖を かけ紫の 草履を 穿き，Taxi で 日本大使館 に 走らせる。霧も 收まつた。自動車の道が 少し變と 思ふたが，走るままに 走らせる。大使館の 前に 止まる。下りると 館前には 赤白 段だらの 天幕を張り，歩道にも白い 敷物を 敷いて，玄關は 晃々 と 如何にも 仰山な 設である。時間が 定刻から ちと 早過ぎるので 私共は しばらく 其邊を ぶらついて もう よからう と 玄關に かかる。白に金，赤に金など 恐ろしく 美しい 裝した 玄關番が 立ち，勳章光らした 燕尾服などが 往來して，少し 變だ。招待狀を 出すと，これは したり 此處は 西班牙大使館 で あつた。西班牙の 皇后が 先日來 見えて，倫敦に 滯留中の事は，新聞で 知つて居る。

今夜は 其夜會の 催が あるのだ。日本大使館は Grosvenor Square で 西班牙大使館は Grosvenor Garden だ。Japanese と Spanish は 音相通ふ。それでの 間違と 分つた。同じ Grosvenor だから どうせ 近所と 思ふたら，中〻遠い，Taxi で お出なさい，と 燕尾服が 云ふて，私の手帳に 日本大使館の Address を 書いてくれた。

私共の Taxi は 往つて了ふた。夜の事では あり，淋しい處で，中〻 Taxi が 居ない。ぶらついて居た 私共は，圖ぬけて 大きな 體で 直ぐ それと 分つた 巡査を 見つけ，事情を 話すと，巡査さんは 私共を 目標の 瓦斯燈が立つ 自動車の Stand に 連れて往つた。其處には 一臺も 居なかつたが，少し待つ内に 赤と綠の眼が 流るる如く 來て 其處に 止まつた。私共は 巡査さんに お禮のSを 贈つて，直ぐ それに 乘つた。而して 十分の後には，何の事も なかつた やうな 顔して 日本大使館の 玄關を 上つて居た。

戰爭中から 來て 働いて居る 小さん，漫遊中の 鈴さん，宮内省や 住友の人人，來客十二人程の 内輪な 晩餐會で あつた。初對面の 挨拶をした 珍夫人は 奥州訛りの物馴れた 好い 小母さん である。好い小父さんの 珍さんと 好い一對と 見受けられた。妻は 倫敦の 世帶向きの事や 洋服の事 何くれと 話を 聞いて居た。婦人の客は 妻一人。皆洋裝の中に 私共の 和服が 調子を破る。

日本食の 馳走がある。Java の 話が出て，富士山 が 幾個もころげて 居たり，ある 王宮の 招宴に 勅使が 玉座と 正賓の間を 往復した 小さんの話が 皆を 興に 入らせた。

私共は 今夜の喜を 述べて 先づ 席を 辭り，呼んでもらつた Taxi で 歸る。

珍さんの 話で 初めて 知つた 從兄の 横さんが 日本で 中風に なつた と 云ふ一事が，私の頭に 暗い影を 投げた。横さんは 戰爭中 倫敦に居て 珍さんを 扶けて 何角と 働き，日本に歸つて また 米國に 働きに 出かける つもりで，夫婦 鄉里に 歸省中 發病した と 云ふ話で ある。切つても 切れぬは 血の緣だ。一切を 絶つて Adam Eve に なつた 私共も，やはり 血には 來かれる。横さんの 中風の知らせは，つい 先頃まで 此倫敦に居て，今は 日本への 歸途 米國に居る 横さんの同輩で 妹夫の 海さんが 同志社社長に 招聘された と 云ふ 淺君の 話と共に，あまりに 著しい Contrast が 私を 愕然たら しめるので あつた。“有つ者は 與へられて 餘あり，有たぬものは その有てりと 思ふものをもとられる” と 耶蘇は 全く うまい事を 言ふた。

（五）

十一月二十八日。私は 全く 此旅に 出て來た事を 感謝する。よくぞ 出て來た。改造は 自己に 始まらねば ならぬ。宇宙の中心

は 自己だ。中心から 始まらぬ 改造は，空中樓閣に 過ぎない。

新しき村の 武君は 私を 評して，よい人だが ふるい と 云ふた。全く 其通りだ。私は 自分が よい人で ある事を知る。同時に私は 自分の ふるい事を 知つて居る。母胎を出てからだつて 五十二年になる。歴史あつてより すら 何千年になる。人類あつてよりなら 何萬年か 分からない。その位 ふるいのだ。

ふるいと云ふ事は 唯ふるい爲に わるいのでは ない。 それが中心生命の 發動を 疲げるやうに なる時 わるいのだ。其樣な邪魔ものは 掻き落し 掻き落し せねば ならぬ。樹木だつて 落葉をしたり，皮が 剝け 落ちたりする。 少しは 痛く共 頑皮は それが 成長の 邪魔になる時 掻き落されねば ならぬ。

私は 夥しい 古皮の 持主で ある事を 自ら 知つて居る。此旅行は 錆落しの 旅 である。摩擦の間に 自他の錆を 落すのだ。私共の 喧嘩も 其爲 である。

私は 日本を 出てからでも 最早 餘程 色色のものを 後にした。餘程 身 輕く なつた。

私は 私が 何を 與へて居るかを 自分は 知らぬ。 然し 自ら得つつ あるものは 著しく それを 感ずる。 私は 人間學實修の爲に，Husband 學實習の爲に，Democracy の 洗禮を 受けに，歩いて居る。過ぐる所，何か 古いものを 落し，何か 新しいものを 得て居る。就中 英吉利 に 來ての 一日一日は，大なる 獲物を 感ずる。私は 小さくなる。私は 凹む。私は 嗔る。私は 苦しむ。而し

て 終に 笑ふ。私は 私が 日に 日に 身輕くなり，日に 日に 自由になり，日に 日に 力が充つる を 感ずる。 Adam Eve は 日に日に 成長を つづける。

午后一時近く Kensington Garden に 散歩に 出かける。今日は 寒く，霧白く，Garden 内の 周圍五六丁には 過ぎぬ池が，茫茫として 大海のやうだ。 波打際の 砂上を 歩く。 鴎などの 水鳥が無數 霧に入り，霧を出で，水に入り，水を出でて居る。 倫敦の感じが 少しもせぬ。 此霧が 英吉利氣質をつくるに 何程 働いて 居るか 知れぬ。 十一月も 末になつて， 此處の Garden や Hyde Park の 欅やなんぞの 大木は 皆大低 落葉し，時には 霙が 降つたり，寒い風が 吹いたり 爭はれぬ 冬で あるが， 眼一たび 地上の 芝生 芝草に 落つれば，其處は 盛夏の時を 其まま 染むるやうな，萠ゆるやうな 生 生した 綠に 驚く。此綠が 英吉利人を 如何に 育てるかは また 料り 知られぬ 程で あらう。 而して 此綠も霧のお蔭で，すべてが 英吉利 特有の 自然の 位置の 結果に 外ならぬ。 猶太が 猶太人を 造つたやうに，英吉利人は 矢張 英吉利が造つた 英吉利人 だ。

（六）

十一月廿九日。朝食は 大抵 食堂の女が 持つて來る。 私共の女中の Ada は 根性者だが，朝食の Tray を 持つて來る 小さい

女の Ellen は，Harebrained Girl だ。私共は 朝食に Herring 或は Omelette を 食ふ。Herring が 無くて 一度 Sausage を 持つて來たから，昨日の 注文 傳票に，Sausage は 不要と 特に 注意の 赤鉛筆を ひいて 置いたら，今朝 白ボンネットに 白 Apron したり顔に Ellen さんが 擔ぎ込んだ Tray には，麗〻 とあの 大芋虫が 横たはつて居る。うんざりして了ふ。極稀に來る Mary は 温かい 大女で，前掛の Pocket に がちや がちや 入れて居る中から，いくらでも Spoon を 出して くれる。

私共が 倫敦に來て 間もなく Lady Astor が Plymouth の 補欠選擧に 打つて出た。立合演説に 敵の候補者が，私は 子供が 八人で，Lady Astor は 七人しかない，私が一人多いだけ 私が 選ばれる 資格がある と 戯れると，"まだ これからですよ" と Lady Astor が 聲をかけ，演説者が "私も まだ これからだ" と 答へて 大笑ひに なつたり，皆が 喝采を 浴びせるので Lady Astor "喝采は お向ふへやつて，私には 何卒投票を 下さい" なんか うまい事を云ふたり して居たが，到頭當選した。米國では Rankin 女史が 已に 代議士として 先鞭を つけたが，英吉利で 女の代議士が 出るのは 始めてだ。私共の女中の Ada に 嬉しいか と 問へば，Plymouth は 私の故郷ですもの と 答へる。而して Lady Astor は 田舎に居ても 皆に 親切にして くれる と 語る。其 Plymouth から 私共は 來一月 米國に 渡るのだ。

米國と云へば Lady Astor も 亞米利加 合衆國生れの Yankee

girl だ。英吉利の名士で 亞米利加妻をもつ 人の數は 少なくない。何樣しても 新家の血は 舊家より それより 動いて居る。英吉利あつてより 開闢來一の 女代議士も 米國人に 占められた。

三百年前 双方死ぬ思ひして 分れた Anglo —Saxon の 血が 立歸る 時節と なつたのだ。新家が 舊家に 報ゆる時節，新しい血が 舊家の 或は 滯る患ある 血を 新しくすべく 逆流する時節が 來たのだ。米國が 來なかつたら，昨年の 十一月十一日に 休戰には なつて 居ない。

米國は どんどん 舊家に 自己を 注ぎ込みつつ ある，英吉利が 少し たぢろくまでに。戰爭中 英吉利に 歸化した James 教授が 英吉利人を 滿足せしめたは もとより，英吉利を Dry にして了はうと云ふ 大計畫で 英吉利に 乘り込み，衆議院議員の一人をして 政府は それを 見過しにするかと 質問を 發させ，若い大學生等を 躍起とならせて 到頭 彌次馬の爲に 一眼を 潰された Pussy foot の Johnson，倫敦目貫きの 某公爵の 屋敷を 買取り 米國式大大ホテルを 建てる 目論見をして居て 倫敦人の神經に 輕い何かを 與へて居る 紐育の Hotel 業者の某，Regent Street など 歩いて 倫敦根生ひの 老舗の中に Yankee 靴店 帽子店などの 地歩を 占めて 居るのも，亞米利加が 如何に 英吉利に 注ぎ込んで 居るかが分かる。舊家は舊家の 權式を保つて，然し養分を 吸ふを 怠らぬ ところが 英吉利の 身上で あらう。

今日は 自動車で Piccadilly Circus の 探花樓に 支那料理を

喰ひに行く。少し 英吉利化 して居るが，然し うまい。 英吉利の婦人 や Khaki などが 大勢。日本人も 居た。

滿腹して ぶらぶら 歩いて居ると，四十絡の 少し 醉つたかと思ふ男が 私の前に 立ち塞つて 何か 分らぬ事を 言ひながら 右の拳を 突き出した。破落戸が 喧嘩を賣るのか，但は 掏摸か，と 少し 逃身に なる。拳固が 開くと，中から 出たのは 玩具の ニッケル製の 可愛いい豆靴で あつた。"For luck" と 云ふて くれるので あつた。西洋人も 緣喜を かつぐ。靴の緣喜は，旅人の私共には うれしいもので あつた。"Thank you" と 云ふて，私は 二志やつた。而して 可愛い 靴の一對を Pocket に しまつた。

地出來の Muskeat Grapes など 買つて，尙歩いて居ると Empire Theatre の 前に 來た。Russian Ballet が かかつて居て，Karsavina の 評判が 高い。二時半から 始まる と ある。時計は 三時を 過ぎて 居る。

最早 一幕は 過ぎて居らう。然し 24 志 拂つて 私共は 入つた。平間の椅子 に 導かれる。大入で ある。

幕間の Orchestra が 拍手の中に 終ると "Petroushka" の 幕が 開く。舞臺は Petrograd の Carnival の 騷ぎ。派手な服裝の男女が 大勢。ちらり ちらり 雪が 降る。東洋人らしい 老魔術師が 活人形を 出して 見せる。魔術師が 笛を吹く と 人形に 魂入つて，左甚五郎 の 京人形を 頬の赤い 裾短かな 西洋の 女人形振りで 行く Karsavina の 舞子，Petroushka に，緣衣黑面の Moor

が 小舍の中から もう すでに 手足動かして居るが，たまりかねたやうに 舞臺に 躍り出して 來る。其踊の輕さ，自然さ，鮮やかさ。二人の男が 舞子を爭ふて，トド 黑 Moor が Petroushka を 追ひ出す。

舞臺換はると，Carnival の 眞盛り。Gipsy girl 二人に 扶けらゝた 富豪が 踊りの群に 紙幣を 投出す。馭者が 長靴，保姆も 加はつて 踊り狂ふ。熊が出て踊る。果ては 面を被つた人 皆 踊つて，舞臺は 革命以來の 露西亞 を 其まま 大亂ちきの 騷ぎ に なる。

其處に 先刻の人形が また 飛び出す。緣衣の Moor が 曲つた 刀で 到頭 Petroushka を 斬り 殺す。Petroushka は 人人に 圍まれて 雪中に 死んで了ふ。

巡査が 老魔術師を 連れて來ると，魔術師は これは 人形だ，人ではない と 云ふ風をして，木の頭に 鋸屑つめた體，魂ぬけた人形を 手輕に 提げて 見せる。安心して 群集は 散る。魔術師が 一人になる。と 忽ち 小舍の屋根に Petroushka が 現はれて，生きて居るぞ と 嘲笑ふ所で 幕となる。

今の露西亞に 應用すれば，色色 解釋も つきさうな，有意 無意 の 間に 面白味 が ある。

すつきりした 幕間奏樂 が あつて，"夜半の大陽" の 幕が開く。夜半に 日が 出る 北の地方で 日の神 Yarilo を 迎ふべく 村中が 踊る。露西亞式 天安河原 と 云ふ處。長い袋袖の ぶらぶら

した Fool が 出る。村で擇むだ 日の御子の 若人が 兩手に 日の盾を 廻はして 踊る。Bahaism の 開祖 Bab が 不圖 思はれる。トド 其若人を 擔ぎ上げて 日の出に 向ふ處で 幕。

私共は これを 見つつ 露西亞の 夜明け，日の出の 幸を 祈つた。

露西亞の Ballet を 見ても，私は Russia 人が 世界第一の Artistic な People である を 想はない譯には 行かぬ。伊太利人や 佛蘭西人は あまりに Artist として スレて居る。若若して，自由で，自然から人へ，人から自然へ，卽かず 離れず，それで居てそれらしくない，これを 天成の Artist と せずに 何と云はう？過激派 の 一幕ですら，露西亞は 眞面目に あの Scene を やつて居るのだ。私は 露西亞人を 愛するを 禁じ得ない。

自動車で Hotel に 歸る。

葡萄は 好かつた。

支那料理 の 南京米 が 腹にあるので，夕食はぬき，手煎の茶で 時を あける。

Japan Society の Reception の 案內が 來た。"Uniform か Evening dress" と ある。袴や紫で また 出かけるも いやだし，燕尾服の 持ち合はせは なし，平人で 無論 Uniform は なく，生憎 Evening dress も ないから と 云ふ ことわり狀を 書く。Reception の場所は Claridge hotel。Palestina で 二度會つた あの Miss C. が 言ふて居た 由緣故の Hotel である。

（七）

十一月三十日。今朝は 霜が ある。

ぶらぶら Chelsea を Thames の方に 歩く。電車 自動車の往來も 少なく，干曜よ一番好い 歩き日で ある。

倫敦に來て 直ぐ氣がついた事は，大きな 貸家賣家の 澤山にある事だ。それで 居て 一方には 住宅難に 皆苦しんで 居る。政府も極力 何とか しやうと して居るが，間にあひ かねるやうだ。露西亞のやうに そんな家が 押入主人を 迎へるやうに なりは すまいか。英吉利の 赤くなりぶりは，注目に 値ひする。

Bible 手にした 老婦人達に 會ふ。Carlyle の Chelsea は 古い 落ちついた 處である。扉が しまつて居る 由緒ありげな 古本屋などが 見えた。唯有る辻の 煉瓦壁の Recess に 小さな 十字架の 耶蘇の像が あつて，黃菊の花が 獻げてある。側に 出征者の氏名を 掲げた Roll of Honour が ある。聖像の下に 金字で 耶蘇の語が "人 其友の爲に 命を捐つるは，これより 大なる 愛はなし" と 書いてある。哀しく なつた。

霜の白い 墓場に 迷ひ込んで，子供に 道を問ふたり，しばしば 地圖を 按じたりして，Thames の 岸に出た。薄霧の中から 赤い 大湯が 覗き，Thames は 汐干時で 泥の渚が 露はれて居る。處處に 設けた Bench に 息ひつつ，Thames に 沿ふて 到頭

Westminster 橋まで 歩いた。日曜で，此處らの Restaurant や Café は 大抵 閉ぢて居る。因つて居る と 通行の一人が 開いて居る店を 教へてくれた ので，橋を渡つて 小さな店で 輕い 午食を 済ます。

それから 乘合自動車で Trafalgar Square に 下りる。Nelson 像の 四隅に 大獅子が 腹這ふて居る 礎石の上に 赤い Jacket の 廿一二の娘が 金切聲で 演說をして居る。大勢立つて 聞いて居る。私共も 聽衆の中に 加はる。夕暮近い 薄光りの中に，Note を 左手に つかむだ 彼女は，Capitalist は 云云，Government は 何もしない云ふ，と 激越な調子を張つて 居る。聽衆は 冷やかしも せず，感激した容子も なく，ぢいと 聞いて居る。娘の背後には 男が 二三人。下では 斜面臺に 小册子 數多列べて 賣つて居る。皆 "Red" の 册子である。見て居ると，他にも 色色 持つて來て すすめる。私は 買はなかつたが，例の 英吉利腹で，よく こんなに 言はせ，賣らせて置く と 思ふ。日本では 出來ない。然し 私は 自分の娘が Nelson の 像の下の 礎石に 飛び上つて，金切聲を ふり立てるを 喜んだで あらう乎? それは 私には あまり 嬉しい 見ものでは なかつた。

日曜新聞など 買つて，Bus で 歸つた。

（八）

十二月一日。雨が盛に 降つて居るが，私は 大外套，妻も 三

越仕立の 大外套の 着ぞめをして 朝から 出かける。Kensington Garden を 北へ 横切る。黑い Coat の 若い女が 傘もささず 物案じ顏に Bench に もたれて居た。通りすぎて しまつて，言をかけなかつたのが 長く 私共の 氣になつた。

Queen's road の 停車場から Tube に 乘つて，Post Office 停車場で 下りる。郵便本局は 案外 小さいもので あつた。至急電報は 今 取扱はぬ。そこで 普通電報で "新春" の書店に 一千圓送金の 普通電報を うつ。電報料 三磅。

更に Tube で 大英博物館に 行く。英吉利のやうな 世界的大泥棒で なければ 出來ぬ 寶の庫。Bronze room を 少し，Asiatic Saloon を 少し 見ただけで，私は 疲れて 汗になつたので，其處の 大圖書室も，何もかも 又の事にして 出る。戰時には 此處も 軍用に 使はれて，まだ 全く 復舊しては 居ない。館內の 茶店なども 休んで居る。玄關の Fountain で 水を飲んで 出る。

それから 唯有る店で 茶とパンを とり，西班牙栗と 梨を 買つて，Tube で もとへ戻つて，また Kensington Garden を 通つて歸る。先刻の女は 勿論 もう 居なかつた。

女中が 皇太子の歸りを 御覽でしたか と 云ふ。此處の 皇太子が 加拿陀から 合衆國を 廻はり，大持てに 持てて 歸つた事を 私共も よく 知つて居る。國の元首は ますます 空位でなく なりつつ ある。戰爭中の 働きは 勿論，米國に往つては 自身機關車に のつて 汽車を 運轉して 米人を あつと 云はせ たり，よく

Bruxelles から 皇后と 飛行機で 英吉利に やつて來る 甲斐甲斐しい白耳義の君 と 云ひ，伊太利は勿論，西班牙なども 評判の好い 王様で ある。此處の嗣君も よく 時代に 相應した ヰクトリア女皇の 曾孫たるに 恥ぢない 若人らしい。それにつけて 私共は，我儕の 皇太子殿下が ちと お出かけを 願はしく 思ふ。私共は 我儕の嗣君に 新しい時代に ふさはしい Democratic な 元首の 候補者を 有つことを 信ずる故に，特に 斯く 念ずる。

Napoli の 下さんから 手紙。それは 思ひがけない Amalfi からの 手紙で ある。十月には 日本に行く と 謂ふて居た あの 彫刻家の Uccella 君が 病氣になり Amalfi に 療養中，急に 重くなつたので 下さんは 往つて 介抱中 と 云ふのである。患者の U さん と，見舞の一人 U さんと 私共を Napoli の 停車場に 見送つた Yenco 君が 伊太利語で 二三行 書き 添へて居る。下さんは手紙の中に 紅に染めた 蔦の一葉と 矛形の 小さな 一葉を 入れてよこした。

D'annunzio は Fiume, U は 病氣で，日本に 往けないのは，殘念な事だ。あの 頭の 禿げた，眞面目な，而して 少し 幽鬱な おとなしい眼をして居た U さんの顏が 私共の 眼にある。よくなつて くれれば よいが。

（九）

十二月二日。朝 Nicoll から 妻の服が 屆いた。上品で 美し

い。持つて來た Boy に Chocolate を 三つやる。

Knight's bridge の いつもの店で，あつい Beef steak と Ginger beer で 午餐をする。而して 地出來の Muskeat grapes を 買つて 歸る。

兩足のない人に 靴が 三片を與へた。而して 急いで來る 拍子に，妻の Bag の 口が開いて，懐中鏡が 落ちて 二つに 破れた。結婚前に 彼女が 買つた 小さな 四角い鏡。緣喜を擔げば，破鏡は離婚を 意味する。新しい 緣喜を祝へば，何もかも 新しくなる 時節だ。Hyde Park の Oak の 根もとに 置いて 歸る。

Hyde Park の Rotten Row は 騎馬の男女で 賑やかだ。夫婦轡を 並めて行くも好いが，大きな 黑光る馬上の 父に 引添ふて，小さな子が 小さな駒を うたせて ひよこ ひよこ 跑るも 中々 可愛い。

今日はまた 珍らしい 美日だ。空が 眞青で，日が 晴々と 輝やき，倫敦の冬に 斯樣な日が あるかと 驚かれる。Hyde Park を過ぎ，Kensington Garden に 入る。毎日 此時刻には，子供が きまつて 散歩に來る。或は 歩き，或は 小兒車で，赤ん坊 から 十歲前後のが，日曜には 母や父，Weekday には 媒姆に 連れられて 來る。大概の雨には，子供も すつぽり 雨裝束で，幌かけた 小兒車に 納まつて，薄鼠の Rain mantle 長々 と 着た 媒姆に 押されて 來る。幌の中で すやすや 眠つて居るのも 可愛い。差向いの 相乘りもある。おもちやの熊を 抱いて居るのも ある。雪白の 毛

糸に くるまつて，卵色の Bonnet から 大きな 碧い眼を ぱつかり 開いた 朝日の やうな 顔は 見る眼の 喜びである。 尖つた 白い 毛糸帽，全身白い 毛糸の服に 包まれて，白熊の子などの やうに ヨチヨチ と 手を ひかれながら 歩くのは，また 剽輕で 可愛い。おもちやの犬や 雉子を 引張つたり，眞物の犬を 前後に 走らせたり，鞠を 持つたり，少し 大きいのは 女の兒も 片足乘り 片足地を 蹴て走る 滑走車を 走らせたり，護膜風船を 飛ばしたり，嬉ゝと して 來る。此樣な 可愛いものを 見るのは 私共が 樂の一だ。Bench に腰 かけて 前を通るを 眺めたり，行き會ふて眼顏の 愛想をして 振り顧られたり，見ると 曇つた心も 舞ゝする。 あんまり 氣分が 重い時は，顏を見せるが 氣の毒で つい 傍向く 事すらも ある。

散歩道に 傍ふた 石楠や 躑躅，薔薇，其他の 宿根草 越年草の花壇には，今 園丁が しきりに 堆肥を 埋めて居る。春回つて 此等の 花壇が 花になり，今 黒つぽい 公園の Oak の 大樹などが 若若しい綠を 着けた 時が 思はるる。

美晴と 子供で 好い氣もちに なつて 歸る。

今日 出る前に，武道會共濟會の 發起者 小君が 來て，共濟會で 日本人に 講演を してくれ との 事で あつた。 私は別に 言ふ事が ないと 斷はつたが，來月 出發前に 言ふ事が あつたら 言はうと 答へた。 小君の 言ふには，日本から 習ひに 英吉利に 來る者は 多いが，教へに來る者は 少ない， 武道會は 日本を 英吉利

に 知らす爲の 會で，直に 英吉利人に 聽かす講演を するのだ きうな。小君は 倫敦に 居る 九年，本業は漆器商。共濟會は 倫敦に 千人から居る 日本人の 相互扶助の 爲に 設けた ものと 云ふ事で あつた。

歸つて，妻は 女中の Ada に Nicoll の 服を 見せたりする。

私は 新聞を 讀む。1917 年の 合衆國 衆議院で，歐洲戰に 參加の 決を 問ふた時，最初の 女代議士 Rankin 女史は 涙と共に 戰爭反對に 其票を 投じた。 これは 本當に 女らしく 上げられた 女の聲だ。 これで こそ 女の 代議士 である。 男の眞似は 男で 澤山だ。女は 如何な 場合にも 女で あつて 欲しい。而して 如何なる 場合にも 女は 居て 欲しい。

Cöln で 獨逸娘が 英吉利の 大佐の子が あぶなく 汽車に 轢かれる處を 飛び込んで 救ふた。 禮に 何なりと と 云はれて，獨逸娘は 前 Kaiser の 萬歲を 三たび 唱へて 下さい， と 望んだ。其望は 遂げられた。娘，出かした。大佐も 出かした。

但 最近 伯林を 觀察した ある 米人， ある 英人の說によれば，Hohenzollern 家の 日は 過ぎ，人民は 戰熱が さめた と 云ふて 居る。私も さう 思ふ。

（十）

十二月三日。雨。 文淵堂の 第二次の 爲替が 着いたので，私

共は 朝から 雨仕度で 出かける。例の如く Densington 公園を 横斷し，Queen's Road Station から Tube で Liverpool Street まで 行き，それから 正金支店 に 行き，427 磅餘を 受取り，300 磅を 預け，殘を 懷中に 入れる。三君の話に よれば，昨夜は 珍らしく 好い月夜だつた さうな。私共は 寢て了ふて 月に 負いた。

三君で 思ひ出したが，私が 不如歸で Wrong した 大公爵夫人は 私の母と 前後して 死んだ。母の 小さな 顏が出て居た 新聞に，公爵夫人は 大きく 死んで 居た。その後り 新聞によれば，大家の墓は 殘らず 青山から 那須野に 改葬された さうだ。浪さんも 成佛して 先づは めでたい事で ある。

文淵堂の 送金が，云ふて やつたより 餘程 多過ぎた ので，變と 思ふたが，彼が 氣を利かしたのであらう と 假定して，受取の 電報を 出す。

英蘭銀行近くで，辻賣の Muskcat Grapes を 買ひ，妻は 辻賣りの 燒栗を 三片ぶり 買つた。

それから Tube で Queen's Road Station に 歸つたが，まだ少し 時が 早いので，名高い Department Store の Whiteley に 往つて 見る。可なり大きいが，Bon Marché の 後には 驚く程でも ない。花屋，果物屋，肉屋，魚屋，郵便取扱所，銀行の出店，劇場切符まで 賣つて居る。"Xmas に 唯三週" と云ふ ビラ が，今年も 暮れ近い と 云ふ事を 旅の私共に 思はしむる。客の多い 筈。

輕い午餐を とつて，Hotel に 歸る。女中が まだ 掃除をして居るので，入浴をする。今日は 熱い湯が 澤山出て，頗の好い 日で ある。

讀書室に 往つて，誰も居ないので，Hotel の Boy と 語る。名は George。父は 1916 年に 戰死し，兄も戰死し，他の兄は 跛になり，自分は 毎日 High G te から 乘合自動車で 此ホテルに 通ふて來て，夜の一時頃 歸るさうだ。此ホテルには，Boy が 五六人居る。George の 身上は 多分 他の身上 で あらう。

私は 室に 歸つた。妻は 髮を洗ふて，Bath から 下りて來た。私が 何か笑ふて居ると，女中の Ada が 入つて來た。妻が 笑ふことを 窘める。尤だ。原因が 分らずに 笑はれた と 思ふ程 いやな事はない。私は 氣をかへる爲に Ada に 私の齡を あてさせた。32 だ と 云ふ。年の まる二十年 若く 見られた わけだ。自分の了簡の 若さを 見れば，Ada の 推測は 當つて居ないものでも ない。私が 五十一で 妻が四十五 と 云ふと，Ada は 呆氣に とられて居た。彼女は 廿四だ さうだ。兩親はなく，一番姉だ。Mystic な 書など 讀むらしく，中々 威張つて居る。

文淵堂から 電報が 屆いた。過日一千圓，今三千五百圓 送る と ある。何で 五百圓增したか。後で 聞けば 文淵堂に 屆いた電報には 四千五百圓 送れ と あつたさうだ。何で 先生が 五千圓とし なかつたか と 變に 思ふたさうなが 電文のまま 送つた と云ふ事であつた。私共には 好都合の Chance の いたづら。

週の Bill が 來た。中に Teapot 及び 銀の Dish の 損害，として 1£ 10S の 記入が ある。何時 破し たらう? と 思ひ返へす と 分かつた。朝食が 何時も ぬるく なつて 來る。妻が それを あたためる とて，暖爐の火近く 置いた。それで 燻つて 黑く なつた 其損害なのだ。然し 聞けば Dish 洗ひは 一時間 8 片さうな。それにしては 1 磅 10 志の損害は 少し 多過ぎる。

新聞を見ると，巴里 Genève 間の 汽車事故で 大分死傷が あつた。千法の 罰金を拂ふ 前夜 私共が 通つた あの 線路だ。時處の 隔て こそあれ，これも ナポリの 天井で あつた。

(十一)

十二月四日。卵もいらぬ，Bacon も 不用，魚も御免，Sausage は 眞平 —Simple tea をと Card に 書いて やつたら，No と云ふ語に 赤の二重線 まで 引いて やつたら，Ellen の Fool が どつこいしよ と ばかり 擔ぎ込んだ 盤臺には，卵と Bacon，魚に あの恐ろしい Sausage まで ちやんと のつて居る。あまりの 事に がつかりして 腹も立たぬ。運命に 頭を低れて，Sausage の外すべての物を 平らげる。然し よく考へると やはり 此方が わるい。何も 不用なものを 不用と 取り立てて 云ふ 要は ない。入用の品だけ 云へば 澤山なのだ。積極的に 斯 せよ と 言へばよい。"なかれ" の 要はない。ちよつとした 事だが，此樣な 處にも 東

洋 と 西洋の 違ひ が 出る。

髯を 剃つて もらつて，私は 日露戰爭前に 造つた Morning 妻は Nicoll の 仕立下ろしで 凛として，議會見物に 出かける。先日 大使館に 依頼して 置いたら，Lloyd George が 答辯の日が よからう と，今日の 木曜を 擇んで 大使館 から 紹介券を 二枚送つて來た。

Lady Astor も 議會入りが 濟んで，其評判が 新聞を 賑はして居る。初入りの時，當人の Nancy さんは 平氣の平左で，紹介者 の Lloyd George や Balfour など 云ふ 剛の者が 却て 大あはてを した事や，此 Lady 議員の爲に 特に 一室が 設けられた事や，彼女が 議場で 立話して 議長の 注意を 吃ふた事や，蘇格蘭出の むくつけな 議員が "吾輩は 婦人の參政は 嫌ひです" と 彼女に 面と向つて 言ふたに 對し，"あなたは 正直でだけた ねあります" と 彼女が 答へた事を 私共は 知つて居る。彼女は 再婚で，先夫の一子が 居る事は 最近に 知つた。良人を 二人も もち，子供を 七人も もてば，男を 子供に思ふのも 自然で あらう。私共の議會見物が Lady Astor 見で ある事は 勿論で ある。

地下鐵で Westminster に 行く。Lyon tea で パン，蜜パン，茶を 喰べる。

午後二時半には House of Commons の 玄關 Hall に 入る。議會歷史の Scene を 描いた 壁畫や，議會を飾つた 歷代名士の 塑像立像が 賑やかに して居る 廣間で ある。大勢傍聽が 來て居

る。中に 先夜大使館で 會つた 鈴さん達も あつた。やがて 若い日本人が 三名來て 私共と 並んで 腰かける。條約實施委員の一行さうな。向ふに 並んで居る 二人の 守衛の 恐ろしく 偉大な體格に ついて 色色 話して居る。

相對して 二列に かけて居る 傍聽志望者は，向ふの 上頭から四五人宛 入つて行く。中〻 間が ある。鈴さん達は 到頭 待ちかねて 去つた。飽くまで 待つて，五時過ぐる頃 私共と 若い三人の 中の 一人は 中に入るを 許された。

大使館ノ 紹介券を 出して，Panorama の 道のやうな 狹い廊下，階段を上り，現住所 姓名を 傍聽簿に 記入する。係の一人が 私共に 厚意を見せて，外套を 脱つてくれ，今日の 議事日程をくれたりする。それを 貰つて 私共は 傍聽席に 往つた。其處は 議長席に 向ふて，五段位 列んだ 二階の席の 三列目で あつた。

期した事だが，議場の 狹さが 一番に 私共を 撃つので あつた。次に 硝子の天井が 黄色い 夕方の明りを 落して，議場らしくない感を 私共に 與へた。頗る演劇的で ある。向ふが 議長席であらうが，其處に 議長の 影も 見えぬ。向つて 左が 政府委員の席で あらうが，持參の Opera Glass で 物色して 見ても，Lloyd George も 面知る 他の人人も 見えぬ。議席は 疎らで ある。今日は 佛蘭西の Carpentier と 英吉利の Joe Beckett が 拳闘選手の決戰日だから，其方に 出かけた 連中も 多いに きまつて居る。

迚も向ふの 傍聽席は，以前格子の隔てが あつた 貴婦 傍聽席で

あらう。婦人の多數は 勿論 Lady Astor の 議員顔を 見に來たのである。此方の 傍聽席に 印度の 若い紳士，若い印度 Lady が數 見ゆるは，今日の 議事日程が 印度に關する 方案だからである。後數日，此席から "印度に 完全なる 自治を與へよ" と 印度の青年が 叫んで 守衛に 出された事は 新聞で 知つた。誰でも 自分に 關係ある 議事を 傍聽したら，高い處から 飛び下りて 見たり，乃至 大聲に 叫んで見たり したく なる。

Division の 鈴が 鳴る。議場の通路を 向ふさまに 行く 大男，老男，髯男，無髯男——Lady Astor と 前後して 議會に 出た人に，Daily Mail の 持主 Northcliffe の 若い甥が 居る。廿二歳の議員は，女代議士に 次いでの Record 破りで ある。——の中に，撫肩の 黒服に 白い レエスの 襟 大學生の 冠るやうな 黒い角帽を 被つた 後姿が 現はれ，向ふさまに 歩いて 扉の後に 消えた。Lady Astor の 後姿である。傍聽席が さざめく。然し Lady は 他の路を 通つて 歸つたか，其後に 影を見なかつた。

Gladstone と Disraeli の 舌戰や，Bright の Crimea 演說，Parnell だの，さまざまの 名士が 雄辨は 斯樣な 平凡な 事務的な 狹い處で ふるはれたのか。成程 英吉利では ある。

印度法案の 議事に入つて，軍人上りの 某議員が 長〻と 演說する，質問の。私には よく 分からない。政府委員が 前屈みに なつて，卓に 兩手を つきつつ 返答する。訥りがちの 辯が 頗 Homelike の 好い感を 與へる。

果しがないから私共は六時過ぎには傍聽席を辭る。外套を脱いでくれた其人がまた外套など着せてくれる。拳匪の頃、三年も日本に居た人さうな。婦人代議士が出來て新面目を開いた House of Commons の悦びを述べ，握手して別れる。

私共が議院に入つた頃は可なり降つて居た。出る頃は奇麗に霽れて，月が皎々と照つて居る。地下鐵で Hotel に歸る。

（十二）

十二月五日。雨。雨を冒して外出。新聞賣の Stand を見ると，Vive la France！と大きく書いたビラがある。Carpentier が Joe Beckett に勝つたと見える。Evening News を買つて，Kensington 公園を歩き歩き讀む。果して色男の C が Bulldog の B に電光石火の勝をして居る。機慧が蠻力に克つたとの衆評。

後で Beckett は自分の稽古臺にした若者が自分の打撃が原になつて死んだ事を勝負の少し前に知つたと云ふ事が分かつた。C自身も B が何だかぼんやりして居たと云ふて居たさうだ。

亞米利加から歸つたばかりの皇太子が見物に往つて，勝つた C に握手し，負けた Joe にも同じく握手して "Good luck, next time!" と云ふた。此一語が英吉利の偉大の Key

である。敗北を敗北とする，而して最後の敗北とせぬ。Sport もそれである。戰爭もそれである。實際英吉利人は戰爭にも Sport 氣分で臨んで居る。餘裕が羨ましい。

（十三）

十二月六日。小雨。今朝から朝食を Simple tea にする。さんざ Sausage に惱まされた揚句だ。

Knight's Bridge Street のいつもの店に往つて，Beef Steak を食ひ，公園を通つて歸る。

正金支店の堀君が來て，倫敦に十人ばかり若い法學士が居る，それに何か話してくれぬかとの事。私は別に話す事をもたぬが，諸君の顏が見たいから，出るには出ると答へる。堀君欣然として歸る。

戰後の倫敦は，日日の活劇應接に遑ない程である。維新後の日本が少し似て居たであらう。常備陸軍が英帝國を通じて七十萬に過ぎなかつたに，戰爭中は總計五百七十萬からの兵を動かした。皆大學から，工場から，店から，銀行から，畑から，船から，馳せ參じ或は强徵された非常兵である。戰爭が止んで日日何萬と云ふ軍人が復歸除隊される。もとの仕事に歸らうとすれば，位置は大抵ふさがつて居る。女が男に代はつて居る場合も多い。勢ひ無職者が洪水の如く氾濫する。倫敦に集

まつて居る 無職將校ばかりでも 萬を以て 數へる。座食は 出來ぬので 皆が 色色の事を する。某の人佐は 馬車屋になつた。自分馭者座に 鞭をとつて 辻に立つと 色色の事に 遭ふ。ある時は 客をのせて 往つて ある倶樂部の 門前に 待つと，內では 大佐の 以前の 同僚等が 歡會の聲が 賑やかに 響いて 居た。ある時は 若い 少尉かなんぞを のせて往つたら，ある處で 若い 美しい娘が來て 同乘し，ある Restaurant で 散散待たせて，それから 出て來て 十志札一枚 もとの大佐に 握らせ，今から 叔母の家に 往くが 途中の事を 言ふて くれるな と 口止したり したさうだ。ある年若の 士官は 器用で 自製の 玩具の 立賣りを はじめたが，恥かしいので 半面を かぶつて 巷に 立つた。祿に はなれた 昔の士官が 編笠かぶつて 謠を 歌ふた 事などが 思ひ合はされる。ある若い女が 職業紹介局に 出頭して，失職の旨を 申し出た。戰爭中は 砲彈加工で 隨分の 日給を とつて居た。係が 女中の口を 云云すると，件の女は 艶然として 戰時の 日給を 云云し，侮辱すると 嗔つて 出て往つた。汽車賃が 無くて Manchester の 方から 打連れ 徒步露宿で Buckingham 宮に 直訴に 來た 無職兵士の 一團もあつた。陸軍の Haig 大將，海軍の Beaty 提督，共に 伯爵になつて，各十萬磅を 賞せられ，部下に働いた 諸將も おのおの 酬ひられたが，一方丸樣なので，大道に 金乞ふ 前兵士が居る。戰後は 諸般の 改造を 斷行して，Hero の 住むに 適當した 國たらしめる，と云ふた約束は 如何して くれる と Lloyd George 君は しきりと

窘めつけられて居る。これで 血氣にはやる 國民だつたら 革命總崩れに なる外は あるまいが，此樣な 難局を 此位に やつて行くのは，やはり 英吉利人だ からである。

（十四）

十二月七日。今日は 美しく 晴れたので，日曜ではあり，また 動物園に 往つて 見やうと，地下鐵に 乘る。電車で 隣り合ふた 親切な 中老の Lady が 掛金だつたと 見え 二度も 三度も 私共の 下りべき 停車場を 數へて後に 下りて 往つた。Regent Park で 下りる。Primrose Hill を 步く。日曜で 賑やかだ。栗鼠が 人馴れて ちよろ ちよろ 木から下りて 子供が くれる 落花生など 兩手に 擎げて 食べる容子が 愛らしい。こんなものが 何の位 人間の 愛を そだてるか 分からぬ。演說などして居る者も，聽く者も あつた。

特別 觀覽料 各三志を拂ふて 動物園に入る。いつもの口からでなく，構外の 動物學協會の 建物から 入つて，地下道を 少し行くと 何時しか 園內に 出て居た。Restaurant で Lunch。滿員の賑ひ。摸擬山の 幾組の熊に パンを やつたり，園丁が 投げる魚を 宙に受ける 海豹の 眼ざましい 剽業を 感心したり，さまざまの 蛇を 見たり する。今日も大きな 赤い夕日が 悠悠と 落ちて行く。園を出て 少し行くと 群衆の中に 十一二の 男の子が ふり

かへり ふりかへり して 居たが，手をあげたり お辭儀を したりして "——樣よ" と 歌ふやうに 曰ふた。

大分 倫敦馴れた つもりで居ると，歸りに 違つた 電車に乘り乘換驛を 過ぎて Hammersmith まで 往つて了ふた。驛夫が 注意で また 中途まで 逆戻りして，今度は 間違なく 歸る可き所に歸つて 來た。切符を やかましく 言ふ者も なかつた。切符と 云へば 乘合自動車などに のつても 切符は くれるが，下る場合は受取りも せぬ。信用を 原とする民と，不信用を 根にする民とは，そこに 情けない 差違がある。

女中の Ada が 休む日に 代はつて來る 他の女中の Hilda は近く 結婚して 香港に 往くと 云ふて 居る。

(十五)

十二月八日。曇つて 寒い。冬が 眞劍に 來た 感がする。冬は寒いが 好ゝ。

巴里の L'on Marché で 妻が誂へた 服が 一ヶ月に なつても未だ 來ないので，今日は 催促狀を 出す。

各個人は 歷史の 總計である。各個人が 全宇宙の中心である。一切の祈は 聽かれ，一切の祝福は 生かす。一切の努力，一切の勝利は 全人類 全宇宙の 得で ある。我儕は 成長する。宇宙は 成長する。神は 少し また 少しづつ 自己を 現はす。何を怠つて 淸ま

ら？何を 急ぐ要が あらう？

(十六)

十二月九日。Knight's Bridge の 食店に 住つて，例の如く 午食。Beef Steak が 今日は うまくない。公園を 通つて 歸る。子供の 愛らしき 事 例の如し。

Ada が 投島田と 云ひさうな 髮に 結ふて居る。

新聞を 見ると，エルサレムの Storrs 知事の 阿父 八十何歲の老人が，息子のつとめる エルサレムに 行くと 云ふ 記事が ある。雙双方で 嬉しいだらう，と 羨ましい。

(十七)

十二月十日。乘合 bus で Piccadilly Circus 行。街を 横ぎるとして，夫婦 はなれ ばなれになり，妻は 後に殘り，突貫した 私が あぶないとて 妻は 驚いて 後から 叫びを上げ，共に 冷汗になる。探花樓の 支那料理，南京米を 食べ過ぎて，後で 少し 腹痛を覺える。英吉利の 若い女達が よく 喰ふには 驚く。全く よく喰ふ。よく食べる，そうして よく 運動する。だから血色が 好いのだ。戰爭で 緊張し，克己し，節儉し，容色相貌 まだ 復舊しないので あらうが，それでも 伊太利女，佛蘭西女 と 比べて 著しい

女性の 力强さを 感ずる。

Green Park の 池は 氷結して，鴨や 鷗が 尻を 振り 振り 氷の上を 歩いて居た。

先刻の 横斷冒險から 恐氣が ついて 歩きつづけ，Hyde Park Corner に 來て やつと bus に 乘つて 歸る。

我傳のホテルの 料理は まづい。それは 洗濯の ひどいのと 正比例して居る。米國經由で 勉强に來た 若い T 君 なんか，あまり 此處のが まづいので，泊るだけで 食事は 他のホテルに 往つたり して居る。新聞で 廣告して，素人下宿を 探がし，二三軒 見つかつた さうで，近くに 引移る さうな。然し 此處でも 少し 改善の兆が 見えて，今夜は 生の Oyster が 四個ついた。珍らしい事である。

（十八）

十二月十一日。雨。今日 佛蘭西から Clemenceau が 協議に やつて來た。其 おみやげで あるかの如く，Bon Marché から 妻の服が 屆いた，と 云ふ たよりが 日本大使館から 來た。來たら 田舍まはりに 出かけやう と謂ふて居た それが 來たのだ。

隨分 雨が 降つて居て，內に居たいが，部屋の掃除も あるし，運動不足は 好くない。そこで 雨仕度 よろしく 先づ 近い Street の 新古鞄店に往つて，やや大ぶり の Suit Case を 買ふ。七磅十

志。Mark を つけてもらう爲に 殘す。其處に 天井に屆く程 積み重ねられた 古，中古，殆んど新しい 小さな手提 から 一身代入つてしまひさうな 大きなトランク，がたがたになつたのや，姓名の黑黑と殘る さまざま の 鞄相を 見ると，其一個一個が 何かを 物語りたげに 私共に 向ふかのやう。

妻は レエスのカラ を 二つ 買つた。あれこれと 妻が擇る間，ぢつと 待つて居るも，Husband 學 修業の そんなに 易くない 一課程で ある。

それから 自動車で 大使館へ。Grosvenor 違ひで また 西班牙大使館へ 運ばれる。これは 最初 Hall Porter が G. Square を G. Garden と 間違へて 敎へたが 原なのだ。しつこい間違ひを直して 大使館に往つて 紙包を受取る。それは 小包郵便でなく，通運で來たのだ。だから 長くかかつた。Bon Marché からは 先日の照會の返事が 來て，云ゝ日に 仕出したが，戰後で 長くかかるから，と 辯明して 來たので あつた。

歸つて，妻は 早速 着て見る。少し 寸法が 長過ぎたが，黑い毛皮で 緣どつた 絹の樣な 羅紗の上下，ふわりと 見ても 着心地が 好ささうだ。これで 何時でも 田舍まはりに 出かけられる，と妻は 喜ぶ。

私は 入浴して，暖爐の前で 今朝 讀みさしの 新聞を 見る。忽ち Daily Mail の 一項が 私の眼を 射た。それは 昨日の Times に 出た Edmund Gosse の 寄書を 轉載したのだ。NorthCliffe の

新聞は Times でも Daily Mail でも 近來 殊に 猛烈に 過激派征伐 をやつて居る。過激派の慘忍を 摘發し，ひどい寫眞を 出したりして，英吉利人の血を 大分 沸かして 居る。それについて Gosse の 投書が 出たのだ。投書によれば，Tolstoy の末女 Alexandra は，戰爭中は カフカスで 看護婦として 働き，近頃は 莫斯科で氣の毒な人達の 母として 働いて居たが，過激派政府は 彼女を 牢獄に 打込み，殺さうか 殺すまいか と 思案中 と 謂ふのである。

Como 湖畔の Bellagio で 暴風雨の空のやうな 眞黑い眉目で 脅すやうに 私共に 迫つた 露西亞，Tolstoy 夫人の 死と共に遠のいた 露西亞が 突然と また 私に迫つた。私は 息を呑むだ。父は死に，母は死に，同胞は離散し，誰か あの元氣な娘を 世話するであらう？ 同族 同胞 同胞の多くは 皆國外に 避難して居る中に，若い 女の 身そらで あの 露西亞に 踏み留まつて 働いて居た Alexandra，それでこそ Tolstoy の女と 私共を 喜ばせた 彼女を Bolscheviki が 牢に 打込んだ とは 眞實で あらうか？ 順禮紀行で父と私をのせた 馬車の 御者座に 座はつて 母が 撮つた寫眞に 面影を留めて居る 彼女，あの 雨上りの 夏の夕 Varonka の 川のほとりに 迷子に なつて居た 私を 馬車で 迎へに來てくれた Alexandra，其面影が 今私の前に 歷歷と 跳り出して 來た。

今朝の事で ある。此同じ 新聞で Tolstoy の "Reparation" が 明日 倫敦の 一劇場で 演ぜられる事を 私は 讀んだ。座頭自

身 ペンをとつて 露西亞の天才に 敬意を表する 意味を 書いて居た。"Reparation" は 何の劇か 私は一寸 思ひつかなかつたが，妻も見たがるので 明日は 往つて見やう と ほぼ 決して居た。巴里で "Faust" の オペラ を 見て 獨逸に 往つた。伯林で "Salome" の オペラ を 觀て 英吉利に 來た。倫敦で Tolstoy の劇を見たら，露西亞に行く事になりさうだ。と 私は 戲れのやうに 曰ふた。其同じ新聞で 今私共は Tolstoy の 愛女に かかる 不調の運命 を 知つた のだ。

兎に角 Gosse に 會つて 報道を 確めやう。Edmund Gosse の名は 英譯の 露西亞小說の 序文や ちよい ちよいした 論文などで 知つて居る。Daily Mail の 年鑑を見れば，貴族院の 圖書係で，齡も 七十を越して 居る。紹介がなくては 會ふて くれまい。然しぶつかつて 見やう。

時計は 五時を 少し過ぎて居る。私は 服を更め，順禮紀行をポケットに 入れ，"十三年前 Yasnaya Polyana で Tolstoy 家と 相識の者，Alexandra 嬢の 事について 五分間の面會を 請ふ" と 名刺に書いて，獨り タクシイ を 年鑑で知つた G さんの Address Hanover Terrace に 走らせる。

隨分 遠かつた。それは 瀟洒とした 高等棟割の 一つで あつた。石段を上つて 鈴を押すと，三十前後の 切口上の 女中が出て來て，主人は疲れて 床に入つて居ると 云ふ。七十翁だ，擾はすは 不躾だ，然し 兎に角 名刺だけは 通じて見やう。往つた女中は

ややしばらくして 下りて來て，病氣ではないが 休息して居るから，と "Sir" を 連發して，丁寧に 然し 嚴重に 斷はる。夫人に面會は 出來まいかと 駄目を押す。無論それも 駄目である。 無紹介の 夜陰訪問，Gさんが 達者で居ても 會つてくれるか 疑問である。如何に 聽後，如何に 改造中の 英吉利でも，それは 此方が 無理だ。年來何百と云ふ 數を 知らず 面會謝絶を吃はした 私が，倫敦で 敵を 討たれるも 自業自得だ。

まだ 去りもやらず 入口の廊下に 思案にくれて居ると，私と同年配位の 紳士が 入つて來て，女中から Gさんの 就床を聞き，G夫人の面會も 不可能と 聞いて，後で 上げて下さい と 用意して來た Note を 女中に 渡して，靜かに 出て往つた。思ひ切りのわるい 他の客も，今一葉の名刺に，御都合の好い時 十分間の面會が 願ひたい，と 走り書きして，ぽつと顏の 女中に 渡した。

私の 心の如く闇い 夜を衝いて，タクシイは 私を ホテルに連れ戻つた。

夕食后，暖爐の前で 私共は 夜深くるまで 話した。露西亞を如何しやう？ 如何して Alexandra を 救はう？ 露西亞に 往けぬ事はない。此處 英吉利の 勞働黨の 手蔓を たどつても，往くには往かれる。然し 往つて如何する？ 露西亞は なるやうにしか ならぬのだ。而して それが 屹度 一番好いのだ。私共の旅は 冒險の旅ではない。 神を試みる旅は すべきでない。私共は 生命を大切に使はねば ならぬ。露西亞と 見合はす事だ。然し Alexandra は？

難問題が 千曳の磐の如く 私を 壓する。

（十九）

十二月十二日。昨夜から Bolschevikiに 攻められ，今朝も また 攻められる。露西亞を 如何する？ それよりも 先づ Alexandra を 如何する？

私共は例刻に ホテルを 出る。而して 夫妻語りつつ 默しつつ Kensington Garden を 徐々に 歩く。あの池のほとりの Bench に かけて，散散 氣を採む。出るものは 汗ばかりである。今日は空曇つて 池の面 寒く，水鳥の影も 寒い。人人が 私共の Bench の前を 過ぎる。犬などが 過ぎる。不圖 日本語を耳にする。 頭を上げると，日本女中が 小兒車を 押し，五六歳の 女兒を 連れて歩いて 居るのであつた。

やをら 立上つて，園外の いつもの店で 午餐をする。 盲者の爲に 金を集むる女に，妻は 六片を 與へて居た。赤と淡紅の 薔薇を買ふ。色は美しいが，香の少ないが 憾である。

Hotel に 歸り，室に戻つて，また 一苦みする。

而して 終に 思ひ切る。

私は Alexandra を 捨てる。私の父と母とを 捨てたやうに。私は あの勇敢な娘を 捨てる。私は 露西亞に 往かぬ。 私は 露西亞を 露西亞に 任せる。私は 露西亞に 死んでは ならぬ。 一切は

自然に 委ねる。

妻は 私の決意に 同意を 表した。彼女は曰ふ，然です共，露西亞に 生れたのですもの，Alexandra さんが 露西亞に 自分を 與へるのは，少しも 間違つた事では ありません。

私は Alexandra を 捨てる，Russia を 捨てる如く。それは Alexandra が 假令 Bolscheviki に 殺されても，犬死ではない と思ふからだ。私は Alexandra の爲に 祈る，露西亞の爲めに 祈る如く。Tolstoy, Dostoievsky, Kropotkin の 露西亞が 獸類の國となつて了ふ 筈は ない。

私は 捨てた。即ち 自然に 委ねる。而して 安心する つもり，安心した つもりで 居る。

然し Bellagio で 彼の 本家 Tolstoy の 寡夫人から 出された あの問が くり返へし くり返へし 私を惱ます。"誰が 援けて 下さるのでせう？"

"それは 私だ。私だ。私が 露西亞を 援ける。私が 援けて 上げる。"

斯く 云ひたくて ならぬ。

然し 私は さう 責任を以て 言ひ放つ事が 出來やう乎？ 否，否。私の 答は これでなければ ならぬ。"誰も 露西亞を 援ける者は ない。日本の 兵でも，亞米利加の 金でも，獨逸の 學術でも，英吉利の 常識でも，佛蘭西の 趣味でも，露亞亞を 救ふ事は 出來ぬ。唯 露西亞が 露西亞を 救ふ。私を お信じなさい。お信じな

さい。唯 露西亞が 露西亞を 救ふのです。"

昨日からの 苦惱で 私は すつかり 疲れた。疲るる 私と共に 苦しむ 妻も 疲れた。

夕方 Suit Case が來た。日本流に Tokutomi Kenjiroh と Mark を 入れさせた。初めてだ。而して roh と h を入れたも初めてだ。私は思ふ，固有名詞は 其土地 其人 固有の 稱呼に 一定する事だ。他の風習に 倣ふ要は ない。Napoli で，Naples では ならぬ。Londres は やめて London に するのだ。Japan は いけない。Nihon だ。Nippon は 音が 促迫して 小さい。鼻に ぬける やうだが 大きく Nihon が よい。

末節のやうだが，こんな事から 着手も 必要だ。

（二十）

十二月十三日。曇。今日は Alex ndra が 頭を 去つたので，身輕に なつた。私は 無用の心配を やめる。而して まさかの時には 曲りなりにも 思ふ事を 言ふだけの Pen は 有つて居る。機に臨んで 爲る事も あらう。憂慮は 無用で ある。

いよいよ Tolstoy 劇を 見るつ もりで，Kensington High Street の 劇場切符販賣所に 往つたと，電話不良で 埒が明かないので，bus で Dover Street に下り，St. James' Theatre に往つて 二等入場券 二枚買ふ。"Reparation" は "生ける屍" だつた。

劇は 午后二時過ぎに 始まる。私共は それ迄の間を 近頃開催評判中の 大戰繪畫展覽會に 往つて 見る。會場の Royal Academy を 聞き違へて，其界隈を 二周の 無駄をする。

Sargent 以下 本職の畫家のが 數點。大部分は 實戰の目擊を描いた 素人 若くは 半素人の 國民への 貴いみやげ である。それは 戰場から 遠のいて居た 私共の爲に 特に 戰を再現して くれたものと 私共には とられた。油繪，水彩，墨畫，彫塑も少し。立體派の 大胆な 描法，古い 英吉利風，手法は さまざまで あるが，技巧が 眼につかない程 何れも 勁く もの言ふて居る。私共は 悚然とし，惻然とし，あるひは 涙に 隣る笑を 以て，あるひは 異樣な 驚駭を 以て，戰ひの日に 引戻されつつ，一枚一枚見て廻はる。多くの入場者も 皆言葉なく 熱心に 見て居る。

"塹壕の 頂を 越えて" と 題した 一枚。雪の塹壕。其内には 俯伏しの死骸も 見える。裝劍銃を 右の手に 鷲摑み，ゲエトル の 足踏張り，洗面器見たやうな あの 兜冑を かぶつて 今 向ふへ 這ひ上る 兵士の眼の 睨み！"雨の曉，敵襲，"灰色の 朦朧とした 畫面，今 敵襲に 應戰の Khaki が 三五人，敵彈に うたれた手を 押へて 此方に ふり向いた 若い兵士は，Nazareth で 埃及を 論じた Cambridge 大學生の 彼に 肖て居た。

白耳義から 巴里への 路で 私共が 通つた まわ邊の 夕の景色。向ふでは まだ 砲彈が 破裂したりして，前景には，水溜りに死骸が倒れ，擔架にのせたり，負つたり，扶けたり，手を 繃帶で

釣つたり，斷續 死傷の 行列が 來る。"戰の收穫" は 其題で ある。

Allenby の 活動で再會した Palestina に 此處で 三たび 會ふのも 少なく なかつた。

出征兵士の 深夜 停車場に着いた 光景。疲勞と 睡氣と痲痺した頭の 狀態が 其ままに 若い兵士の 輪廓も ないやうな 顏に あらはれて 居るのや，病院の Bed に 起座した 若者が きちんと 行儀よく 兩手を 膝についたのも，いぢらしい。

其の畫も，飛行機も，タンク も 數數 出て居る。敵機の眼を 眩ます爲の "Camoflage" の 製作や，Sargent は "Gassed" と題して 毒瓦斯に 中てられた 兵士の眼隱しして 疊東なくも 辿る行列を 描いて居る。

日間飛行機の 來襲。探照燈の光 八方から 空を射る 夜の偸襲。敵機の落した 爆彈に 壁落ち，窓蓋はづれ，鋪石 散亂し，おむねを つけた 男の子が 一人 靴の裏を見せて 俯伏しに 斃れて居る "A Taube" は 唯其一枚でも 戰爭を 否定するに足る 雄辯な叫び である。金ピカの 禮拜堂に 傷兵の Bed が ずらりと並び，Tube の Station が 國をとられた 白耳義の 避難家族や 飛行機よけの Asylum になり，Garden が 畑に 割られて 女達が 馴れぬ 甘藍を 栽培したり（私共が 日日 散歩する Kensington Garden の 一隅に，甘藍や 花椰菜などの 栽培されて居るのは，其名殘で あらう）偽造の俘虜を 手傳はして ゲエトル 凛凛しい

Land Girl が 甲斐甲斐しく 畑に 働いたり，戰爭中の 英吉利 此倫敦が 如何な 生活をして 居たかの 一斑を 私共に語る ものであつた。

私共は 此處に 感傷的のものや，誇張したものを 見出さなかつた。John Bull さんは もつと Matter of fact の 國民で ある。彼が 描くところは すべて 實際を はなれぬ。それだけ 私共に語る力が 尋常でない。私共は 彼が あの 緊服の中に よく こんなに感じ，見，而して それを 再現して くれた事について 深い感謝を 覺じ 得ない。

唯有る店で 午食をとり，午後二時少し過ぎ St James' Theatre に 往つた。一寸有樂座と 云ふやうな ちんまりした 劇場である。入りは 滿場。支那服の 支那 Lady が 何か ぼつり ぼつり 口に入れつつ 觀て居るのが 氣になつた。

"生ける屍" は "闇の力" 程の 力ある 作ではないが，Tolstoy の Drama の內で 劣作ではない。漱石の "心" "それから" "行人" 等に 取扱はれて居る 問題と共に，私には 無關心で あり得ない 作物である。私は 特に 私自身の爲に 演ぜられた ものかのやうに 熟心に 觀た。主人公 Fedya を 活かす Henry Ainley は 確にうまい。然し Tolstoy の Fedya ではない。それは Fedya より 寧 Enoch Arden に なつて了ふ。露西亞人と 英吉利人の 相違が 其處にある。Fedya が 强過ぎたばかりで なく，Masha も 同樣であつた。"I am genius. Nobody understands me." と Declaim

しては Fedya の 泥醉を 傾ける 若い Good-for-nothing が 苦しい中に 私共を 感嘆させる。Masha が Mandolin を抱いて Gypsy の歌を 歌ふと，私共は 何かは知らず 愴然と した 氣もちに なつた。

私は Tolstoy の 露西亞の爲に，Alexandra の爲に，涙るを禁じ 得なかつた。

午後二時半に 幕が 開いて，五時半には 終つた。時間は 短く，舞臺は 緊縮し，觀覽席は 靜肅で，まことに 氣もちのいい 觀劇である。

（廿一）

十二月十四日。雨。例の如く Kensington Garden に 往つて，持參のパン屑を 水鳥にやる。細雨 糸の如く，霧よ 春のやう。

園を 横ぎつて，いつもの 食店で 午食。此處は 菓子も賣る。クリスマス 近いので，窓には 美しく，うまさうな菓子が さまざまと 飾られて居る。私共が 午餐を 食べて居ると，十三四から 負られて居る 三歲位のまで 男の子 女の子が すべて 五人，硝子窓から しげ しげ 覗いて居る。菓子を 覗いて 居るのである。出てゆく 彼等も 共に 少し 歩く。皆 同胞さうな。後で 思へば 貧しい家の 子供であつた。何故 菓子を 買つて やらなかつたかと 殘念に 思ふ。それは Haifa から ナザレへの 途で，地びた

にぺつたり座つて私共のやつた菓子を嘗めるやうにして食べた跣足のシリア子供等と共に，長く私共の心に殘つた。

歸ると，淺君が來た。紐育に問合はせの結果，三月の十日にCorea丸が桑港出帆する，三月には他の船はない，私共の爲に一等船室をとつたが，それは內側の船房，と云ふ事が分かつた。三月三十日は少し晩い。聞けば二月二十日に春洋丸が出るさうだ。乘る程なら大きな春洋丸にしたい。淺君は私共が已に田舍に出かけたと思ひ，Corea丸に取りきめの返事を出したさうだが，春洋丸に變更のたよりを追かけて出してもらう事にする。

明日出發のつもりなので，淺君が歸るを待ちかねて，荷造りをする。今度は成る可く荷輕に出かける。

お氣に入りの此室を失ふも惜しい。帳場に言ふて，留守中も室料を拂つて借り切つて置く。而して荷物萬端其まゝに扉をしめ切つて置いてもらう。

第六
SCOTLAND

其一
FLYING SCOTCHMAN

(一)

蘇格蘭から少し英吉利の田舍を廻つて來るつもりで，十二月十五日の朝Taxiで King's Cross Stationに行く。春洋丸の事が氣になるので，淺君に手紙を書き，"Prefer February Shunyo. Cabin at all cost, please." と紐育東洋汽船支店に打電してもらう。停車場の雜沓の中に，Khaki服の日本軍人を二人見る。血色，身材，全く悲しいやうだ。嘸私共夫妻が他の在外日本人の眼に見すぼらしい事であらう。

十時發車。車室には私共の外に田中正造さんに肖た無髯の英吉利人。

汽車はEdinburgh急行，所謂"Flying Scotchman"で，倫敦を出たが最後，停車場も又停車場も駈けぬけ，走せ通り，二時間走り通してGrahamに來て，はじめて最初の停車をした。

午鶏が鳴いて，田舍に來た感が 長閑である。ボギイ式の車室 夜僅か過つて，私共は 食堂に 行く。

歸つて 新聞など 見る。先日 倫敦に 一寸來た Clemenceau が，來がけに 海峽の 驅逐艦の 甲板で，海荒れ 艇搖ぐ拍子に したたか 脇腹を 撲つた。ひどい痛だつたさうだが，默つて 上陸し，倫敦滯在 三日の間 ちやんちやん と 用を濟まし，應酬 滯りなく，四日目に 巴里に歸つて 初めて 醫者に 見せたら，肋骨の一本が 挫けて 居たさうだ。剛情な 爺，我慢の強い "Tiger" ではある。七十越して，偉大な "老人" と 云はるるを 嫌り，戰時は 佛蘭西の魂 を 燃やす 火元，ピストル で うたれても 執務を やめず，今も 此樣な 氣力で 戰の 後始末を やつて居る 健氣さは，何の位 佛蘭西に對する 外人の 敬愛を 煽るか 知れぬ。Madame France も 此樣な老人を もつて居る間は，老けたと けなす事は 出來ない。

米國では キルソンが まだ よくないやうだ。氣の毒である。理想に向つての 大踏歩が 思ふに 任せぬのは，お互に つらい 失望である。然し 順序は 踏まねば ならぬ。書齋出の 學者 政治家，人情に まだ 通ぜぬ。最初から 共和黨に 十分 わたりを つけて，内を固めて置く事が 足りなかつた。榮の冠は 單獨では 戴かれぬ。一人の英雄を つくり，一位の神を 築く時代は 過ぎたのだ。キルソンさんも Sadder and wiser に ならう。早く よくして やりたいものだ。

同室の英人は Lytton の "Rienzi" を 讀んで居る。

少し 話を 交はす。鐵道線路は 特急に 適すべく 特に 堅固に 出來て居るので，速力の割に 動搖が 少ないのさうな。窓外雨に濡るやうな 牧場の綠について，それが 濕氣の爲で ある事，蘇格蘭に行けば すべてが 山地風物に なつて，こんな綠を 見られぬ事など 話す。

外は 細い雨が 小止なく 降つて居る。Heat が 通つて居る 車室の内は 暖かで，硝子窓から 雫が 滴り 滴り する。私共も 英人も こくり こくり を はじめる。

霧雨を衝いて 汽車は 飛ぶ。午後二時に York。四時に New Castle。英人は 會釋して 此處で 下車する。私共は 車内に 茶を 呼ぶ。

(二)

昔 國民新聞社で 新聞翻譯など させられて居た頃 見た畫が不圖 私の頭に 浮ぶ。それは 安全燈片手に 坑夫の裝した John Morley が，同じ裝の Gladstone を 先導しつつ，"此 New Castle は 瓦斯が 危險だから，親分，氣をつけねえ" と 云ふ 畫であつた。Tyne 河上の New Castle は，昔から 製鐵工業地で，社會主義風が 早くから 吹いて居たのだ。其 Gladstone は 死に，其 John Morley は 貴族院に入り，英吉利は 赤くなりかけ，而して

新聞社の片隅でその畫を見た虫の樣な男一疋は，天つ日の金光線で世界を一括げにしやうと途轍もない事を考へて，夫妻で今其New Castle —on— Tyneを過ぎつつある。私は氣障な男として一度捨てたGladstoneを思ひ浮べ，彼がやはり正直で，時勢と共に新になる政治家であつた事を思ひ，今もあんなに面倒な愛蘭自治の問題で，年來の股肱同志に見捨てられ，あの老齢で獨りぼつちになつた胸中を今更のやうに思ひやつた。而してGladstoneから他の正直漢のJohnBrightに思ひ及び，歸途には墓でも訪ねてやらうと思ふた。妻にそんな話をして，汽車の窓から眺める。雨の夕暮，蒼茫とした中に黑く大きな工場や煙突が幻の如く，電燈の光がちらちらする。

（三）

英吉利人が下りた後に，二十三四の少しSourと云ふ顏をした婦人が來て腰かけた。毛皮の外套を脫ぎ，手提鞄を開けて子供の繪本などあれこれと見て居る。クリスマスの買物でもしたのであらう。

New Castleを出て，闇を衝く汽車がもう蘇格蘭に入る頃，Edinburghのホテルをきいたを口きりに，私共と彼女との間に四方山が語られた。Edinburghの石炭鑛主の娘で，今はしもたやの父母と住んで居るさうな。英吉利人でなく，蘇格蘭人で

ある事，English Churchの信者でなくPresbyterianの信者である事を努めて辯ずる。外套をはめると，彼女はそれを私共に見せ，毛皮は眞のSkunkで，300 Guinea，父のクリスマスの贈物と誇り顏である。約三千圓の外套だ。裏は綾織子に朝顏の花などの摸樣がついて居る。Ednburgh出來だと云ふ。花の朝顏を彼女は知らぬ。矢張蘇格蘭の花で，名は忘れたと云ふ。何でも角でも蘇格蘭に持つて來る處が蘇格蘭人らしく面白い。三千圓の外套を被るお嬢さん，臺所を覗いた事もあるまいと思へば，料理も出來て，妻は後で其手の大きい手，働いた手である事を私に告げるのであつた。

Edinburghにも獨逸の空中攻擊が二度位あつたさうな。兄は出征して負傷し，飛行機隊に屬した甥は獨逸の捕虜となり，休戰後にやつと歸つて來たと云ふ。

私共はいつもの“平和は唯婦人の自覺と結束で成就する”事を述べた。それに彼女も異論はなかつた。印度や埃及や愛蘭については，那威に往つた外あまり國外に踏み出した事がない年若い彼女にまとまつた考のありやうもなかつた。

午後七時汽車はEdinburghに着いた。私共は娘に別れて直ぐ構内のStation Hotelに往く。

（四）

娘が教へてくれた其ホテルは大きなホテルであつた。

私共は 匹階に 導かれた。寢室は狹いが，浴室は 馬鹿に大きい。顏など洗つて，食堂に下りる。娘が自慢しゝやうに，料理は 少なくも 倫敦の 我餐のホテルの 比では なかつた。"Wood Cock" などの腥ものが Dessert の後で 出現したり するのも，蘇格蘭風 で面白い。

室に歸ると，直ぐ入浴。湯は 濁つて 少し不氣味だが，それでも 好い 氣もちに 溫まつて，くたびれ切つた體を Bed に 横たへる。私共は 少し 汽車酔ひの 氣もちで あつた。"Flying Scotchman" で 394 哩を 九時間で 走つたの だもの。

其二

EDINBURGH

(一)

十二月十六日。十時頃から Edinburgh 見物に 出かける。

Edinburgh は 好ハ。典雅な都ゞ。丘と平地の 按排も 面白く，倫敦あたりに 見るを得ない 高い建築，雅致ある建築が 見る眼を 悅ばしめる。私共のホテルの 前通り，Princes Street は 歐洲一の 美しい街と 誇稱される。一方 Edinburgh Castle を 見上げて，公園一帶を前に，此處は 電車も通さぬ 片側街の まことに氣もちの好い 街である。街側公園に 二百呎の Gothic 尖塔，其中央に 腰かけて居るのは Scott である。Kensington Garden の Prince Albert 紀念碑に 似て，遙に 大袈裟である。Scott の 蘇格蘭人に 愛されやうは 眼ざましい。名が 已に Scott で，其性格がまた 蘇格蘭人の愛を あつめるやうに 出來て居る。私共の 泊つて居る Hotel の Station も，Scott の 小說の名を とつて Waverly Station と 呼ばれる。Scott, Burns, Stevenson と 引張れば 英文學を 飾る名が ずらり 出て來る。亞弗利加 の 道開き Livingstone も 此公園に 立つて居る。これも 蘇格蘭の 正當な 誇りの 一つである。

(二)

私共は すべてを 措いて 先づ 古城に 上る。悉皆石で たたんだ 急勾配の坂を 大分上つて，城の大手口 に 出る。觀覽料二人一志を拂つて 入る。 古城は QueenMary 時代のままに 殘されて，其處には 兵士が 今住むで居る。蘇格蘭兵士の 頑强は 古來 響いたものだ。北方の沉鬱，山地の磽确が，剛健な 蘇格蘭 風を 造つた。Sydney Smith が，“蘇格蘭人に 洒落を 分からすには，鑿と 鋸が 入用だ ” と 云つたやうに 生眞面目さも 其 產物だ。Waterloo で 嵐の如く 寄する ナポレオンの 裝甲騎兵を 頑として 喰ひとめた それも 蘇格蘭人の 頑强が 大分 効いて居る。 今度の 戰爭にも 蘇人の 健鬪は 敵味方の 認むる所で あつた。 蘇人は 英人より より多く 獨逸人に 似て居る。“ch” 發音が 獨逸こ 近いのも ただ では事ない。米國人で 死んでも， Carnegie は Scotch であつた。Scotch は 何の世界に 出ても Scotch だ。蘇格蘭が 蘇格蘭人を 造るのだ，英吉利が 英吉利を 造つたやうに。

近くを見て歩く私は，Edinburgh に 來てからは 時時 噴き出す事が ある。 太縞の 短い Skirt を ひらひら させて， 膝ぎりの 靴，薔薇色した 股の一部を 露出して， Girl が來る——眼を上げると 大の男，兵隊さんだ。それが あの 兜巾の樣な 帽をのせて，左の肩から たたんだ外套を 斜に 負ひ，Palestina あたりの 水撒夫

が つるす革囊に 聽診器を あまた 挿し込んだ やうな Bagpipe でも つるして來ると，全く 破顏せずには 居られぬ。そんなのが 此處の城中には 大勢居て，私共を 悅ばせるので あつた。

蘇格蘭人は 氣位が 高い。決して 自己を 下さない。 今の 英國 皇室は，即ち蘇格蘭王統の血を 承けて，其實 蘇格蘭が 支配して居る と 謂ふて 居る。それは 萬更 自惚ではない。城の上は 即ち 古王宮で，昔のものが 其ままに 保存されて居る。私共は 王冠寶劍などを 見る。それから Queen Mary の 居室と 寢室を 見る。Monastery の やうな 王宮。尼寺の一室のやうな 素朴な室。寢室の狹さが 驚かれる。王宮は 城の丘の 南に 寄つて，懸崖の上に 高く聳え，此處から 南面の眺望が うち開けた もので あつた。居室にかけられた Queen Mary の 像は，いづれも 人の好い 美人である。從姉の Elizabeth に 妒まれ 陷られる 資格は 立派に 備はつて居る。其後裔が 今 英吉利の 王位に座すと すれば，薄命の彼女は 負けて 而して 勝つた のだ。

何百年の 風雨に 黑むだ 門樓，建築，舊式の砲門が 昔のままに 並んで居る。屈竟な見晴らし だが，惜しい事には 此日 空は 淸く晴れながら 濛氣が Edinburgh 全市を 掩ひ，白濛々たる中から 赭黑い 建造物の 高低參差を 望む外，海かけて 心地よく 眺むる 眺望が 得られなかつた。

城を 下つて，南側の 靜かな通りを 歩む。小學校歸りの 少女等が 珍らしがつて 挨拶し，行き過ぎても ふりかへり ふりかへり

手を擧げ 愛想をして 私共を 悅ばせる。

Princes Street で 妻は Overshoes を 買つた。店の老人が私の Spat の 着け方が 左右 違つて居ると 注意して，手づから 直してくれた。

Academy に 繪畫の 展覽を 見る。繪畫は そんなに 面白くない。人少なの Bench に 憩ふて，買つた葡萄など 喰べる。何少しぶらぶらして ホテルに 歸る。

室が まづいので，帳場に 變更を 談判したが，空室がない。讀書室は 人多く，靜寂に馴れた 私共は 落ちついて 物書く氣にもなれぬ。室に歸る途中 女中に會つたので，それと 云ふと，直ぐ卓子と 革の椅子を 持つて來て くれた。電燈つけて 書きものをする。これで 暖爐か Heat かまれば 申分なしだが，戰後の事で暖爐は 空しく，Heat は 唯 Bath に のみ 通ふ。

（三）

十二月十七日。亞米利加の 天文學者の一人が，星學の觀測から 1919 年の 十二月十七日は 天變があり，地の終に なるかも 知れぬ，と 云ふ豫言をして居る事を 私共は 新聞で 知つて居る。それが 可なりの不安を 民衆に 與へて居た事も 知つて居る。英吉利の天文學者 氣象學者から 安心すべく 宣言が 出た事も 知つて居る。世の 終末の觀念は，常に 人間に つきまとふ。戰占の大戰を

經た 昨今は，殊に 其感が 强い。誰も 古いものの 死を 期待して居る。現に 私共は 第二の創世，新天新地の 開闢を 主張して居る。それは 必しも 此地球が 滅びて 他の地球が 出現する，我等の現身が 亡せて 他の自身が 化生する，と 云ふ 意味ではない。私共自身は，此地球は 飽くまで 我等の住家で，人類の活動は 地球の 續くかぎり 絶ゆる時なく，而して 地球の壽命は 昨今に 盡きるものでは ないと 信じて居る。何故なれば，これを 自己に 徵しても，人類が 發展進化の 絶頂に 達して居るとは 決して 想へぬし，ある完成に 達しないで 其生命が 中途に 斷絶する事は 萬あり得べからざる 事である。私共の 新天地は，ふるい ふるい 此地球が 新しい光に 照らされたのだ。私共の 第二の 開闢は，人類の新しい Start なので ある。そこで 私共は 一九一九年十二月十七日を 以て 此地球が 終るとは 信じなかつた。私は 妻に曰ふた，萬一 罷り違つて 此十二月十七日 に 世界が 終ると したら，Scotland から 昇天しても よいでは ないか？

此頃 私は わるい習慣が ついて しまふた。夜の一時 から 二時迄の 間に さめる。それから 長いこと さめて居て，また 曉近く眠るので ある。此さめた間が まことに 快い。それは 鴉片の如く，健康に よくない と 思ふが，さめた 其數時間が たまらなく好い。色色の顏が 現はれる。樣々の場合が 浮ぶ。こぐらかつた紛紜が解ける。不快の苦さが 甘くなる。疑問の暗が 照る。愛が 支配する。私は 私が 日に 日に 成長しつつ ある事を 感ずる。私共

は 本當に 愛された 子女である事を 感ずる。私共に 托された 使命を 疑ふ餘地は ない。

今しも こんな 甘い 現と夢の境に 横とはつて居ると，突然硝子窓が ぐわた ぐわた と 鳴り，からん と 硝子が 落ちて 破はるる 響がした。轟と云ふ 海嘯のやうな 響が 家をうつた。それはだしぬけに 猛烈な 南風が 私共のホテルを 襲つたのである。四階の南面にある 私共の室は，眞正面の 衝に 當つたのだ。

窓も 其音に 驚いて さめた。

私共は Bed から Bed に 語つた。世の終りに ならぬまでも，何か 天變 地異が あらうも 知れぬ。針一つ 落しても 全宇宙に影響なしには，濟まぬ。星界の 異變が 地球に 無交渉で あり得やうか？私は 十二の昔 京都は 同志社の教場で，突然 火藥庫が 破裂したやうな 響がして，教室の 硝子戸が 破れ落ちた 當時を 思ひ出した。學生も 教師も 外に 走り出た。それは 白晝であつたが，私共は 西天に當つて ぱつと 光るものを 見た。衝突した 星の破裂か，單獨の 爆發か，いづれ 其光るものは 隕星で あつた。教師は 目測で 彼の 光る物體の 距離を 何里とか 云ふた。それを今思ひ出した。自然と人事の 交渉を 見れば 見る程，疾風迅雷に色を變じた 古聖も，天象地變に 喜憂を かけた 古い習慣も，少しも 陳腐な 無意味では ない。我等は 如何に 威張つても，支配されて 居る。一部であつて，全體では ない。子であつて，父ではない。父ではないが，子ではある。敬虔と從順とが 私共を しんみり

と 念じさせ，また 悟らせた。地球の 壽命 人類の 壽命に ついて私共は 祈つた。

突風は 唯一陣 吹き過ぎて，あとは 靜かに なつた。

私共は また 明方近く 眠つた。

八時半に 起き，十時に 朝食に 下りる。Porridge が うまい。鹽が 加へてある。"Scotch は Oatmeal で 文學を かい立てる" と云ふ 諺もあつて，此處の Oatmeal は 確に うまい。鯡の生の 燒き立ても うまいものである。地中海の魚を 坡西土で うまいと思ふた。英吉利の魚も うまい。然し Turbot だけは 佛蘭西で Palestina の Mutton 程に いやになつた。鯡は うまい。

(四)

今日は Forth Bridge に 自動車を 走らす。

Edinburgh 市を はなれ，雨後の道路は，低い丘や 畑地や 貴族 豪富の 廣濶とした 別邸などの 間を うね うね と 北西に 走る。初冬の風物，空も曇つて 淋しい。西北の 地平線に 青い 鋸齒狀の 斷續した 山と見たのは，雲で あつた。

二十分 走つて Queen's Ferry に 來た。自動車を 下りて，水に突き出た埠頭の端近く立ち，所謂 Forth Bridge を 眺める。北の風が 飄々吹いて，寒い。

Forth の 入口に架した 此橋は，Colombo 防波堤や，私共

は 見なかつた Nile 上流 Assuan の 堰 などと 共に，英吉利の偉大を語る 紀念碑で ある。約三千五百萬圓，七年の日子，鋼鐵五萬噸を 費やして 約三十年前に 出來した 此橋は，長さ 一哩と五分の一，高さは 水底から 四百五十呎で，汽車の 線路は 最高水平上 160 呎を 走つて 居る。丁度 汽車が 其線路を 此方へ 來つつある。其處は 高架式になつて，水を 出づる 石だたみの 支柱は高い爲に 一見 危げな 感があるが，水中 五十呎乃至九十呎が 程け，底邸の 直徑 七十呎，頂部直徑 六十呎の堅固な基礎が 支へて 居るのだ。高架式の Bridge は 直ちに 鋼鐵の Suspension bridge に 連なり，それは 二つ半の Span を 開いて，可なりの汽船が 今しも 其最北のを 潜らうと して居る。橋の鐵面 約 1 町歩餘に 上り，鋲をうつこと 八百萬，毎日 ペンキを塗つて居て，塗り上げるに 三年かかる さうな。これで 蘇格蘭の 東海岸線が Forth の 入江を 迂迴の要が なくなつて，二十哩の距離が 近くなつたと 云はれる。

寒い風に吹かれて 橋を見上げ，濁つた水を 眺め，更に 北岸の方を 眺める。入江向ふは 低い丘，其處に 人家の群がりも見えて，私共は 丁度 新嘉坡は Johore の 渡しに また 立戻る氣が するので あつた。

畫はがきなど 買つて，また 自動車で Edinburgh に 歸る。

而して Princes Street で 下りて，妻の屋内用の かざり紐，編棒に Scotch の毛糸を 買ひ，それから 果物店で Suisse で 曾て 會ふたやうな 大粒の 紫葡萄を 買ふ。一房の目方 二封度近く，價

も 十志餘に 上つた。歸つて 數ふれば 一房の粒は 七十七。味も 相應に 好かつた。六月 エルサレム で 未だ無い 葡萄を 食ふて 以來 隨分 色色の 葡萄を 喰ふ。白耳義の Muskeat は 最上で あつた。Scotland の これも 好い方だ。

私共の Bath は Bedroom より 遙かに廣く，Heat が 通つて 温かい。私共は 歸來一浴。卓子椅子を Bath に 運んで，Bath で 新聞を 書き Bath で Charlotte Corday に 殺された 佛蘭西革命の Trotsky——Marat の事など 思ひ興じつつ 書き物を するのであつた。

猛風の一陣に 驚かされたきりで，曇りながら 日は 靜かに 暮れ，靜かに 夜になり，夜は 靜かに 更けた。

私共は 地球の壽命が 今日で 盡きなかつた事を 感謝しつつ Bed に 上つた。

* * *

Edinburgh は 氣に 入つた。見る所は 數數 ある。それから Edinburgh を 踏出しとして 北へ 湖國の風物，荒寥とした 山地の風俗も 見たい。然しそれは 湖に月眠り，野山に Heather の 花 さく頃に しやう。それ等は またの樂みにして，明日は Glasgow へ 往かう。

其三
GLASGOW

(一)

十二月十八日。朝十時五分の汽車で Edinburgh を立つ。車外は雨曇りの景淋しく，車内は別に人もないので，私は新聞を見，妻は Edinburgh で買つた Scotch の毛糸をほぐして球に総ねて居る。

一時間にして Glasgow の Queen's Street Station に着く。電話して置いたので Station Hotel に行く。廣場に面した二階の室に導かれる。二つの窓は銅像など多く立つた廣場を見下ろし，深紅の被をかけた Bed や深紅の Sofa が美しい。

然し Lunch を終へて室に歸ると，中〻寒い。女中を呼んで暖爐を燃すべく命ずる。Sorry——お氣の毒さまと答へる。暖爐の傍にはちやんと石炭箱が備へてあるが，Mantelpiece に注意のカアドが立つて居て，病人以外石炭を焚くこと無用とのお布令を書いてある。1918年十一月の日附だが，一年後も同樣と見える。蘇格蘭も戰爭をしたのだもの，無理はない。

下の Drawing room には火がある，と女中が敎へてくれる。一階下りると，小さな客間を見つけた。人は居なくて，暖爐

の火が美しく燃えて居る。私共は椅子を火近に引寄せて，書き物など する。鈴を押して茶など取り寄せる。六時半になると，此處で Reception があるから と給仕に立退きを命ぜられる。

(二)

十二月十九日。Glasgow に來たが，造船所など別に見たくもなし，Edinburgh の後に，市中の見物する氣にもなれぬ。例の大觀す可く，自動車を南の郊外に走らす。倫敦では見なかつた女の電車車掌を Glasgow で見る。Burnside と云ふ處が Glasgow を見晴らすと聞いて，其處まで自動車を走らす。寒風の颯〻吹きすさぶ丘の上からは，Glasgow の一部を見ただけで，大觀の快活は獲られなかつた。車掌は物好き客をもてなす可く夏は好ささうな渓流小瀧などのある幽雅な遊園に私共を連れて往つたが，茶一杯飲むでもなく其處を出た。古い英吉利畫に見るやうな田舍の片影を見ただけがせめてもの獲物であつた。

午后は前の廣場を散歩する。Gladstone や Burns や James Watt 其他數〻の紀念像の中央に，八十呎の高柱が立つて，其上に Walter Scott がちんと澄まして居るのは，Scott さん少し高上りが氣障である。

第七
JOHN BRIGHT

其一
MANCHESTER へ

(一)

十二月二十日。雨。朝 Caledonian Station に 自動車で往つて，十時の汽車で Manchester に 向ふ。

一時間程も 走つた處で，妻ば卒然 Muff と 毛皮の Scarf を Glasgow の Hotel に 忘れた事を 思ひ出した。手紙を書いて，車掌に 賴み，途中驛で 投函する。

一路雨。車內無人。私共は 午餐に 食堂車に 往つたきり，車室に相對して 新聞など見る。米國の若夫婦が，姙娠中の二番目の子を 望まずあらば 賣ると 云ふ 廣告を 出して居る。生活に 困るから と云ふ。而して 分娩迄には 費用が かかつて居るから，ただはやらぬ，賣る，と 謂ふのだ。側聞とする。米國に 大分行はるる 出產制限，所謂避姙と 共に，胎內から 子を賣る，と 云ふは 大問題である。私共の 尺度は "自然" である。"自然" だから 人情で

ある。"不自然" 卽ち "不人情" は 私共の尺度に はづれる。避姙も，胎內の子を 賣るも，共に 自然でも 人情でも ない。それを 餘儀なくする 樣な 生活上の 欠陷が 社會に あるならば，それは 端的に 改められねば ならぬ。それが 當人の 欠陷にあるならば，それは 改められねば ならぬ。何は 兎もあれ 近代人が 自然を侮どり，神に負き，吾儘をする傾向は 著しい。

私共は 先日 倫敦で見た 新聞の記事について 話した。孤兒を養ふて居た 家族が，實子が出來たので，孤兒を 他に讓る 廣告をし，而して それを 引受くる家族が 出て來た と 云ふ 記事である。義理 體面を 主とする 日本では，ちといと Shock を 與へやう。然し 無理は 人情でない。無理をする處から 無用の悲劇も 起る。胎內の子を 賣るに比すれば，實子が出來て 養子を 讓るのは，沒義道のやうで 人情に適ふて居る。すべて 英吉利人の やり方は 象形文字で行く 日本流の 及ばぬ 妙味がある。これは 日本に 取り入れても 怪しうはない。尤も 人情から するのと，單なる 打算厄介拂ひから するのと 混同して ならぬは 勿論である。

其土に居て 其土の 出來事を 新聞で見るのは 大なる 興味である。私共は 毎日 何か 面白い事に 出會ふ。妙な裁判が あつた。夫婦喧嘩をした。夫が 嘆つて 家を 走り出し，池に 身を投げた。細君も つづいて 走り出して來たが，夫の身投に 驚いて 救を 求めた。池の周圍に 十二人の男が 居た。皆 投身者を 見た。一人の若い男は 飛び込むべく 靴をぬいだ。然し 寒い日であつた。彼は

脱いだ靴を また 穿いた。而して 十二人の 見物男と，一人の細君の 目の前で 夫婦喧嘩の 敗北者は あはれや 溺死した。細君は 十二人の男の 卑怯を を罵つた。 裁判は 十二人を 自殺幇助罪に 問ふたか 如何か，それは まだ 書いて なかつた。 興味ある 問題である。見殺しは 無論よくない。然し 妻と喧嘩して 自殺する男を，他の男が 流行感冒の 危険を冒して 救ひ出す勇氣が 出やう乎？また 自身は 乾いた地に 立つて居て，他の男性の 無爲を 咎むる女を，十二人の男は 尊敬し得るで あらう乎？ 英吉利の裁判は 大岡式で 中々 面白い事が ある。私は 十二人が 有罪であつたか 否を知らぬが，これは 興味ある 問題で ある。

英吉利の法廷では 人間の裁判が 面白いばかりでなく，面白い動物の裁判さへある。何某の飼犬 Bob が 巡査さんに 吠えついて足に少少の 傷をつけた。巡査さんが 告訴して 犬に 死刑 の 宣告が 下つた。すると 其犬を 知つて居る 人人大勢が 連署して 平素の行狀を 申立て，死刑の 免除を 願ひ出た。 被告の犬が 法廷によび出された。眞黑の人中に 被告 Bob は 尻尾ふりふり 世にも無邪氣な顏をして居る。それが 裁判官の 心證を動かし，向後を誡めて 無罪放免と せられた なども，英吉利で なくては 決して見られぬ 裁判で ある。

新聞と 云へば，近頃の 英吉利の 新聞漫畫は 總じて 使はれ人の 跋扈，若い者や 子供の 早熟 と 跋扈，女の跋扈 畢竟 新時代の 新勢力の跋扈に 殆んど 限られて居る。 肥え太つた Bull さ

んの 改造活動は 見物である。何れにもせよ，あの 大戰が 世界の局面を 打破した事は 恐ろしいものだ。あれで 英吉利は 若返つた。また 若返りつつある。 それを 思へば アメロンゲンの維廉も飛んだ 敵役の 毒氣をぬいた にも 比せられる。何は ともあれ 一切を 使ふて 一切を 生かす 阿蓋の手腕には 全く以て 恐れ入る。

高からぬ山に 雪あり，雨にずぶ濡れた 岡の牧場に 黑白羊の散點する 南蘇格蘭の 景色は，何時しか 北英吉利に 移つた。Carlisle で 海近く，地圓を見て Wordsworth 等の 湖郷を 其方と 雲間に 隱見する 青い 遙嶺を 眺め，午後三時 Manchester に着いた。大きな 停車場。Lift で 荷物と共に 歩廊から 橋に 上つて，また Lift で 次の 歩廊に 移る。 妻が Muff と Scarf を 氣にするので，更に Glasgow の ホテルに 驛から 電報を打つ。

（二）

Midland Hotel は 素晴らしく 大きな Hotel で ある。 戰後と云ひ，殊に 近頃は 紡績株の賣買が 烈しい熱を 起し，成金が出來たり，亡びたり，凄まじく 人氣が 沸騰して居るので，此大ホテルも 滿員の繁昌。其 Reading room にも 雜誌の "Cotton" が幅を利かして居る。Liverpool が 近いので，此處には 殊に 亞米利加風が 吹いて居る かの やう。

彩共 ょ 右腕無しの 兵隊さん上りが 操つる Lift で，400 番室

に をきまる。全く 迷子になりさうな 大きな ホテルである。

食堂に下る。Glasgow より まさり，Einburgh と 雁行する料理。 食終つて，ゆるゆる 階段を上る時，今しも 自室に 入り行かうとする 立派な服装をした 四十格好の 婦人が 小戻りして，會釋した。日本に 往つた事が あるさうな。明日は 私共も 逗留と聞いて，では また お目に かかりませう と 愛想して 室に入つて往つた。 翌日は 私共も 終日 出あるき，翌朝は ホテルを 立つたので，其名さへも 知らずに しまうた。

其二

ROCHDALE

(一)

明治廿二年の五月であつた。緋飛白の單衣 白木綿の 長兒帶と 云ふ裝で 數へ年二十二の私は 熊本から 上京した。其前年の暮に 破れかぶれで 京都の同志社を 出奔した 事情が ゆるされて 二年ぶりに 親許に 歸つたわけである。 五月に 上京して九月に "如溫 武雷土傳" を 兄の 民友社から 出版した。私の嗜好は 最初から 文藝にあり，私の力は 宗教に あつたので，政治には大して 興味を 有たなかつた。John Bright なんか 私には 何でもなかつた。"如溫武雷土傳" は 其頃 Manchester School の コブデン，ブライト などに 共鳴して居た 兄が 私の筆を使つて 書いたものである。 材料から 校閲，序文から 廣告まで 皆兄の手に 成つて，私は唯 漫然として聽き，漫然として 書いたまでである。 廿三の春に出した 理査上 格武電も，廿五の秋に出した グラッドストーン傳も，似たやうな ものだ。 私の 處女作は 明治卅十年の春に出した "青山白雲" の スケッチ集である。然し 兎も角も 書いて，印刷されて，私の名を以て 一卷として 公にされたは，何と云ふても 武雷土傳であるから，私の處女作は 矢張 武雷土傳だ。

專門の型に 跼蹐し 拘泥の見に囚はれた 時代は，私にも 已に 大分 過ぎて居る。政治も 實業も すべての活動 すべての生活は 皆藝術で，一切の 知識は 宗教で あらねばならぬ 見地に立つ 今の私に，あの 正直者，あの本當の Democrat の John Bright は やはり 可愛い男の 一人である。Manchester に 來たのは，それから 十一哩しか 隔つて居らぬ Rochdale に 處女作で 緣を結んだ John Bright の 墓參を しやう爲で あつた。

（二）

十二月廿一日。雨がちの 日曜。辨當に サンドキッチ などつくらせ，汽車に 乘る。

Manchester から 一時間 を 出でない 距離 に Rochdale は あつた。Roche の 小川を 帶び，低い丘をかけて 建てられた Bright の 故郷は，人口十萬，煙突の 數多立つた 工業市で あつた。

Rochdale に 下りて，改札係の 爺さんに Bright の 墓を 問ふ。少しも 知らぬ。多分 共同墓地 だらうと 云ふ。自動車も 馬車も 日曜で 居ないが，電車が 走つて居る。私共は 兎も角も 電車に 乘つた。改札係の 爺さんが 跟いて來て，車掌に 私共の 行先を 何かと 言ふて くれて居た。

何とか Bright と 云ふ 名譽書記の 名を以て，Rochdale 看護

婦協會の 義捐募集の 廣告を 車内に 掲げてある。これが John Bright の 息子だらう，と 思ふ。改札係の 爺さんも よく 知らなかつたが，車掌も Bright の 墓地を 知らぬ。傍へ聞きした 五十左右の婦人が John Bright なれば Friend's Church に 葬られて居ます と 教へて くれた。Bright は Quaker で あつたから，Quaker の墓地に 葬られて 居る のだ。

私共は 教へられたままに ある所で 電車を 乘り換へ，ある停で 下ろされた。其處は 狹い裏町で，坂になつた，淋しい 巷路である。昨日から 降りつづき，今も 小雨が 降つて居る。唯有る角の 小さな家で Quaker Church を 問へば，五十餘の男が 細く 教へてくれた。私共は 行き過ぎて 居たので あつた。やや 後戻りして，阪路を 上りかける。誰やら 後から 呼ぶ。それは 先刻 路を 問ふ時 通りかかつた 二人の 男の子で つあた。其もでない と云ふやうに 手を 反對に 振つて居る。それでも構はず 上つて居ると，今度は 先刻 道を教へた男が 後から呼ぶ。民衆運動の 潮の如く 私共は また 反對に 行き過ぎたので あつた。私共は 匆々に 後戻りした。その人は 私共を連れて 坂の中途の 煉瓦塀に圍ふた 角屋敷の 赤錆びた 鐵門の内に入り，あれが Church の 玄關と 低い石段の方を 指し，これが墓地と 芝生の 一區を 指し，少しばかりの 謝禮を收めて 歸つて 往つた。

緩い 斜面になつた 緣の芝生に，やや黑むだ 白大理石の 板碑が 嵌められて，芝生も 碑面も 雨に うたれて居る。私共は 傘を

傾けて，足下から見上げて居るやうな平たい碑の面を讀む。

John Bright

Died

March 27 1889

Aged 77 Years

それつきりだ。"好いなあ"と私は妻と相見て云ふ。好い生き様だつた。而して好い眠り狀だ。私の武雷上傳にも"一句の讃辭を銘するなし"と書いて置いたが，正に其通りであつた。

阿父の Jacob Bright は 1851 年に死んで居る。それに"Aged nearly 76 years"とある。"Nearly"が好い。一紡績職工として Rochdale に移り來て劉苦產をなした阿父 Jacob さんの誕生なども しかと覺えられてなかつた平民的 Origin も，阿父の年齡をはつきり知らない息子の John さんの率直も，此一語に語られて居る。五十七歳で 1878 年に死んで居る Margaret Elizabeth Bright は John Bright の後妻で，1841 年に二十八歳で死んで居る Elizabeth Priestman は先妻である。此先妻に死なれて弱わり切つて居る處に，Cobden が來り慰め，勵まして共に穀と廢止の運動に活動しはじめたのだ。John Bright の政治的 Career は此先妻の死から發足して居るとも云へる。Bright 一族の外にも，さまざまの板碑が雨を浴びて横たはつて居る。

一禮して墓邊を去らうとする時，集りが果てたのか，扉が開いて婦人が二三人石段を下りて來た。黑い服のお婆さんが私共を見つけ，小戻りして會堂內に入るべく誘ふ。誘はるるままに私共は入つた。若い婦人がお婆さんから受取つて私共を內に請ずる。

前室の次ぎは三十疊敷程の廣間。木のベンチが數脚，卓子，Quaker 式に何の裝飾もない。禮拜は濟んで，男女五六人其處に居た。四十左右の連りに吃る人が主として應對する。牧師格の Moffat 君であつた。私は三十年前 John Bright の傳を書き，今日は Manchester から墓參に來た事を話した。皆の顏が輝やいた。M さんは John Bright の生前常に此會堂に來て禮拜を共にした事を語り，此處が卽ち Bright の席で，紀念の爲斯通り空席にしてある と Bench の一端薄い Cushion を剝いで木地を出して居る部分を指した。私も妻もかはるがはる其空席にかけて見た。M さんは John Bright の傳を書いた人の娘が居ると云ふて，三十許りの婦人を私共に Miss Robertson と紹介した。私は私の Bright 傳の材料の內に，主として William Robertson の"Life and Times of the Right Hon. John Bright"に據つた事を思ひ出した。William Robertson は卽ち Miss R の阿父である事が分かつて，小さな群の驚喜は大なるものとなつた。

(三)

Mさんは私共を直ぐJohn Brightの家に案内するのであつた。三人は傘をさして，會堂を出で，先刻私共の讃つて上つた阪を上る。John Brightの嗣子は父の選擧區Birminghamをついで久しく自由黨の名士で居たが，Boer戰爭で退隱し，今は靜に老を養ふて居る。父と同じくQuakerで非戰を主義とするに，其嗣子は今度の戰爭に出征し，埃及から駱駝に乘つた武者振りの寫眞を送つたりなどして，今父子仲違ひになつて居るさうな。Carpet工場など持つて，家計は豐らしい。RochdaleのQuakerは三十名。英吉利全體では二萬も居る。今度の大戰には，飽迄非戰主義を執つて，入獄した者もあり，出た者も衛生隊などに廻はつて，殺傷はしなかつた。Mさんの談話は時時其吃りで齟齬狀をなすが，氣の毒とばかり思はれぬ程一種の和らかく强い印象を其爲に發す。

此樣な話をしつつ私共は"One Ash"に來た。"One Ash"はBright邸の名である。もと大きなAshの木があつたからの名。邸は小高い處にあつて，可なり廣く，石佛花など植わつた路を玄關にかかる。二階建の質素な然し住み好ささうな家である。

私共は直ぐ導かれて階下の奥の小さな書齋に通つた。主

人は七十越した好ゝ爺のやうで，私共の來訪を喜んだが，私に英語が分かるか少し懸念らしく見えた。夫人も出て挨拶する。親子の仲違ひして，老いた夫人は淋しげに見受けられる。書齋には背革の同じ仕立ての英書のぎつしり詰まつた書棚が列び，其硝子戸の棧には"非穀法同盟から感謝の表として"と金字で署してある。英譯のClassicなども其内にあつた。Deskは父Brightの日用品。數脚の革椅子は非穀法成功で倶樂部解散の時，紀念に贈られたので，椅子の背にその旨が記されてあつた。

Brghtの畫像がある。白髮の爺さんの膝にもたれて居る六七歲の男の子は，當主人には甥に當る孫の一人で，日本にも往つた事があつたが，先年工場の汽罐破裂で變死した，と老夫人は悄然と語るのであつた。

主人夫婦は私共を案内して，階下の室室を見せる。人數が少ないのに，家が廣過ぎると主人はこぼして居た。Bright終焉の室は二階さうな。それは見なかつた。客間で夫人の取り出して來たLincolnのステツキを見る。Lincolnは Brightも推服して居た。同時に亞米利加もCobden, Brightの名をCaliforniaの一對の大樹に負せた程親しみを持つて居た。Lincolnのステツキは，金頭，黑檀のステツキで，最初誰かがLincolnに贈つたのを，Lincolnが在英米領事に贈り，米領事がまたFrightに贈つたのである。金頭には順順の贈呈が

順顧に 刻されて居る。Lincoln が 刺客の手に 斃れた時，遺骸を掩ふた Sheet もあるさうなが，それは 見なかつた。Lincoln の紀念碑 が 近頃 英吉利で 除幕され，米大使の演說に Bright の言など 引いた事も 思ひ合はされて，興味が 深い。好い 靈魂は 本當に 世界の つなぎ である。

廊下には Bright には 兄分の Cobden や Gladstone や また Bright自身の 畫像 塑像 數多 あるひは 掛り，或は 立つて居る。Reform Club で Bright や さまざまの 知名政治家の 集つて居る銅版額が ある。今の Bright 其人が Asquith 其他 自由黨名士 と一緒の 銅版も 掛つて居る。

私共は 客間で 茶の馳走に なつた。

廊下に 出た時，私は 電車の內で見た 看護婦會 費用義捐の內にと 言ふて，1 磅 Note を 贈らうとした。看護婦會の 名譽書記は，當家の主人で なく，同姓の 從弟と云ふ事 であつた。主翁は少し困つて，教會の費にしたら と 云ふて Mさん に 渡した。然し 私共が 日本に歸ると やがて Rochdale の 看護婦會の 名譽書記の Bright さんから 丁寧な 禮狀が 屆き，面會せず に 殘念と云ふて來たのを 見れば，矢張 最初 私の 言ふた 通りに せられたので あつた。

Mさんは 教會の費用の事で 云云し，主翁が 何磅出さうと 快く言ふのを 聞くともなしに 私共は 聞いた。

初代の Jacob さんは 純勞働者 から 築き上げた。二代の

John さんは 其處から 出發して 花を 咲かせた。三代の 主翁は少し 强弩の末の 感みは あるが，まだ ほとぼりが 殘つて居る と私は 思ふた。四代の 茶目も 確に 好い男に 違ひない。父子の 和睦を祈るの情に 堪へなかつた。

主翁夫婦の 健康を祝して，私共は Mさんと "One Ash" を出た。まだ 降つて居る。少し 往つて，私共の ランチの包みを 忘れて來た事を 思ひ出した。私を 押とどめて，Mさんが 一走り 取つて來て くれる。

（四）

三人は 會堂に 歸つた。午餐の用意が 出來て居て，私共 夫妻は 主人夫妻と 相對して 食卓に ついた。皆 默禱。日曜で 何もないと Mさんが 詫ぶるので あつた。パン，チイス，セロリイ，スキイト。私共の サンドキツチも 出た。Mさん夫妻は 結婚ト七年，未だに 子がない。私は ナザレの土人牧師 Mansur 君 夫妻の事を話した。Mさんは Quaker の立場から 平和に ついて 話した。私は Mさんの問に 答へて，日本に於ける Militarism の 現狀 と將來 を 話し，婦人の力でなければ 平和は 決して 來ない と云ふ私の 議論を 主張し，ナザレで 詠んだ 妻の和歌を 話した。"姉いもと 睦びし ひたに かたからば，戰ふ子等は あらじ あらせじ" と 云ふ歌だ。Mさん 頷き，Mさんは 感嘆して それは 翻譯して

遍ねく 知らすべき歌 と 云ふので あつた。

午後は 日曜學校が あるさうで，ぽつぽつ 教會の人が 來る。Mさんは 若い 仁王さんのやうな 髯無し 青年を 私共に 紹介する。George Nedderman と 云ふ。非戰 主張の爲，三年間 入獄したさうな。握手する。私の右の手が 碎けるかと 思ふ程 强い握手が 痛快で あつた。Nedderman 君は，日本にも 非戰主張者ご 官憲の 迫害を 受けた人が ありますか と 問ふ。私は 少少 面伏せで あつた。斯く言ふ 私自身 最初は 獨逸が 憎く，今でも 嗔恚の焰，憎惡の炎，燃え立つては 眞先きの 主戰論者に なりかねない 危險がある。私は 此愛す可き若者を 欺く事に 出來ぬ。そこで 斯く云ふた，日本で あなたのやうな人は まだ さう 多くない，然し 種子は あります，而して 種子は 小さなもの です。

Mさんは また 他の若者を 紹介するので あつた。Charles Fouchard. 入獄二年の 强者。

婦人や 子供も 來る。

Mさんは Quaker 教徒の 特殊の 服裝について 話す。今は 日常の風習も 變つて居るが，古來のには 捨てるに惜しい ものが ある と 云ふ。日本の禮容を 見たいと 云ふので，私は 靴のまま 床上に 端座し，兩手をついて，お辭義の 鄭重な所を 見せる。

Bright が 緣になつて，相識つた 昔の Puritan を 見るやうな 氣もちの好い 敬虔な 小さな群れに "神共に在せ" の 挨拶を 交はし，M夫人に 謝して，私共は 教會を 出た。Mさんは 電車

まで 私共を 送つて くれる。

(五)

Mさんは 中途に 私共を 唯有る家に 誘ふた。それは 先刻紹介された Miss Robertson の 家で あつた。Robertson 翁は 故人と思ひの外，八十五歳で まだ 生きて 居り，娘から 私共の事を聞いて，今 出て來た 白髯の顏は 欣喜に 溢れて 居た。私共は 手を握つた。三十年前 處女作としての ブライト傳の 日本の著者は，八十五歳の 英吉利の ブライト傳作者 と ブライトの 生きて住み死にて眠る Rochdale で 手を握つた わけで ある。Rさんは Mauritius 島で 生れ，Bright の 生時 親しく 此 Rochdale で 相識り，老夫人は 十三年前に なくなり，今は 娘の介抱に 老を養ふて居る。極東日本の しかも Rさん自身の著から 材料を得て ブライト傳を 書いた 日本人の來訪に 接し，其ブライトに 献げた愛が 日本まで ブライトを 及ぼすたよりに なつた事を 知つたのは，Rさんの 晩年に 思ひがけなく 咲いた 喜悅の花の 大なる 一つで あつたらう。私の 參考したのは 何年の 版で あつたかと Rさんが 尋ねる。しかと 覺えぬが，赤表紙の 厚い一册物で，Routledge の 版で あつた事を 話した。Rさんは 五册物に なつたのを 自から 抱へて來て，見せる。頁をめくつて，挿畫を 見せたり，自分の愛兒を 共に 賞翫したげで ある。Miss Rが 私共の 心急ぎを 承知

して，父御を 賺かし，Rさんを 手傳ふて 私共に贈る 父の寫眞に 署名させたりする。Rさんが 少し震ふ手に それでも はつきり と 署名した "執筆中の自身" の寫眞をくれ，尙 Bright の 寫眞など くれるので あつた。Bright 邸 "OneAsh" の繪葉書は 先刻 近所 の店から Mさんが 取り寄せて くれたのを 買つた。英吉利に 私 共が また 來るとも，また 會ふ事は 覺束なささうな R さんの 健康を 祝して，私共は Rさんと 懇ろに 握手を かはす。

Mさんが 電車の 乘換まで 私共を 送つてくれる。赤筋帽の 救世軍人が 行く。Mさんは 救世軍が Rochdale でも 好い 働を して居る 話をする。

Mさんに 別れ，汽車で Manchester に 歸る。停車場から 自 動車で Manchester の 目星しい處を 一わたり 廻はる。雨後の 街，夕暮近い見物は，大きな 建物の外構 を 見るに 過ぎない。廣 辻に 立つた Bright や Cobden 其他の 銅像も，唯 黑い人形の影 を 見るのみ。

今日は 喜ばしい 一日で あつた。

第八
EDWARD CARPENTER

(一)

十二月廿二日。午前九時の汽車で Sheffield に 向ふ。英 吉利には 珍らしい 長い 隧道がある。沿道には 雪も見えた。

十一時 Sheffield 着。Royal Victoria Station Hotel に入る。

Sheffield は 鋼鐵で 生きて居る。此處には 鑛鐵專門の 學校 もあつて，其處の一教授が 最近 鋼鐵の硬度を 在來のものに 倍す る方法を 發見し，英吉利政府が それを採用すれば 諸般の設備に 費用を要する處から，先ゝと 閑却して居ると，ほのかに 聞き傳へ た 亞米利加が 逸早く 人を派して 其發明傳授の 交渉を 開始した とか するとか 云ふ事で，新聞が 騷いで居た。其爲でもあるまい が，ホテルも 賑合ふて居る。見學の 若い日本人も 二人程 見受け た。然し 私共が Manchester に 往つたのは，紡績株の爲でなく John Bright の墓の爲であつたやうに，私共が Sheffield に來たの は 鋼鐵の爲で なく，其の近郊外の Holmesfield に Edward Carpenter の 村莊を 訪ふて 見やう 爲で あつた。

實は 私は Carpenter の 數ゝの著書を 唯の一册も 通讀 若く は 精讀して居ない。石君の "哲人 カアペンタア" に 序文を 書い

て居るが，あれは石君の爲でカアさんの爲ではなかつた。然し通讀精讀はしなくも，人物と思想の大要は領して居る。英吉利の好爺さんの一人である。John Bright の墓詣でした私共は此爺さんの村居を訪ねるも無駄ではあるまい自信がある。

Derbyshire の Holmesfield とだけは，Daily Mail の年鑑で分つた。然し金が一番よくもの言ふ Manchester では，ホテルの Hall Porter なんどは Carpenter も Holmesfield も知らなかつた。石君から何でも Sheffield の近在と聞いた覺があるのでやつて來た。此處のホテルでも Carpenter は知らない。然し Holmesfield と云ふ處はあると云ふ。私共は兎も角も往つて見るべく自動車に乘つた。

(二)

Sheffield の町をぬけ，場末の片側町をぬけ，郊外に出る。煤煙で眞黑になつた町から，打開いた田舍に出るのは好い氣もちだ。頃日來の雨で，如何に英吉利の道路も可なりわるくなつて居るのを，兵隊歸りの若い車掌は委細構はず突進する。毎日降つて，今日も降つて居る。

雨に曇る硝子窓を拭き拭きあたりを眺める。うねうねした低い丘は殘りなく拓かれ，今は十二月で畑は淋しいが，木立の處と，田舍家の點々として，のびやかな心地である。鋼鐵の市に

隣るだけに，對照が殊に著しく感ぜられる。

三十分の餘も走つて，全く田舍に來た。道の傍，丘のあなた，小さな家がそれではないかと度々私共を思はせる。最早 Holmesfield であらう。除隊間もなささうな，Khaki のおふるを着た車掌は，私から Edward Carpenter の名を聞き取つて，自動車を止めては下りて聞きに往き，少し走つてはまた下りて聞きに往き，側路に入り込んでは後戻りをしたり，汗としぶきにびつしより濡れた眞赤な額からぽつぽと湯氣が立つて居る。三度目に問ひに寄つた道傍の家は，田舍味たつぷりの Inn であつた。車掌は此度こそはと勢よくゆるやかな丘の路を走らせたが，また不安になつて自動車を止め，尙一度人家に聞いて，今度はまた後戻りして，道に傍ふた木立の盡くる處に自動車を止めた。

道の下手に形ばかりの門が開いて居る。入つて往つた車掌はやがて出て來た。

"此處です。今，出て來ます。"

"何，出て來る？"

"早く下りませう，洋傘なんか"

と妻が促す。

私共が下り立つか立たぬに，丈の高い爺さんが門口に現はれた。主翁である。帽もかぶらず雨の中に立つて居る。私共はかはるがはる主翁に握手する。

無造作に 先導する 主翁のあとから，私共も 遠慮なく 歩いて行く。物置きなど 過ぎて，食堂とも覺しい 室に入る。四十近い男が 立つて 挨拶する。門弟子の Merrill と云ふて，二十一年も 同棲して居る人と 後で知つた。翁は 私共を 暖爐近く 請じ，自身も 椅子引寄せて 何くれと 話す。妻の顏を 熟と見て，先に一度倫敦で お目にかかつたやうな，と云ふ。それは 日本人と類似が，主翁を さう思はせたのである。何れにもせよ，日本の男子は 時折 來り訪ふ人も あらうが，日本婦人の來訪は 恐らく 妻が最初であらう。

私は 日本の思想界が Carpenter 翁に 負ふ所について，あらためて 謝辭を 述べた。而して 年來の種蒔きが 生えて來て，面白い 世の中 に なつて來た事 に ついて 慶を述べた。"Toward Democracy" の 初版は 1883 年で，四十年近い 昔である。おくれ馳せでも 世が 眼ざめて來る事は，先覺の 唯一の歡喜で 且報賞であらねばならぬ。Canaan を 望んで死ぬのが 多くの Moses の運命であるのに，わが 蒔いた種の 幾分でも 自ら刈ることを ゆるさるる者は 幸である。

私は 露西亞について 翁の見込を 問ふた。露西亞は 畢竟 往く可き所に 往きつつある ので，新聞が 報ずる Po'scheviki の Excess には，中傷的の 誇大が多い と云ふ。私は 曾て Tolstoy を訪問した事を 話し，Tolstoy を 如何に思ふ乎 を 問ふて見たが，翁は あまり 懼びぬ顏をしたので，私は 其話を やめた。それは

私自身にも 覺えがある事で，飛びはなれたもの には 自然に Generous で あり得ても，似寄つたものの間には 自然に 自己を保護する意味で 隔てたい情が 動く。Bahaism の Abbas について 私自身 それを感じた。Abbas Effendi と 云へば，主翁も 會つた事は ないが，所說の要領は 知つて居る。"擴めた 基督教です" との 斷案で あつた。日本の 武斷的精神について，翁は二三の問をした。私は 日本人の 好戰國民でない事を 斷言し，可なり深く 喰ひ入つて居る それも 追と 過ぎつつある事を 話した。ラフカヂオ，ヘルンのものも 主翁は 讀むで居る。私は 自ら ペンの人であることを 名のりながら，これが 私のです と 主翁の前に 提供するものが ない事を 羞ぢた。而して 私の仕事は これからです，といつも言ふ事を 言ふた。

主翁は 七十五歲。しやんとして居るが，Cigar 持つ手が 震へる。魚と野菜を 重に食して居ると云ふ。"睡眠は 如何です？" と私は 問ふた。私は 私の父が 老齡になつて 睡眠の少ないに 困じ，數を 數へたり，詩を案じたり，色色に努めて 眠らうとして居た事を 知つて居る。私自身 五十やつと 過ぎたばかりで，時には 眠られぬ 夜がある。"よく 眠るです。身體も 健やかで，良心も 安らかで，な" と 微し哂ふて居る。"Love's Coming of Age" など 書いて居るが，翁は一度も 結婚した事は ないさうだ。"戀をなすつた事は？" とは 問はずして しまつた。印度の遊から 思ひついて，自ら 靴のかはりに Sandal を 作つて 穿いて居る事は 聞き知つて

居る。今日は 穿いて居なかつた。 雨天，雪泥には やはり 普通の 靴 長靴を 穿くと 云ふ事で ある。

翁は更に 私共を 一段高い 自身の書齋に 導いた。 此處にも 暖盧が 燃えて居る。 翁は 椅子を 足代にして 二三册の書籍を 取り下ろして 私共に 見せた。 石君の "哲人カアペンタア" が 出て來た。妻は私の序文を 指して，良人が書いたのです，と 言ふた。翁は 喜んで，石君の 消息など 物語つた。 "Toward Democracy" の 日本譯も，譯者の自署を以て 贈られて あつた。心を寄する 若い日本人の 寫眞なども あつた。 それ等が 如何に 此哲人の 血の氣の少ない生活に 溫か味を 寄與するかを 思ふ と，私共も 嬉しい氣もちに なるので あつた。翁は自著の "Pagan and Christian Creeds" が 近く 出版さるる事を 話し，自ら 寫眞や 住居の 繪葉書に 署名してくれ，"City of the Sun" の 譜を くれた。 日子日女への 贈り物に "City of the Sun" はふさはしい。 翁は Piano を よくし，曲譜なども 自らつくるので あつた。私は 横濱出發の 砌，書店岩君がくれた "Kleine Schriften" の 著者 ケエベル さんを 思ひ起すを 禁じ 得なかつた。

私共は 一時間の餘も 翁の靜閑を 擾はして，立上つた。 私共が來た時は，多分 晝食が 濟んで居た。翁は 何か "Refreshment" を と 云ふたが， もとより 私共は 辭した。日本に 來遊の期は 多分 あるまい との 事であつた。 それは Rochdale の "One Ash" の 主翁も 同じ事である。歩るくのは 若い內の事，七十過ぎ

ての 世界漫遊などは，仕事をもつ人には 望まれぬ。

私共は 書齋から 食堂に下りた。M さんが 私共に 園から 折つて來た 白い Christmas rose と 黃ろい Jessamine の 芳しい花を くれた。私の ボタン孔に Christmas rose の 一輪を ピンで とめて くれたりした。

二階建になつて居る 長細い 二段の此家は，門弟達が 師翁の 爲に 建てたもの さうな。前には 小さな 花壇の 黃ろい花が 雨にぬれて居る。物置きの中には，鷄舍があつて，五十羽の 鷄が 啄むで居た。 果樹園には，梨や桃など 百本から あつて，時には 自身 Hoe を とる事もある，と 主翁の 話で あつた。

師弟は 雨にぬれながら 門口まで 私共を送つて 來た。私共は 主翁の健康を 祝し，今日の よろこびを 述べ，師にも 弟にも 慇懃に握手して，待ちくたびれて居る 自動車に 乘つた。

（三）

今 後に殘した 靜寂な師弟の 生活について，私共は 自動車の 中に 語り合ふた。情慾ぬきの Tolstoy と 云ふやうな感が 私にはする。それは 清淨で，透明で，精舍のやうな，科學者の 試驗室のやうな 清さと 寂しさが ある。 悟り，觀じ，靜かな歡喜と，穩健な戰ひと，平らかな勝利との 其生涯は，好い生涯に 違ひない。然し 其處は Eden ではない。女氣が ないから，血の氣が 足らぬ。